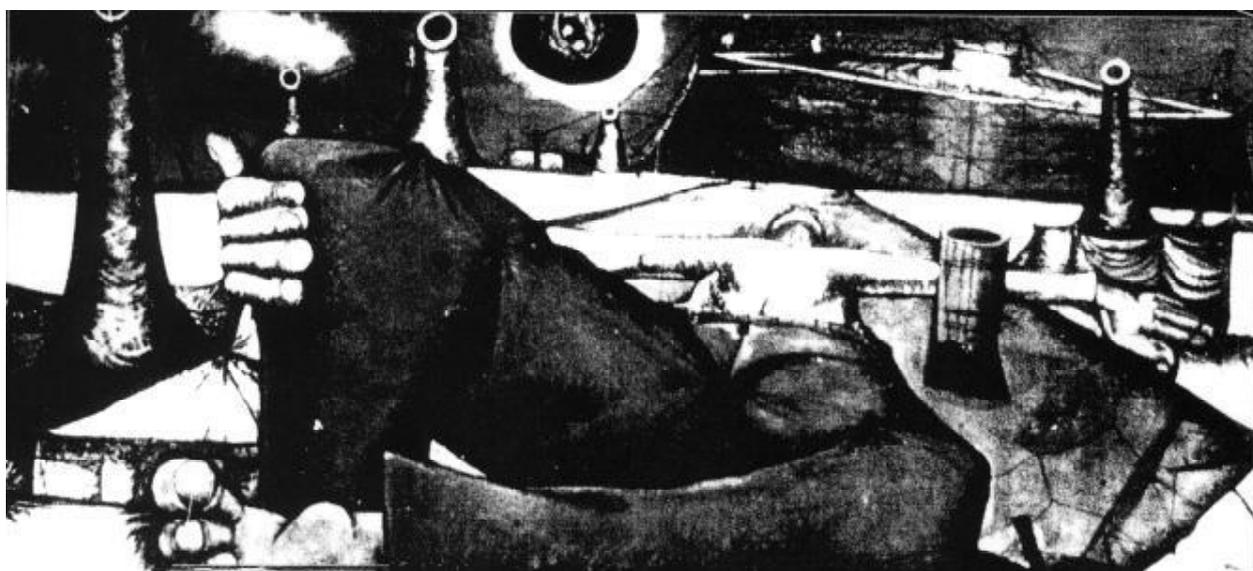

「拒否」の〈前〉線情報 No.4



(尾藤 豊作品集「失われた土地」から)

FOCUS 横議・横行・横結の動線を！——「安倍のつくる未来は
ない！民衆連合」の方へ……………2

IN/OUT 渋谷 望：予示的政治をめぐって……………36

「拒否」の〈前〉線情報

風間：「路上の群集評議会」！？

——三宅洋平の「選挙フェス」……………38

遠方からの風信

ゆみつぺ：風の吹く丘で手を振りあう人々への物語……………140

生・労働・運動ネット富山

目次

FOCUS 横議・横行・横結の動線を！——「安倍のつくる未来は知らない！民衆連合」の方へ ……………2

IN/OUT 渋谷 望：予示的政治をめぐって ……………36

『拒否』の『前』線情報

風聞：「路上の群集評議会」！？
——三宅洋平の「選挙フェス」……………38

はじめに……………38

I. 「B感覚」の系譜：ダンス・トゥ・デモンストレーション
……………48

II. 三宅洋平—その軌跡……………65

III. 三宅洋平—政治の言葉を越えて・言葉集……………87

IV. 「選挙フェス」はいかに語られたか……………104

V. 参議院選後の三宅洋平……………119

遠方からの風信

ゆみっぺ：風の吹く丘で手を振りあう人々への物語
……………135

FOCUS

「3・11／12」から3年余。この列島で展開されている多なる「拒否」の〈前〉線のありかをみさだめ、それらが拓く地平をさぐり、そこに「日本の『構成』的解体」のベクトルを描こうとする試み

横議・横行・横結の動線を！

——「安倍のつくる未来はいらない！民衆連合」の方へ

私・たちは、「安倍のつくる未来はいらない」という小さな集まりをもっている。以下は、その昨年11月－今年1月の集まりでの「問題提起」の収録である。

●「処士横議」

この10月に、武藤一羊さんをお招きして話を聴きました。武藤さんに、「安倍政権における戦後日本国家レジームの解体と私たちの側からの『対抗線』」というテーマで話していただきました。

残念ながら、時間的な余裕がなくてそこまで話がいきませんでしたけれども、レジュメを用意してくださっていて、その一番最後に『「処士横議」の開始が決め手。』〈資料・1〉という言葉がありました。

〈資料・1〉 II 対抗線へのプロセス

◆行動一原発一被害の深刻さ、広汎性、危険性、権力の無責任性・抑圧性一運動の草の根での多様な広がり、TPPなど他分野でも行動・運動は拡大；SNS などコミュニケーション；しかし個別テーマの運動は、個別の力量でも、連合の形でも、安倍国家改造権力全体との対峙線を形成していない；唯一、沖縄では、自決権をベースに拒否力が働いている；

90年代からの右翼言説の圧倒的主流化、社会変革言説の陳腐化ないしはゲッター化、新しい動きがおのがじしの展望を切り開いていない状況；このなかからいかにして社会的対抗勢力が出現しうるか。

◆安倍国家改造の幻想性に即して、ハードな現実を全面浮上させて仮想現実を消滅させることが基本；系統的な活動の組織；右翼言説がスタンダード化しているなかで、これは個々の事実の暴露だけではなく、言説と言説の闘いになしうるか；世論調査では、フクイチはコントロールされているという安倍を圧倒的多数が信じていない、しかし過半数が安倍を支持；多数者の意識に切り込んで、政治的

意見を表明し論争する環境をつくるイニシャチブ;(意見が違えば沈黙か、誹謗中傷か—平和主義原理の沈没の表れ)。

◆課題の連関を運動の連関に媒介する意識的な作業、活動;課題間の現場交流、共同認識の形成、課題間だけでなく運動文化間(いくらか世代間)も;アジア中心に国境を越えた同様の作業;交流、認識共有が、単発に終わらず、抵抗戦線の形成につながっていくためにはどうすればいいか、どのようなリーダーシップが必要か、可能か;

◆安倍は継承原理による家族から国家、対外関係にいたる彼らの目標を掲げている;それにたいして民衆の側は何を共有し、対置するかを言説の闘いのなかで、明らかにして行くことが不可欠;どのような手段で?どのようなプロセスで?

◆その上に議会政治の領域で、安倍路線に対抗する政治勢力をどのように出現させるか、という問題が避けて通れない。オリンピック政治期間は二つの国政選挙を含む;原発、憲法、沖縄、靖国など基本テーマで安倍と行をともにしない議会政治勢力の形成;

◆「処士横議」の開始が決め手。

〈資料・1〉武藤一羊「安倍政権による戦後日本国家レジームの解体と私たちの側からの『対抗線』」

(2013.10.27 於富山)

私・たちは、その言葉に非常に刺激を受けて、「安倍と対峙する」ということについて考えました。それは、少し乱暴に言うと、「横議・横行・横結の動線を！」ということ。安倍のつくる未来はいらない!民衆連合」の方へ向かって、ヨコのコミュニケーションの論議を重ね、その中でいろんなものの動きが結合していく。そういう動く線をくっきり創り出していくことが必要なのではないか、というふうに受けとめたわけです。

御存知の方もおられるかもしれませんが、かつて藤田省三という人がいました。政治思想史研究という分野で大きな仕事をした人です。丸山真男という人がいますが、丸山真男の門下というわけではないのですが、丸山真男を継ぐような大きなインパクトをもった人です。彼が、『維新の精神』(1967年、みすず書房刊)という本を書きました。どうして1967年かというと、当時の日本政府は、「明治維新百年」として盛大に祝いたかったわけです。それに対して、藤田省三は、「いや、お前らの言うようなことじゃ全然ないよ。『明治維新』というものをつくっていった精神ってのは、そんなもんじゃないよ」ということを言うために、この本を書いたわけです。

幕末の勤皇の志士たちが、「明治維新」の結果として、まさに「天皇制国家」をつくりあげていく。これはもう、見る人が見たら、かなり人工的だということがわかるというものでありながら、同時に多くの民衆をその中に巻き込んでいく。「天皇制」が、ほとんど自然的感情というか日本的自然みたいなものに接続されているような、ある種の美意識みたいなものとして、民衆の間に浸透していく。「天皇制」というのは、きわめて人工的につくった精妙で巨大な装置だった、ということです。そうい

うものが、結果として「明治維新」によって創り出されていくわけですがけれども、「明治維新」というものを用意した精神というものは、それはそれでちゃんと見なければいけないのではないかということが、藤田省三の言いたいことです。その核心にあるのが、「横議・横行・横結」つまり、「処士横議」です。

「処士横議」の「処士」は、日本語ですが、ほとんど死語に等しいのですが、幕藩体制下の武士という身分から外れた者です。当時の幕藩体制下の諸藩の現状に飽き足らず、また、幕府の政治そのものに対する不審や否定の意識の中で、正統な武士のもうひとつ下の層が、藩を脱藩して、まさに浪人になるわけです。浪人というのは、むりやり浪人にさせられるというイメージが強いですがけれども、その人たちは自ら進んで浪人になっていく。脱藩浪士として登場してくるわけです。それが大変おもしろいのです。

その人たちが、細かいことは省きますけれども、京都、伊勢から九州の辺りまでをやたら往ったり来たりするわけです。そういう中で、当時の言論圏を二分するようなことをしでかしていく。欧米帝国主義が眼を爛々と光らせてアジアを狙って進出してきている。それに包囲されながら、いかに「海防策」を立てるかというのが、彼らの基本的なテーマでした。開国か攘夷か、勤皇か佐幕か、ある種の重層的な論議を展開していく。まさに脱藩浪士＝処士の「横議・横行・横結」の全国展開だったわけです。そのことを、〈往来の政治〉とでも言ったらいいのではないかと思います。例の司馬遼太郎の『龍馬が行く』は、まさに〈往来ぶり〉を描いたものだと思います。

そういう、時代が動くという感じ、今までのようにはいかないんじゃないかということが、少しずつ日本列島をおおう空気のようにひろがっていく。そんな中で庶民の世界でも、有名な「おかげまいり」や「ええじゃないか」という、乱舞というか乱行というかそういうものがひろがっていく。

日本語の「横(オウ)」という言葉は、必ずしもいいイメージではないものが多い。だけど、この「横議・横行・横結」というのは秩序を否定しようとしているわけですから、秩序にとって良くないイメージであって、そういう意味でのプラスイメージで考えていいんだと思います。藤田省三が書いた『維新の精神』は、「処士」の「横議・横行・横結」が、いかに「明治維新」を招き寄せたかという話ですから、それはそれで大変おもしろいです。読んでいただければ、と思います。

いまは、そのうちのある部分を紹介しただけですが、「維新」という言葉自体がきわめて日本的風土に根ざした言葉であって「革命」というのとは違う。「王政復古」という言い方をしたように、「復古」なんですよね、いにしえを取り戻す。その後彼らは、どういう価値を押し出したか。それこそまさに「天皇」なわけですね。「天皇」を軸にする、後に「天皇制」といわれるような、人工的な構築物にいたる。「天皇」というものを徹底的にシンボルとして使うわけです。まさに人工的、作為的につく

られたものとして、「天皇制国家」というものを誕生させていく。これは有名な話ですけれど、彼ら自身は、「天皇」なんて言っていないんですよ。「あの玉をどうしようか」とか「うまくあの玉を使おうよ」と、「玉」という言葉で「天皇」を呼んでいます。そういう意味では、きわめて意識的に「天皇」というシンボルを、まさに作爲的に使うということに徹している。

タテのコミュニケーションシステムの上に成り立っていたのが、幕藩体制だった。戦国時代の、それこそ武士たちが横行していた状態を、スパッと止めたみたいな状態からスタートするわけです。そこはヨコのコミュニケーションが満ちあふれていたはずなんだけれども、まるでストップモーションで動きを止めたかのようにして、そこにどンドンいろんなものを付け加えていく。そういう中で、タテのコミュニケーションができてくる。士農工商と呼ばれる身分制も含めて、まさにタテのコミュニケーションによって維持されてきたのが、幕藩体制だった。それに対して、ヨコのコミュニケーションというものを徹底的に使ったことが、脱藩浪士たちのやったことです。〈往来の政治〉とでもいうような新しい政治のスタイルを、そこに生み出したわけです。しかし、残念なことに、彼らのつくった「明治国家」の中で、ふたたびヨコのコミュニケーションは封殺されるというか、圧殺されていく。勤皇の志士たちは、多かれ少なかれ、その後の明治政府の中で成り上がっていくんですね。

「横議・横行・横結」という人びとの関係のつくり方を、コミュニケーションの経路を、いまあらためて自分たちで取り戻すこと。そういう在り方を創り出すことが、大事なのではないかと思います。幕藩体制をひっくりかえすことになった動きとして、「横議・横行・横結」という人びとの動き方、あるいはコミュニケーションのかたちのありか。そういうものが、それ以来いろんなかたちで模索されていきます。その流れの一つが、富山の米騒動に発し、1918年以後大正デモクラシーというところへ流れこんでいく、暴動を含む民衆の騒乱です。民衆暴動というものは、あるいは民衆騒乱というものは、必ず伝播していく。伝播しない暴動とか騒乱は、逆に言えば偽物なのであって、必ずそういうものはヨコに拡がっていく。

そういうふうなことが、かつての戦前の日本にもありました。やがてマルクス主義のもとに、共産党を中心とする左翼の勢力が生まれますが、残念ながら、それらはヨコのコミュニケーションに満ち満ちた活動であったかということ、そうではない。左翼は左翼で、タテのコミュニケーションしかない、という側面が濃厚だったわけです。

そういうことに対して、明治維新を創り上げた「横議・横行・横結」の精神、その系譜に立つものは、僕は、〈1968〉年だと思っています。これは余談になりますから省略しますが、ひとつだけ言います。

〈1968〉年前後というのは、学生あるいは青年層を中心とした、一種の騒乱状況があった。学生に則して言うと、だいたい大学で、大学の機能を麻痺させるバリ

ケードというものをつくるわけです。そうすると、バリケードを守るためにも、そこにいろんな人たちが寝泊まりする。そういう中で、バリケードを転々として全国を渡り歩く人間がでてくるわけです。いろんなヨコのつながりから、「あそこに行ったら、ぜひあの人のところへ行ったらいいよ」というようなことがいろいろでてるわけです。一宿一飯の恩義じゃないけれど、結構いろんな人がやってきたなあと、今でも覚えています。そんなふうにして、ヨコのコミュニケーションが、それなりに生まれようとしていたということがあったかと思えます。

それから40年経って、自分たちのところにぐっと引き寄せてみたときに、処士たちが「横議・横行・横結」していく中で生まれてきた〈往来の政治〉と言っていいような新しい政治というものを、「3・11」以後、私・たちは生んできたのか、新しい政治は生まれたのかということが、いま本当の意味で考えなければいけない「問い」だと思います。言い換えると、「『3・11』以後の、この列島における社会諸運動は、どういう政治表現を獲得しているか」という「問い」です。

原発をめぐる「3・11」以後の、とりわけ2012年から2013年にかけて、「官邸前」辺りで、人びとが大きく動いた。そういう動き方というのは「3・11」前後から世界的に展開されてきた〈オキュパイ〉の運動の、この列島において現れた現れ方と見たほうが見やすいということがあると思えます。「官邸前アクション」の乱舞とでもいうようなものに代表されるような、今までにないアクションのありようが生まれたと思えます。「原発反対」とか「再稼働をするな」ということで、たくさんの人びとが「官邸前」に押し寄せて、毎週それを欠かさずやってきた。それはそれでたいしたことだと思います。「官邸前アクション」というのは、いろんなものが流れこんでいますから、単一の色合いだけで判断することはできない、とも思えます。しかし、そのことが、現に存在している今の日本の政治に、どういう亀裂なりインパクトなりを与えたか、という点から視ると、これはまだまだ掠っているだけという感じが強い。別に日本の政治のあり方が、両院議会の選挙だけですべて表せるということではもちろんないですが、端的な見やすい例でいえば、安倍が再登場した衆議院選や、去年の参議院選であっても、「3・11」以後の日本列島上の社会諸運動が、政治表現を獲得したということにはなっていないと思えます。そのところをどうするんだ、ということです。

まさに「セキュリティ装置」としての国家のネオリベ／ウォーフエア的再編に抗して、いろんな声がさまざまな運動領域からあがっている。だけど、それを、「安倍と対峙する」というところへ向かって政治化しているかといえば、残念ながら、いま僕・らにとって見えているわけではない。

〈資料・2〉

これらはすべて正しいし、正しいことは百度も主張され、このコースの危険性について百

度も警告が発せられなければならない。しかし、もしわれわれが、右のような一般的規定の確認にとどまるなら、われわれはこれらを中曽根政権の行動の説明に使うにとどまるであろう。われわれの分析が、既成の図式によって中曽根政権の性格を説明するということにとどまる限り、そこからは「中曽根政権を打倒しよう」という一般的呼びかけしか生じない。この呼びかけは具体的であるようにみえて、実はきわめて抽象的である。なぜなら、「中曽根を打倒しよう」と、呼びかけたとたんに、われわれは、「ではいかにして？ いかなる対決点を手がかりにして？」という問いにさしもどされるからである。この水準においては、われわれは、「反中曽根のすべての勢力を結集して」と答えるしかないであろう。これが八三年六月段階におけるわれわれの姿勢である。出発点としてそれが必要不可欠であるにせよ、このような結集は、自然発生的な反中曽根感情あるいは個別戦線の利害にしか依拠できないので、それだけでは持続的で系統的な大衆的政治運動をささえることはできない。つまり、次々に鎖をたぐり寄せることのできる政治上の「環」をつかむことには、まだならないのである。

われわれは一般的に正しい規定を百回繰り返したあとで、百一回目から、それらの規定が、世界と日本の現実の中で貫徹される際の葛藤と衝突、分化と分裂、逆説と綱渡りに眼を向け、その中で現実のあげるきしみと悲鳴に耳をかたむけ始めなければならない。一般的に正しい規定の現実性はそこにこそ存在するからである。本来の政治闘争はこの百一回目から始まる。

〈資料・2〉『運命共同体国家』のかなめをばらせ！

(「新地平」83年7月—後に「日本国家の仮面をはがす」1984年社会評論社に所収)

●「百回の論評、百一回目からの政治闘争」

かつて80年代に、『80年代安保論争』(?) というようなものがあって、武藤さんの『百回の論評、百一回目からの政治闘争』という発言があった。〈資料・2〉

これは象徴的なことだと思って受けとめてほしいのですが、当時は、中曽根登場期です。今で言えば安倍ですね。いま、「安倍はこうだ」とか「安倍のねらいはここのなんだ」とか、「安倍はどこへ行こうとしているんだ」とか「安倍の野望はこうだ」とか、論議されています。そういう論議をすることと、「安倍をどう倒すか」に向かって論議を集中していくこととは、残念ながら全然別です。

「100回論議して、じゃあ101回目からは政治闘争に本当に踏み出すんだ、ということが必要だ」と武藤さんは言いたかったと思うのです。10月末に、武藤さんが来られたときに、最後にちょっと聴いてみたんです。武藤さんは、「100回の論議」を「風呂屋の富士山」を例にとった言い方をされていて、「問題は、その登り口をちゃんとみつけることなんだ」というような話をされていたと思います。「101回目からの」ということは、そういう意味なんだ、と。

現在、とりわけ「秘密保護法」の登場をめぐって、いろんな論議がありましたね。その中で「100回の論議」がされているのかもしれないのですが、「101回目からの」ということになっているようには思えない。確かに世論の中に大きなインパクトを

10月15日(火) 18時半スタート

場所:永田町首相官邸前

呼びかけ:10.15 実行委員会

★生きることもままならない増税、強権、人権無視の安倍自公政権に” NO ！”の声を突きつけよう！

安倍自公政権が衆参「ねじれ」状態を解消し、「安定多数」となって最初の通常国会が開催されます。

オリンピック誘致を成功させ、支持率も上がっているという安倍首相。しかし、この政権にやりたい放題をさせてしまったら、私たちの生活に待ち受けているものは.....??

オリンピックの誘致成功は、福島を切り捨て、「汚染水はブロックされている」という世界に大ウソついで盗み取ったモノ。

そもそも「自公安定多数」だって「TPP 断固反対」と大ウソついて票を集めて小選挙区制のマジックで奪い取ったモノ。

目的のためなら手段を選ばない。それが安倍政権の本質。そして、その「目的」は私たちの生活を破壊しようとするものばかり。

企業・経営者のやりたい放題、国家ばかりを強くして、戦争の出来る国にまっしぐら。オリンピックで「ニッポン！ニッポン！」を大合唱して、新しい「大日本帝国」の完成というシナリオまで見えるというもの。

安倍政権が「安定多数」?ならば私たちが揺さぶって不安定にしてやろう！

「私たちの” NO ！”」を持ち寄って、私たち民衆自身の”YES ！”をつくりだそうよ！

10.15実行委員会 「園良太氏からの転送メール」

10月15日午後6時半すぎ、220人を集めた「秘密保全法案に反対する市民集会」が行われた衆議院会館のすぐ目の前の国会記者会館前では、激しい雨の中、約60人が官邸に向かって「国会開会の日に STOP！安倍政権私たちの NO ！首相官邸前アクション」というマルチシューアの抗議集会を行った。

安倍のつくる未来はいらない！人びと、火炎瓶テツと仲間たち、さよなら原発みなど、主権在民を実現する会、東電前アクション!、フリーター全般労働組合、ヘイトスピーチに反対する会、平和のための埼玉井戸端会議、破防法・組対法に反対する共同行動、反五輪の会、ふくしま集団疎開裁判の会、経産省前テントなどなどバラエティーに富んでいた。各団体の若い代表が次々と声明を読み上げ、火炎瓶テツもシュプレヒコールをリードした。

若いスピーカーたちは次々と声をあげた。

(.....)

降りしきる雨の中 1時間半の抗議集会の最後に、主催者代表は官邸に向かって語気強く訴えた。「安倍首相、貴方たちのダンスパーティーは、もう終わりだ。貴方にこれ以上、浮かれたダンスを

踊らせない。貴方のその足は、私たちが踏みじる足、社会を踏みじる足だから、私たちは、貴方をこれ以上、前には進ませない」

その後も、ずぶ濡れの参加者たちによる、原発再稼働反対、原発輸出反対、汚染水垂れ流し反対、秘密保全法反対、共謀罪廃止、オリンピック東京開催返上、集团的自衛権容認反対、解雇自由の「経済特区」反対、生活保護引き下げ反対、憲法 96 条改悪反対、辺野古基地建設反対、オスプレイ配備反対、韓国・朝鮮・中国敵視政策反対、消費税増税反対、TPP 参加反対、偏見差別反対、安倍首相虚偽発言撤回、戦争反対など、マルチイシューのシュプレヒコールが続いた。

国会開会日：官邸前マルチイシュー抗議「安倍首相、貴方たちのダンスパーティーは終わった」

〈資料・3〉（「マルチ」イシューデモ）（「レイバーネット日本」ブログより 2013.10.16）

原発再稼働、原発輸出、汚染水・・・と、いろいろなものが並んでいます。（こういうことをみんな反対しているじゃないか）「私・たちの“No！”を！安倍に突きつけよう」。そのときに、例えば、誰かがこの中のAの問題についてなんとしても多くの人に訴えかけたい。そこから安倍を撃ちたいんだ、と。誰かはBのところから。誰かは、Cのところから。そのA、B、C、D、・・・というふうなところを、そこにいる人たちが、「私はAしか言わない」というのではなくて、誰かがAと言えば、みんなもAと言ひ、誰かがBと言えばみんなもBと言う・・・。それを上手に繋いでいく。ひとつひとつの単発のシュプレヒコールをやっているんだけど、それにある種の連続性があるんだということを、言っている人間たちにも、周りで聴いている人たちにも感じさせる。これは、僕らの年代の人間にとっては、全然近寄り難い、一種の「芸」だと思えますが、そういう「芸」の持ち主が、東京辺りにはいっぱいいるんですね。パフォーマンスの技量がすごく高いし、アートに近い技術だと思います。そういうものを自由自在に使いこなしながら、「シングルイシュー」を「マルチイシュー」の連続性として表現しています。

それからまた、去年の12月1日に、東京で、「このままでいいのか わたしたちが選ぶ〈未来〉は？」というシンポジウムがありました。〈資料・4〉をみてください。

〈資料・4〉

12・1シンポジウム

「このままでいいのか わたしたちが選ぶ〈未来〉は？」

趣意書

安倍内閣は景気浮揚に名を借りて、金融緩和・消費税引揚げ・TPP 参加交渉をはじめ、格差・

貧困を拡大し、農業・食の安全・保険・医療など生命の危機に直結する致命的な生活破壊の政策を次々と打ち出しました。そればかりでなく、国内の原発は事故原因も安全性も確認せぬまま再稼働に舵を切り、原発輸出も推進しようとしています。2020年東京オリンピック開催決定は、汚染水垂れ流しの実態をはじめ、放射能の危険値を示す情報の全面的・長期的な隠蔽を正当化する格好の口実となるでしょう。

原発の維持拡大は、使用済核燃料再処理技術をはじめとする日本の核科学技術を軍事戦略上不可欠とする、アメリカの強い意志を汲むものでもあります。3・11以降の過程で、わたしたちは、独立国家には常識的に考えられない対米従属の病膏盲ともいべき根深さを見せつけられてきました。ドイツにできる脱原発が、日本にできない原因は、敗戦と占領政策由来の、この従属的癒着にこそ求められるべきでしょう。3・11以後の過程で起きた様々な出来事によって、戦後日本に維持された「国体」が、敗戦後68年に渡るアメリカの強い拘束の対価であったことが、覆うべくもなく露呈されました。

当然のことながら、敗戦時以来続いてきたアメリカの世界戦略への奉仕・隷属の密約の帰結は、原発の維持拡大にとどまるものではありません。直接には核密約・基地自由使用・無際限の思いやり予算の拠出と結びつき、沖縄の住民に限りない犠牲を強い続けることと直結しています。オスプレイの導入と住民感情を蹂躪する傍若無人な飛行訓練はその象徴です。

国際社会の通念では考えられない無理筋を押し通すために、安倍内閣は、尖閣諸島や竹島（「独島」）を巡る中国・韓国との領土紛争や、朝鮮民主主義人民共和国との軍事的緊張を利用し、時には日本の側から挑発して、主権侵害の危機を過剰に煽りたてています。軍事危機の煽動は、アメリカ軍事産業の利益に奉仕するものでもあります。同時に、内政において、集団的自衛権合憲化、9条改憲・国防軍創設、天皇元首化、さらには立憲主義を蔑ろにする憲法の国民の義務規定への性格転換を画策するためのものでもあります。あまつさえ、安倍内閣は、特定秘密保護法制定も武器輸出三原則の見直しも、今国会で強行しようとしています。安倍の意を汲んだ教育再生会議の動きにも強い警戒が必要です。センター試験の廃止・再編は氷山の一角で、教育にイデオロギー統制を強めて来ることは必至と考えなくてはなりません。また、政府が近隣諸国による主権侵害の危機を煽動することは、在特会などによる差別的な排外主義の煽動に荷担し、助長するものでもあります。

しかし、二つの国政選挙では、20年に渡る低賃金と生活苦からの脱出を願う、少なからざる主権者が自民党政権に目前の期待をかけたこともあり、さらには選挙制度の欠陥も手伝って、自民党を勝利に導く結果となりました。また、現在、権力・資本・諸差別と闘う運動相互の間に、深刻な相克があることも率直に認識する必要があるでしょう。このような政治的環境は、諸運動の短期的な勝利の道が困難を極めていて、共通の目的を達成するには、互いに異なる性格の諸運動相互の、強い結束・同盟を可能にする、認識の共有と連携の知恵が不可欠であることをわたしたちに示唆しています。

いま、諸階層・諸運動が互いの違いを留保しながらそれを超えて結びつくために共有すべき共通認識は何なのか、相互の矛盾を力に変え、多様な社会運動が連携するための共同の知恵とは何なのか、それを模索し見出すことが不可欠です。また、そのためには、現代世界の通念となっている既

成の価値観を覆す新たな社会構想への理論的・実践的模索もまた必要不可欠です。私たちは、これらの課題を巡る討議の場を設けたいと考えました。そのために私たちは、12・1シンポジウム「このままでいいのか 私たちが選ぶ〈未来〉は？」の開催を準備しています。志をともにして下さる方々に、集会の成功と目的の達成に知恵と力をお貸し下さることと、集会に参集され、討議に参加して下さることを心から訴えます。

【第一部:講演】

11:00 ~ 12:50

・白井聡(文化学園大学教員)……「純化する敗戦レジーム」

*『未完のレーニン』等、ユニークなレーニン論の著作もあるが、本年3月刊行した『永続敗戦論—戦後日本の核心』が、大きな反響を呼んでいる。同書で「1945年以来、われわれはずっと「敗戦」状態にある。「侮辱のなかに生きる」ことを拒否せよ」と主張している。

・山口幸夫(原子力資料情報室共同代表)……「原発依存に替わるオルタナティブな社会」

*物性物理学専攻。米ノースウェスタン大学、東京大学をへて1998年よりNPO 法人原子力資料情報室・共同代表。「ぷろじえ」(1969)、「ただの市民が戦車をとめる会」(1972)、「くらしをつくる会」(1974)、「三里塚ワンパック野菜運動」などの設立と運動に参加。共著『1960年代 未来へつづく思想』(高草木光一編、岩波書店、2011)。

【第二部:報告と討議】14:00 ~ 17:30

《報告》14:00 ~ 16:00

- ・大橋由香子(「SO SHIREN のからだから」メンバー)……「脱原発運動と『母性』をめぐる」
- ・菅野芳秀(山形・置賜百姓交流会世話人)／反TPP ……「農業・農村からのオルタナティブ」
- ・柳 充(連帯労組関西生コン支部副委員長) ……「『共生・協同』社会をめざす労働運動」
- ・豊見山雅裕(沖韓民衆連帯代表) ……「アジアから基地をなくそう！—沖韓連帯の活動から」
- ・湯浅一郎(ピースデポ代表) ……「オスプレイと原発再稼働の関係」
- ・八木健彦(経産省前テントひろば) ……「原発と地域社会」

《質疑・討論》16:15 ~ 17:30

〈資料・4〉「シンポ『このままでいいのか わたしたちが選ぶ〈未来〉は！』」(チラシより)

これは盛りだくさんの項目をもっているのですが、うまく紹介できませんけれども——このようなときであるからこそ、わたしたちはどのような新しい社会構想をもって、それに立ち向かうのか。このまま安倍にやられるままでいいのか、と。わたしたちが選ぶ未来は、どういうものとしてあるのかを、大まじめに論議しようということだと思います。すごく壮大な枠組みでやっているわけです。言っていることじたいはもっともなことで、誰も異論を唱えにくい。だけど、いまこの段階で、「新し

い社会構想」と言うのかと、気になります。これだけ総花的にやって、議論がどこかに行きつくわけがないと思いますけれども、でもこんなふうに壮大なチャレンジをする人たちも、一方にいます。

いま、目につく試みを、3つあげてみました。けれども、やっぱり、「拒否」の強度みたいなものをもっと高めるといことがなければ、「新しい社会構想を・・・」と言ってみたところで、また机上のプランにすぎないことをやるだけじゃないかというようにも思います。問題は、「拒否」の強度みたいなものを、どうやって高めていくか。それをまさに『『拒否』の前線』として、どういうふうに創り出していくかということだと思ひます。

●「社会諸運動+政治勢力」ブロックの空位—「変化の手前の現在」! ?

さまざまな営みがあり、試みがあり、工夫があると思うのですが、残念ながら、安倍と対峙する〈前〉線が形成されているとは、思えない。そういう現状の、社会的な基盤になっているもの、根拠になっているものとはなんだろうと思うのです。

いわゆる「戦後」という時間の中で、ながらく社会運動と政治勢力との間に、ある種のブロックが形成された時期が続きます。これは、「戦後民主主義」というものを担ってきた政治勢力、具体的に言えば、総評+社会党(共産党も入る)という政治ブロックが、日本でいえば1950年代、60年代と続いてきた。それが、自民党サイドからの「憲法改悪」を阻止してきた実体的な力であった。そういう「社会諸運動+政治勢力」というかたちでのブロックが存在してきたことは、客観的な事実であり、日本の社会運動の歴史上、そのことをはずすわけにはいかない。その政治ブロックから外れているところで生起した、いわゆる'60年代以後の新左翼は、その政治ブロックを解体する力を、残念ながらもち得なかった。

しかし、今でもそのブロックが有効かということ、「有効じゃない」ことがはっきりしているわけです。問題は、それに替わる何かが、そこに生まれていないということです。安倍と対峙するものが生まれていない。だから、今では、「護憲」・「平和と民主主義」層というのは、丸裸に近いわけです。全国各地で「9条の会」のようなものがつくられていますが、ほとんど丸裸です。しかも、「護憲」・「平和と民主主義」層というのは、いわゆる戦後の日本の高度経済成長を担ってきた人たちでもありませんし、その中で自分たちの個的利害が貫徹されることを求めてきた、そういう層でもありますから、そういう両義的な側面があるわけです。だからこそ、「憲法改悪」に対する、ひとつの抑止力になってきたわけです。しかし、それをさらにもうひとつ前に進める力がない。丸裸に存在しているだけです。「社会諸運動と政治」というレベルにそれを表出するということのありようが、ひとつのブロックになるようなものが、存在しなくなっている。

そうなって久しいのですが、現在の時点が、それに替わる次のものが生まれてく

る「変化の手前の現在」であるという言い方をする人がいます。小熊英二という人がいます。〈資料・5〉は、その人と他の二人の人との座談会があって、そこから取りました。眺めていただけたらと思います。

〈資料・5〉

小熊 そもそも、保守と革新という枠組み自体が大きく変容しています。

「55年体制」の特徴と言われる「保守」と「革新」が、現在のイメージで固定化したのは60年代後半くらいです。高度成長が軌道に乗り、社会主義革命の可能性が一部の活動家や知識人を除いては真剣な課題から退いた。そうすると、特に有権者レベルでは、「保守」と「革新」の対立軸は、もっぱら外交・安全保障と憲法をめぐる区分となり、経済政策をはじめとする内政面では大きな違いはなくなった。

さらに言えば、当時のほとんどの国民は、日米安保や憲法9条への賛否を、「外交」とか「安全保障」の問題として考えていたのではなかった。それは政治哲学者がむりやり分類する際につけた名称であり、ほとんどの日本国民は、「日本は平和国家なのか、戦争をする国なのか」という国是の問題、ないしは、ナショナルアイデンティティの問題として考えていたのです。「アメリカは自由の国なのか、そうでないのか」というのが、「外交」とか「経済」とかの問題でないのと同様です。それは、当時の多くの国民にとってみれば、「日本で社会主義革命は起きるのか」と言ったことより、ずっと重要な問題だった。

しかし、現在では、そういった対立軸自体が、特に一定化の年代には共有されなくなってきている。いまでは、それとは、違う対立軸が現れてきています。

つまり従来の保革の対立は、特に70年代以降は、業界団体や労組といった組織を中心とした政治になっていった。それを「保守」しようとする人びとと、そこから外れてしまって不満を持っている人々の間の対立の方が、次第に大きな問題になっています。組織によって意思が反映されない人々の存在が多くなり、それが時には直接民主主義の要求になって出てきたり、「世代間対立」「都市と地方の対立」「既得権批判」と呼ばれるものになったり、「政治不信」や「マスコミ不信」となっているということです。

(……)

小熊 それは、一つには、報道の枠組みが「55年体制」の時代から変えられないでいるためでしょう。記者クラブ制度の問題もあるでしょうが、「憲法9条が危ない」、「社民党や連合が反対した」、「自民党からも批判が出た」というと比較的見出しが大きくなりやすい。ところが、新宿駅前ひろばや官邸前に何万もの人が脱原発で集まっても、どこかの政党が組織しているわけではないとなると、なかなか取りあげなかった。

人びとの方もそういう報道の影響を受けていて、マスコミが取りあげないと本当に大きな変化や問題が起こっているように感じない。しかしマスコミが取りあげる枠組みに本当に共鳴しているわけではないから、憲法や安保や政界再編の問題を書かれても、自分のリアリティと繋がらない。だから社会

の実情が大きく変わっても、なにも変わっていないような気になってしまう人もいる。

つまりマスメディアにおいても、現代日本の実情・実態に即して独自の問題設定の仕方が見出されていないということでしょう。何か問題を論じるとき、どうしても55年体制に戻って、その概念を使って説明してしまう。

(……)

小熊 そろそろ結論に移りたいと思います。今日の話からは、社会の実態は大きく変化しつつあるにもかかわらず、それに即した認識や枠組みの形成、新しいモデルの提示がなされていないということが見えてきました。私は暗い話で結論にするほど現状は楽観的ではないと思っているので、展望を述べたいところです。

お二人は異論があるかもしれませんが、私が述べたことを繰り返すと、民意がまとまって望んでいることは、どの政権も押し切れるものではないということ。また同時に、大多数の人がどうでもいいと思っていることに関しては、少数の人間の力量にかかる部分が大きいので、少数の人間の力で変えられる余地があるということ。矛盾しているようでもあります(笑)その両面が重要だと言うことです。

韓 2012年から13年という時間を、新しいモデルが模索された移行期としてみたときに、なにが言えるのか気になります。なにが変わり、なにが変わらなかったのか。

菅原 やや悲観よりに戻して恐縮ですが、やはりこの短期ではなにも変わっていないように思います。2012～13年というのは、二回の国政選挙と政権交代を経てなお、閉塞状況を生み出している古いモデルに替わるものを創りだすことができなかった、そういう歴史になると思います。

〈資料・5〉「小熊英二＋菅原琢＋韓東賢 『二〇一三年の時代経験 変化の手前にある現在』」

〈資料・5〉(「現代思想」2013年12月)

そういう「変化の手前の現在」という状況の中で、象徴的に現れたのが、「秘密保護法」に対する反対運動です。これはマスコミ自身があれだけ動かなかつたら、これだけのものになっただろうかという面があります。マスコミの感覚というのは、55年体制の「戦後」的「社会諸運動＋政治勢力」ブロック、あの感覚ですよ、「良質」のマスコミは、マスコミというものがもっている政治感覚にぴたっとはまるものやふれるものは、取りあげるんですね。僕・らは、ほとんど無視されてきた経験しかないから、「えっ」と思いますけれども。もちろん、マスコミの力があつただけではなくて、労働運動のレベルで言っても、ある種の昔の言葉で言えば、「共闘」めいたものが確かに存在したわけですから。

そういういろいろな動きを、どういうふうにつかみながら、安倍に対峙するものをつくっていくかという営みについて、これも目につくものを並べてみましょう。

●「一点共闘」/「選挙時協力党」方式/「運動間共闘」

今一番「はしゃいでいる」とでも言えるように感じるのは、日本共産党です。彼

らの好きな言葉で言うと「一点共闘」です。「一点共闘」って、なにかすごくいいように聞こえるのだけれども、種明かしをしてしまえば、人間の両足を考えたときに、立ち足と利き足がありますね、サッカーボールを蹴ったりする時に。立ち足は全然動かさないわけです。利き足でふれることは、一緒にボールを蹴ろうよ、ということですね。立ち足まで動いてしまうようなことは絶対しない。それは、始めから明らかかなわけです。

〈資料・6〉

主張

国民運動の発展

統一戦線展望する壮大さで

日本共産党が躍進した参議院選挙後初の国会論戦が始まっています。衆院、参院とも序盤の論戦で、安倍晋三政権の暴走に対決できるのは日本共産党だけであることがいよいよ鮮明になっています。

日本共産党は、消費税増税、原発汚染水問題、環太平洋連携協定(TPP)参加、雇用問題、「集団的自衛権」行使など、どの問題でも安倍政権の政策が国民の利益と相いれないことを批判し、国民の立場にたった対案を示しています。民主、みんな、維新などの各党は、自民党の悪政と対決できない、悪政の共同執行者、補完勢力であることを浮き彫りにしています。

国民的共同で政権包囲を

国民の願いに応えるために、「政治的地歩を強化した国会でのたたかいと一体に、あらゆる分野で草の根からの国民運動をおこし、世論と運動の力で安倍政権を包囲、孤立させる」(日本共産党第8回中央委員会総会決議)ことが重要です。日本共産党は、「一点共闘」を含む国民運動を発展させるために力を尽くしています。それはまた日本共産党が国政選挙でかちとった“第3の躍進”を、「本格的な流れにし、2010年代を民主連合政府への展望をきりひろく」(8中総決議)時期にする課題に、勇躍、挑戦することにもなります。

ここ数年の国民運動の発展、とりわけ原発ゼロ、TPP参加反対、憲法9条改悪反対など、国政の核心的課題で、従来保守的といわれた団体・組織を含む広範な人びとと、日本共産党や民主勢力が一致点で共同する「一点共闘」が大きく広がりました。民主党など自民党に対抗する“受け皿”政党がなくなるとともに、これらの政党を支えてきた労働組合や各種団体にたいする政党支持の押しつけが続けられない事態がひろがっているのも特徴です。

まさに、要求で一致する国民運動の出番であり、「一点共闘」の可能性が広がっています。日本共産党の綱領があきらかにしているように、「民主主義的な変革は、労働者、勤労市民、農漁民、中小企業家、知識人、女性、青年、学生など、独立、民主主義、平和、生活向上を求めるすべての人々を結集した統一戦線によって、実現される」のです。

この「統一戦線は、反動的党派とたたかいながら、民主的党派、各分野の諸団体、民主的な人々

との共同と団結をかためることによってつくりあげられ、成長・発展する」(同綱領)ものです。全労連、全商連、農民連、新婦人、民医連、民青同盟など、「各分野の諸団体」を統一戦線の一翼を担うる強大な組織に発展させるとともに、それらをはじめ、「一点共闘」で結びついた幅広い団体を統一戦線に結集する、大きな影響力をもった日本共産党を建設することが、決定的に重要です。

統一実現の主体的力を

日本共産党はいま来年1月の26回大会に向けた「党勢拡大大運動」に取り組んでいます。日本共産党と諸組織の拡大・強化は、統一戦線への展望をひらき、国民のたたかいを強めることになりま

す。
安倍内閣の暴走を阻止するために全力をあげるとともに、統一戦線を強化・発展させ、民主連合政府への展望を切りひらくために、国民運動の前進と、日本共産党と諸組織の拡大・強化に勇躍して取り組むことが求められます。〈資料・6〉「一点共闘」—「統一戦線」(「しんぶん赤旗」2013.10.13)

〈資料・6-1〉

2014年(平成26年)1月18日 土曜日 10版 4

共産、敵の敵は…敵？

都知事選 元首相連合を「反共シフト」

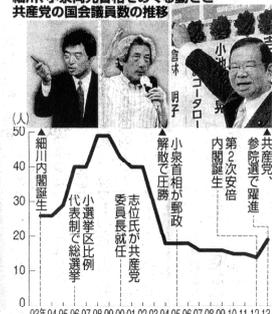
共産党が、東京都知事選で、「脱原発」を掲げる細川 豊、小泉純一郎前首相の「元首相連合」に対し、「反共の亡霊」と敵意をむき出ししている。推薦する日本弁護士連合会前会長の宇都宮健児氏(67)との一本化も拒否。「目共対決」の構図を示して参院選で勝った勢いを失いたくないとの思いも垣間見える。

一点共闘 限界の声も

「都知事選は、安倍政権の暴走への都民的審判が問われる。宇都宮氏の勝利に全力を挙げて薦める」
静岡熱海市・党研修施設「伊豆学習会」で15日に開かれた第26回共産党大会で、志位和夫委員長が声を漲らせた。

17日の討論では、東京の若林義春代議員が「細川氏と正対」と訴えた。細川氏が小泉氏とともに立候補表明した14日以降、脱原発票が割れることを懸念する市民団体などから、宇都宮氏が立候補を取りやめて一本化するべきだという声が上がっている。しかし、

細川、小泉両元首相をめぐる動きと共産党の国会議員数の推移



反共シフト(党幹部)と見えてしまう。さらに、共産党が最近、必死にアビエルする「目共対決」の構図を、元首相連合がぶちまけるのではとの警戒感もあるようだ。共産党は、「目共対決」をキャッチフレーズに作夏の都議選と参院選で連選を勝ち取った。その矢先、元首相連合は新たな政界再編の結集軸になりかねない。党幹部は「古い亡霊があらわれた」と話す。都議会の野党第1党でもあり、宇都宮氏で戦い抜く方が存在感を示せるとの意欲もちらちら。ただ、共産党は「ラック企業や脱原発の問題で、一点共闘」を掲げて、さまざまな市民運動と柔軟に連携して無党派層に浸透を図ってきた。昨年9月の堺市長選では、維新の「大阪都構想」に反対の一点で市民とも共闘した。しかし、都知事選でのかたくなな態度は、同じ宇都宮氏を推薦する市民党内から「共産党色が付き過ぎ」と批判の声も出るなど、「一点共闘」路線の限界を露呈した、と見る向きもある。

〈資料・6-1〉(「朝日新聞」2014.1.18)

〈資料・6-2〉

「一点共闘」から統一戦線へ

「一点共闘」とは、特定の要求課題で共同行動をとることです。「一点」を強調するのは他の課題や政策では共同できないことを前提にしているからで、もともと異なった政治的立場や潮流間での「共闘」を目標としています。

「共闘」と言っても、狭く捉える必要はありません。互いに支持を表明しあったり、政策への賛同を

明らかにしたり、共同声明に署名をしたりというレベルでも良いでしょう。それが、具体的な課題の実現を求めるデモや集会に結びつけば、なおけっこうです。

「共闘」を実現しようとする場合、過去の言動を問題にしてはなりません。人間は変化するものであり、様々な運動によるアピールや説得などの働きかけは、このような積極的な変化を人びとの内面に呼び起こすことをめざしているのですから……。

また、一致する課題以外の他の問題での違いを言い立ててはなりません。そもそも他の問題での違いがあることは前提で、そのような違いがあってもなお一致できる点での共同をめざそうとしているのですから……。

このような結びつきは、特定の課題を通じての点と点の結合にすぎないかも知れません。しかし、先に挙げたように、政権による「攻勢」は多岐にわたり、矛盾も深まっています。「共闘」できる課題は1つや2つではないかもしれません。また、個々の重要課題をめぐって成立した多様な「一点共闘」が重なり合っていくということもあるでしょう。

そうなれば、それはもはや「一点」共闘ではありません。「点」が連なって「線」になります。共通した要求課題での行動の統一を通じての「明確な政治目標をもった持続的な共同闘争の体制」(勤労者通信大学『「基礎コース」テキスト』314 ページ)、すなわち「統一戦線」の結成ということになるでしょう。この意味で、「一点共闘」は統一戦線の萌芽的な形態であると位置づけることができるのではないのでしょうか。〈資料・6-2〉(五十嵐仁「転成仁語」

<http://igajin.blog.so-net.ne.jp/2013-11-14>)

「一点共闘」というのは、日本共産党の革命路線の一環です。〈資料・6〉を見ていただければと思います。これは1月に開かれる党大会へむけた記事です。彼らの路線は、はっきりしている。「一点共闘」、その後は「統一戦線」、その先はなにかというと「民衆連合政府」です。この路線に向かって、精一杯がんばろう、と。今や、「自共対決の時代」なんだ、と。

びっくりしたんだけど、日本共産党と密接な関係のある「革新懇」の全国大会があって、「官邸前アクション」を担っているミサオ・レッドウルフという女性が、「私たちは、反原発という一点共闘でがんばっています」と、挨拶するわけです。自分たちがやっていることを、自分たちで否定しているのではということにならないのか。「官邸前アクション」って、そんなもんじゃないって振る舞ってきたのではないかと、と思います。〈資料・6〉の裏にあるのは、都知事選をめぐって、日本共産党がどういう動き方をしているかということです。細川—小泉の「原発ゼロ」に乗ろうと思う人もいるし、宇都宮氏がそこへ合流すればいいんじゃないかという声もある。そういうことに対して、「小泉なんか今さらどうして乗れるのか」ということが、当然あるわけでしょう。そのこと自体は、ある意味では健全です。しかし、今の「一点共闘」的な論理で言うと、要するに、味方でないものはすべて敵なんです。そう

いう意味で、非常にはっきりしているわけです。敵の敵は味方ではない。敵の敵は、
・・・敵なんですね。

それに対して、「選挙時協力党方式を考えよう」と言ったりする人もいます。選挙時に協力する党。イタリアでは「オリーブの木」というのがありました。そういうのを大まじめに考えようという人もいます。

〈資料・7〉

二月一八日、「討論集会・選挙時協力党方式について考える」が東京・文京シビックセンターで開かれ、三四人が参加した。主催は参院選選挙協力を望む会。協賛は政治の変革をめざす市民連帯、護憲・元教職員ひょうごネットワーク、週刊金曜日。司会は矢崎栄司さん（小選挙区制廃止をめざす連絡会幹事）。

最初に、協賛団体の護憲・元教職員ひょうごネットワークからの連帯挨拶が代読され、『週刊金曜日』発行人の北村肇さんからのメッセージが紹介された。

主催者の代表村岡到（小選挙区制廃止をめざす連絡会事務局長）から、集会開催にいたる経過報告と選挙時協力党方式についての説明があり、続いて四氏——橋本久雄さん（小平市議・緑の党会員）、海渡雄一さん（弁護士）、江原栄昭さん（新社会党元中央執行委員）、布施哲也さん（元清瀬市議）がコメントし、討論では一〇人以上が発言した。

村岡説明では、総選挙の結果について左派の惨敗をしっかりと確認することが出発点であること、従来の選挙軽視＝デモ・集会などの直接行動偏重とその逆の傾向との対立を克服して、選挙も直接行動も相乗的に展開する必要があること、その上で、選挙の時にいかなる協力関係が創り出せるのかを考える必要があると強調された。具体的には、選挙時協力党方式のメリットとして、斬新な協力形態の提示、法外な供託金負担の軽減、柔軟な政治思考の習熟が上げられ、逆に弱点としては政党助成金の扱いをどうするかが問題だと指摘された。

コメントでは、橋本さんは、個人的見解と断った上で、緑の党としては、七月参院選は九人の比例区、一人の選挙区（東京）での政党としての登場・奮闘にむけて準備中であること、社民党や新社会党との直接的な協力について、村岡提案では「期待あり」とされているが、現実にはそうは言えない。特に若い人には何の魅力もない。責任ある政治姿勢を訴えることが重要だと強調された。

海渡さんは、まず宇都宮都知事選で新しい協力関係が創られたことを積極的に評価すること、自身も楽しかったと話し、社民党と新社会党との三年前の選挙協力（共同リストに近い）にも触れて、何らかの選挙協力を模索することが必要だとコメント。

江原さんは、安倍晋三政権による改憲策動が強まるなかで、左派の小政党が協力することが真剣に求められており、新社会党は前日に大会を終えたが、長期的展望のもとに選挙時の協力が可能であれば実現したい、とコメント。

布施さんは、未来の党の動向などいけば水面下の情報を紹介したうえで、村岡提案についても考慮すべきところがある、とコメント。

討論では、左派ほどの党も理念、立脚点が不明になっていること、脱原発だけでは不十分で、改憲阻止も不可欠の課題であること、などが発言された。

最後に、司会の矢崎さんが、村岡提案の是非を結論づけることではなく、討論の契機として論議できたことがよかった、と締めくくられた。

〈資料・7〉「討論集会：選挙時協力党方式について考える」報告

(市民フォーラム2013.2.19) <http://civilesociety.jugem.jp/?eid=19969>

それから、「新左翼」の系譜の中でやってきたいろんな人たちが、今でも「運動間共闘」みたいなことを言っています。〈資料・8〉は、こんな勝手な使い方をするな！と怒られそうですが、新聞の見出しと結びみたいなどころを使って、本当に恣意的に切り取って並べてみたものです。

〈資料・8〉

「安倍政権の打倒へ！」

TPP、特定秘密保護法による人民主権の解体を許すな！

特定秘密保護法反対集会では、多くの人たちから安倍政権を打倒しようとの発言が繰り返された。原発再稼働、憲法改悪など安倍政権の一連の動きに対して社会運動は個別課題ごとバラバラに動くのではなく、安倍政権の政策総体との闘い、安倍政権打倒の運動が必要との認識が広まりつつあるのだ。安倍政権によってTPP、特定秘密保護法に加え、共謀罪新設、消費税率アップ、生活保護費削減、介護保険制度改悪、派遣法改悪、解雇自由特区構想、新しいエネルギー基本計画と原発再稼働路線とまさに民衆の暮らし総体を破壊するような悪政が矢継ぎ早に繰り出されようとしている。安倍政権が続くことは、労働者、農民、自営業者、その他の市民など人民総体に生存の危機をもたらすものであり、安倍政権は人民の敵である。いまこそ声を大にして訴えたい。安倍独裁政権を打倒しよう。

〈資料・8〉「赤いプロレタリア」第30号(2014年1月～2月)

〈資料・8-1〉

「実際、臨時国会開会の翌日、一〇月一六日には公明党が「秘密保護法案」を了承し、一〇月二五日には閣議決定され、衆院に提出された。多くのマスメディアはただちに反対を表明し、市民運動なども一一月三日の「憲法公布の日」集会などを起点に、秘密保護法反対運動の組織化を本格的に開始した。秘密保護法反対運動は、約一カ月のうちに急速に安倍政権に反対する労働者・市民の闘いの焦点となった。

いま秘密保護法反対運動をともに闘った政党、労働組合、市民の運動は、秘密保護法成立を認めることなく、秘密保護法廃止の闘いを開始しようとしている。この運動を継続することは、秘密保護

法廃止という直接的目的にとどまらず、安倍政権が掲げている「戦争する国家」体制構築と憲法改悪のプログラムに対して、長期的で広範な運動の陣形を作り出す上で重要なステップになるだろうし、われわれはそれを意識的に追求しなければならない。

われわれはこのような一連の闘いを、すべての労働者民衆の社会的連帯をベースにした安倍内閣打倒のための共同戦線へと発展させる必要があることを訴えたい。

「安倍内閣打倒」とは、必ずしも代替政府スローガンをふくんだ伝統的な意味での「政府打倒」スローガンではなく、脱原発・沖縄反基地運動への連帯・反改憲・反貧困と社会的公正などの要求と運動の協働を、安倍内閣との闘いに向けて発展させていこうとするものである。このような民主主義的な共同の中から、闘いの次の局面が展望されるだろう。

われわれはアジア、全世界の仲間たちと闘いの教訓を交流させながら、民主主義・自由・公正・人権・環境を保障する新しい政治と社会の展望——反資本主義的オルタナティブをつかみとっていかなければならない。〈資料・8-1〉「安倍政権打倒へ共同の闘いを」(「かけはし」2014年1月1日号)

〈資料・8-2〉

安倍反動政権に対峙する重層的戦線の構築を

(前略)

我々は、このような安倍反動政権に立ち向かわねばならない。それは、重層的なものでなければならない。第一に、集団的自衛権—改憲に対する広範な戦線の構築。それは、「未来」や「緑」といった中道左派をも含むものとして。彼らと手を結ぶ事に躊躇してはならない。第二に、反原発再稼働阻止の戦線の持続と強化、第三に排外主義の基盤ともなる社会から「疎外」された非正規雇用労働者や、青年、学生の戦線。それは、労働運動の課題でもあるが(橋下の公務員攻撃は、連合型組合が非正規労働者を疎外しているという限りでスキをついている)、それにとどまらず、湯浅氏の「もやい」的な全生活の扶助的要素を持った組織が必要である。

〈資料・8-2〉新開純也「統治手法としての『議会制民主主義』の終焉」

(「人民新聞オンライン」2013年1月1日)

〈資料・8-3〉

政党別、分野別の違いを超えた運動の「プラットフォーム」を

運動の陣形ということでは、ぼくらが反 TPP 闘争の提起したことに、分野別、政党別の違いを超えて運動のプラットフォームを作ろうということがあります。「ストップ TPP 市民アクション」という形で具体化し、いろんな課題を抱えながらも運動の流れを作りだしてきています。いま必要なのはもっと包括的な運動のプラットフォームづくりだろうという気がします。(……)ひとつのセンターを作ってそこで民主的に相互対等に、しかしイニシアティブをとって運動を作って引っ張っていくというふうな組織の作り方がいま問われている。変革のアソシエがプラットフォームを作ったら、ひとつの核になると思うんですけども。

〈資料・8-3〉大野和興「新年座談会 暴走する安倍政権の本質と闘う主体の課題」

(「コモンズ」67号2014年1月1日)

『安倍政権の打倒へ!』と、勢いのいい見出しなんですが、実際にそれに対して書かれている最後は、「お互いがんばってやりましょう」みたいなことに近いこと以上を出ていないという感じがします。ですから、いろんな運動に取り組んでいる者が、「運動間共闘」をきちんと踏まえて前に進めようといっていることに尽きる、そうやってしまえる側面があります。

目の前にある試みを、すごく乱暴に言ってしまいました。安倍とどう対峙するかということについて、いろいろな試みやいろいろな考え方がないわけではない。けれども自分たちも含めて、はかばかしくない。これをどうするかということが、依然として問題なわけです。——「護憲」・「平和と民主主義」層がもっている、「改憲」に対する抑止力を大事だと思いかぎり、なにも変わらないのではないかと思います。簡単に言ってしまえば、それに依拠しながら、なにかを創るということは可能かということだと思います。むしろ、それはもう「割る」しかないではないかと思います。問題は、「割る」だけのものを創り出せるかどうか、ということです。

それは、この間、僕らが言おうとしてきた「拒否」の動線の延長線上に、「安倍のつくる未来はいらない!」という「拒否」のあり方を、どうやったら創り出せるかということです。言いかえれば、社会諸運動の「横議・横行」による「横結」としての「安倍のつくる未来はいらない!民衆連合」——その動線をどうやって創り出していくのか、ということだと思います。

●「社会と政治を結ぶ新たなインターフェイス」

そのような方向性にむけての試み・提起を少しのぞいてみましょう。

〈資料・9〉を見てください。

〈資料・9〉

3・11の地震津波と原発事故を受けて、それ以前にはほとんど意識されることのなかった日本社会の抱える歪み、都市と農村の関係、農業・漁業の危機的な状況への関心は高まったと思います。日本各地で繰り返しデモも起こりました。その意識変化はいまも持続しています。でも、その先に政治変革の道筋は定かに見えない。そして今年7月に参議院選挙が行われ、その後、衆院の解散という事態が生じないかぎり、国政選挙は少なくとも3年は行われないのです。こうした国政状況にどう対応するのか、そのことを考えて、いくつかのポイントを整理してみました。

- ① 既成政党がことごとく議員政党化している中で、中央から地方にいたるまで、政治が議員選

挙の結果として括られてしまう現状そのものを批判的にとらえる。

- ② したがって、既成政党の離合集散に関心を払っても、その延長線上に政治変革の展望はないと考える。
- ③ 時代の危機的現状を認識するが、安易な対症療法的対応に走らないで、地域から半減期を繰り返し組織していくことに活動の基礎を置く。
- ④ 地域に根を張った政治組織の建設を進め、各種の社会運動の継続、連携、協同を支えていく。
- ⑤ こうした地域政治組織の広域化が、どのようなプロセスと形態をもって具体化されていくべきか、構想を検討していく。

〈資料・9〉 地域・アソシエーション研究所 シンポジウムにむけて「今、社会・政治の変革とは？」
（「地域アソシエーション」No.110 2013.4.30）

〈資料・9-1〉

白川 偉そうな言い方になって申し訳ないのですが、二つあります。一つは、それぞれの運動の中には、自分たちはどういう社会を目指すのかという構想が萌芽としてあります。しかし、それらが重なって、安倍が言う日本を超えていくオルタナティブな社会像を共有していく努力や意識に欠けるところがある、と思います。

(.....)

もう一つは、運動圏と制度圏のつながりを作るという問題です。総選挙もそうだし参議院選挙もそうですが、自分たちが政党をつくらなくても政党や選挙に対して運動の側から提案や主張を積極的に出して欲しいですね。共産党から社民党、緑の党まで各政党が統一リストでやるのは現実的に難しいですが、脱原発などはみんなでやっているわけです。だとしたら、なぜ統一リスト方式で選挙を闘わないのかと政党に迫ったら、やらないという理由を探すのは難しい。うちは党名がブランドだから、というのでは通用しない。政党にはそれぞれ事情があるから、統一リスト方式はすぐには実現できなけれど、社会運動が制度圏に働きかける重要な提案になると思います。

〈資料・9-1〉座談会「安倍政権とは何者か 2012年12月衆議院選挙をふまえて」における
白川真澄の発言から（「変革のアソシエ」No.14 2013年2月）

こういう啓蒙的な文章は、あまり好きではないですけれども、非常に単純にわかりやすく言っているので、これを使ってみたいと思いました。「社会変革の道筋は定かに見えない」けれど、どういうことを考えなければいけないか、「いくつかのポイントを整理してみました」とあります。「①既成政党がことごとく議員政党化している中で、中央から地方にいたるまで、政治が議員選挙の結果として括られてしまう現状そのものを批判的にとらえる」——別に異論はないですね。「②したがって、既

成政党の離合集散に関心を払っても、その延長線上に政治変革の展望はないと考える」——これも別に異論はないですね。「③時代の危機的現状を認識するが、安易な対症療法的対応に走らないで、地域から半減期を繰り返し組織していくことに活動の基礎を置く」——一回創ったらずーっとあるもんだと思うな、と。「半減期」のあるものだと考えて、そういうものを地域からどうやって創っていくか、ということが大事だと言っている。「④地域に根を張った政治組織の建設を進め、各種の社会運動の継続、連携、協同を支えていく。⑤こうした地域政治組織の広域化が、どのようなプロセスと形態をもって具体化されていくべきか、構想を検討していく」——こういうふうに言われると、興醒めしてしまいますが、問題を言っていることじたいとしては、間違っているわけではないと思います。

問題にしていることを、もう少しはっきりさせたいと思います。〈資料・10〉を見てください。

〈資料・10〉

◆ 社会と政治を結ぶ新たなインターフェイス

資本主義の下で、権力は社会と政治の二つの地平をもちます。政治の地平だけでなく、社会の地平にも権力は深く根をおろしています(アダモフスキーはこの社会の地平をフーコーにならって「生政治」と呼びます)。社会生活を通じて私たちは資本主義の権力関係を再生産しており、私たち一人ひとりが日々資本主義をつくりだしているのです。しかしまた、その社会には不服従と反逆が満ち溢れています。そのため社会を監視し、逸脱を正し、違反を処罰し、社会的な協働の方向を決定する国家、法、制度からなる政治の地平が存在するのです。

社会と政治の二つの地平は、代議制、政党、選挙など議会制民主主義と呼ばれるインターフェイスで結びついています。しかしそれは、民衆の自律・自治とは程遠い他律の、つまり他からの強制を受け入れるインターフェイスです。社会の成員全員が受け入れなければならない重要な決定を、権力機構に属するほんの一握りのエリートがおこなうことを正当化し保障するのが、選挙というインターフェイスの実際の働きなのです。

伝統的左翼は、優れた指導者の率いる政党というインターフェイスを通じて政治の地平に影響力を行使しようとしてきました。アダモフスキーはそれを、結局他律的インターフェイスとほんの少し違うだけのものにすぎないと拒否して、独自の自律的インターフェイスを探し、設計すべきだと主張します。

この自律的インターフェイスを考える際に、次の二つのことに留意しなければなりません。第一は、それが平等の倫理にもとづくものでなければならないということです。アダモフスキーが別の論考(「平等のラディカルな倫理のために」2007年)ですでに語っていることですが、左翼の世界ではこれまで、あらかじめ知った「真理」に合致するものが「善い」とみなされ、倫理的な善悪の問題は政治路線の正しさの問題に解消されてきました。そして身の回りの仲間一人ひとりを配慮する倫理

に、イデオロギー的な真理への献身がとって代わったのです。そのため他の面では善良な心をもつ活動家が、「真理」の名の下に仲間を操り、時には暴力をふるってきたのです。このような姿勢は自分を他者より優れたものと見る、無意識のエリート主義に支えられています。こうした左翼の悪しき伝統からの決別がまず問われるのです。

第二は、階層的な上下関係を克服した水平な組織に関する、誤った見方を克服することです。そのひとつは、制度や規則は組織の水平性、開放性を妨げるものだという偏見であり、もうひとつは専門化や分業、委任は階層性をもたらすという見方です。実際は自律的で水平な組織こそ、権威主義的で階層的な組織よりもさらに制度や規則を必要としているのです。権威主義的な組織なら、紛争の解決や任務分担にあたってリーダーの意志に頼れますが、水平的な組織ではそうはいかないからです。合理的な任務分担のあり方、権力の集中を生じない委任と代表の仕組み、集団と個人の権利の区分、内部紛争の処理基準などが一連の民主的合意のかたちをとって制度化されなければなりません。

〈資料・10〉(「ホロウェイ論その5 自律・自治と政治の間を結ぶもの」**「魚の目:魚住昭 責任編集 Webマガジン」**2009.10.13)

この間世界的にひろく読まれてきた人でジョン・ホロウェイという人がいます。今はメキシコの大学で教えている人です。その人の『権力をとらずに世界を変える』という本があります。今から5、6年前に出された本です。これが、結構よく読まれているらしいので、そのことを取りあげたブログからとりました。エゼキエル・アダモフスキーがいます。日本語で『反資本主義入門』が翻訳されています。「社会と政治を結ぶ新たなインターフェイスを、いかに創り出すかが大事なんだ」と、言っています。

「社会と政治の二つの地平は、代議制、政党、選挙など議会制民主主義と呼ばれるインターフェイスで結びついています。しかし、それは、民衆の自律・自治とはほど遠い他律の、つまり他からの強制を受け入れるインターフェイスです」——その通りです。「伝統的左翼は、優れた指導者の率いる政党というインターフェイスを通じて政治の地平に影響力を行使しようとしてきました。アダモフスキーはそれを、結局他律的インターフェイスとほんの少し違うだけのものに過ぎないと拒否して、独自の自律的インターフェイスを探し、設計すべきだと主張します」——この、「独自の」と言っていることが大事です。

この間の日本の反原発をとりくむアクション、それから〈オキュパイ〉という世界的に広まった運動の中でも、そういうことはかなり意識的に進められています。つまり、世界を変えるということは、遠い未来にあることではなくて、今変えようというアクションの中に、世界を変えようということのありようが、どれだけそこに充満しているかどうかが問題なんだ、と。これは「予示的政治」という言い方を

していますけれども。未来に示すもの、未来に実現すべきものを、あらかじめ示すという「予示」。そういう関係をいかに運動の中に内包できるかが大事なんだ、と。これは、1990年代末からの反グローバルゼーション、1999年の「シアトルの乱」以降、反グローバルゼーションの運動の中でも意識的に問題にされてきたことだと思います。そういう内容をもった、自律的なインターフェイスというものを創り出さなければいけないんだ、と言っています。

〈資料・10-1〉は、その具体的な例として、アルゼンチンのことを取りあげています。

〈資料・10-1〉

こうした状況のなかで破産した国家、政党、政治家や既存の組合を当てにせず、民衆自身が相互に助け合い、協力しあって生きていくためのネットワークが動き始める。その運動は「資本制の外」「政治的代表的制の外」をめざす性質のものだった。

経済的には、経営が破綻した企業を労働者が占拠し自主管理する「回復企業」、物々交換ネットワークと共同体単位一括購入を中心とした「交換クラブ(生産者＝消費者協同組合)」、そしてこのクラブで使用される無利子の地域通貨「クレジット」などによって自律的経済が追求された。政治的には「彼らをみな罷免せよ」というスローガンにみられるように、政治的代表的制のもとで政権の挿げ替えで解決を図ろうとする思想が拒否される。これは、メキシコ・サパティスタの「権力奪取という思想の拒絶」がアルゼンチンへ波及したものとされる。戦術としては、幹線道路をピケット封鎖して権利を要求する失業者の運動「ピケテロス」、鍋を叩いて異議申し立てをする直接行動「カセロラソ」などが知られる。さらに、民衆自身による合意形成は、各地区のアサンプレア(近隣住民評議会)で行われ、誰にも代表されることなく、民衆ひとりひとりの顔が見える範囲で自律的な政治空間が構築されていたのである。

今回の学習会を通じて、二つのことが頭に浮かんだ。一つは、このアサンプレアこそ、ハンナ・アーレントが「歴史上いままで現れた、それも繰り返し現れたたった一つの代替案」と述べた「評議会」(ロシア語でツヴィエト、ドイツ語でレーテ)だろうということ。ただ、それは「まったく自発的に、そのたびごとにそれまでまったくなかったものであるかのようにして出現」するらしいが、同じく新自由主義の猛威の中で、大量の失業者と不安定雇用者を生んでいるこの国では、さっぱり出現しそうな様子がないのはなぜか、ということ(引用は柄谷行人からの孫引き)。

〈資料・10-1〉「アサンプレア(近隣住民評議会)」（「地域・アソシエーション研究所研究会報告：グローバルゼーション研究会」 下村俊彦2007.1.20）

アルゼンチンと言えば、ネオリベの攻撃を何とか必死に逆転しようとした、この10年くらいの中南米の大きな変動の一環をなした、民衆の動きがあります。それがどういう枠組みを創り出してきたかということに、簡単にふれたものです。例の「一人も残るな！」というのは、アルゼンチンの反ネオリベ闘争の中から生まれて

きた言葉でした。

南米は、国家自体が破産する、あるいはそれに近くなった事態がしばしばあるわけで、中南米に連続した、破綻した国家をいかに民衆の手に奪い返すかという試みが、いろいろな色合いをもって存在してきました。現在も同じように全部が存在しているとは言えませんが、「資本制の外」、「政治的代表的制の外」、そういうものをめざすネットワークが、民衆の間に創られていったことが大事なんだ、ということを行っています。

「アサンブレア（近隣住民評議会）」が有名ですがけれども、それぞれの近隣地区で、自分たちで「評議会」を創って、それを積み重ねていって自分たちの〈声〉を形成し、国家に要求を突きつけていく。昔の古典的な言葉で言えば、「二重権力状況」みたいなものを、かなり意図的に創っていかうとする、そういう動きだと思っています。この「アサンブレア」こそ、「歴史上いままで現れた、それも繰り返して現れた、たったひとつの代替案」としての「評議会」（ロシア語でソヴィエト、ドイツ語でレーテ）だろう、と。人びとが、自分たちの意志を自分たちで決定し、固める。同時に、それを執行すること自体を自分たちでやる。そのような形で、人びとが自分たちのなにかを決定する力を、外に代表させない。そういう人びとの関係のあり方を「評議会」と呼んできた。ハンナ・アーレントが、「革命について」の中で「評議会」のことについてふれています。そういうものが、インターフェイスとして大事なんじゃないかと、そこで言われています。

それをもう少し具体的な形で、アダモフスキーという人が言っているのは、「社会運動評議会」という構想です。〈資料・11〉を、見てください。

〈資料・11〉

◆ 「社会運動評議会」の構想

以上述べた政治的インターフェイスの具体案として、アダモフスキーは「社会運動評議会」を提案します（「評議会」の原語は「アサンブレア」「アッセンブリー」です）。一言でいえば、それは労働組合を含む様々な社会運動が横断的に結合して政治の領域に向き合う組織です。もちろん、この結合体は政党ではありません。あくまで、自立した社会運動がそれぞれ独立性を保ちながらネットワーク状に結合し、討議によって方針を決め、行動する組織です。

国家の弾圧に共同で対処し、様々な課題をめぐって国家に共同行動による圧力をかけることからその活動ははじまります。やがて十分な力を持つに至った段階では、選挙に独自候補を擁立することもあります。各級議会に議員を擁し、行政にも代表を送り込みますが、それはあくまで国家の一部を「植民地化」するためであって、主体はあくまで社会運動です。「植民地化」という言葉は穏やかではありませんが、要はメイフラワー号に乗った清教徒がプリマスにコロニーを築いて生活しはじめたように、政治の領域に社会運動がコロニーを設けようということです。議員は政治の領域につくられたコロニーに住む運動のスポークスパーソンであって、職業政治家ではありません。

これまでの社会運動と政党との関係は、社会運動が政治の領域で政党に様々な協力を要請し、

政党は社会運動にそれに見合う選挙活動・票を求めるといったものでした。職業政治家は自ら生きる現実政治の世界の論理に従って行動します。つまり、権力機構に属する一握りのエリートたちの行動様式に適応した行動をとります。この世界では、社会運動の掲げる要求は非現実的なものとみなされ、この世界で受け入れられる水準にまで骨抜きされます。こうした関係が続ける中で社会運動は次第に本来の鋭さを失い、ロビー活動で要求実現を図る圧力団体が残されることとなります。歴史を振り返れば、政党が社会運動を配下に置こうと試み、そのために運動内部に対立が生まれ、ついには分裂に至ることもしばしばでした。

アダモフスキーの構想は、これまでのこのような社会運動と政党との関係を断ち切り、社会運動が主体となって政治そのものをつくりかえることをめざしたものです。そのことをアダモフスキーは「社会運動評議会はわれわれの運動と国家の間に、運動の形態と価値観をもって国家を『植民地化』するに至るインターフェイスを提供する」と表現しています。要するに、社会運動として現われた民衆の力と要求を、現実政治の反作用によって骨抜きされることなく、政治の領域に反映させる仕組みをつくり、政治そのものをつくりかえていこうというのです。

〈資料・11〉(前掲資料・10 2009.10.13)

先程の「運動間共闘」を、もっとその強度を高めていったときには、〇〇運動という母体を引きずっていることを超えることが、もし可能ならば、それが「社会運動評議会」にあたることだろうと思います。「社会運動評議会」——こういう言葉があったんだなあということが、うれしかったです。

〈自分たちの政治を、どのように形成するのか〉——そういうところへ向かう動線というものを、どうやって引いていくのか。ひとつは、日本共産党の言う「統一戦線」という考え方があります。それから、「社会運動評議会」という考え方もあります。そして、そこに僕は「民衆評議会」というものを並べたい。

みなさんにはあまりなじみがないかもしれませんが、柄谷行人という人がいます。「3・11」以後、デモはいろいろありましたから、マスコミあたりを中心にして、「デモで社会は変えられるか」というようなことが取りざたされて、柄谷行人は「現にデモをやる！ということが起こっていることによって、社会は変わっているでしょう」と、そういう言い方をしたんですね。「デモができる社会になったんだ」と。

このようにとてもユニークで、簡単に何者だとは言にくい人です。ここでは必要なことだけに触れます。この人はもともと好色精神が旺盛で、哲学者然とおさまっている時期があるかと思うと、のこのこ出て来て、変な運動を企てたりする人です。いまは、その両方をうまいこと総合したようなところで、言いたいことを言おうとしている感じです。『世界史の起源』という本があるのですが、その副産物として、『哲学の起源』という本を最近出しています。

その中で、「イソノミア」というものを持ちだしてきています。いまのトルコにあ

った、ギリシアの植民都市・イオニアに成り立っていた人びとの意志形成の仕方のありようを、「イソノミア」と呼んでいるようです。その「イソノミア」ということにふれた柄谷行人の文章を切り取ったのが〈資料・12-2〉です。見ていただけたらと思います。「デモクラシー」というのは、語源に即して言えば、「多数派支配」なのです。 「イソノミア」というのは、「ノールール」つまり、支配するということがない、ということです。

〈資料・12〉

柄谷は「デモとは何か？」という問いに、こう語る。

「私はデモというのは社交だと思っています。かつて福沢諭吉は“society”を“社交”と翻訳したそうなのですが、いまは『社会』という訳語が定着しています。しかし、社交というほうが動的な感じがする。その意味で、デモも社会参加というよりも、社交だと考えた方がいい。実際、フランス人でもドイツ人でも、デモを社交だと思っているふしがありますよ。“土曜日にデモがあるよ”“じゃあ、そこで会おうか”と。そのように、デモとはまず人に会う場であり社交なんですよ」

「いま日本で起きている反原発運動と似たような自然発生的な大衆運動は、あちこちで起きています。エジプト革命も同じだと思います。しかしそれらは決して“新しい”ものではない。文化人類学者で活動家のデヴィッド・グレーバーが『アナキスト人類学のための断章』(高祖岩三郎訳、以文社)のなかでこう書いています。

彼がニューヨークの Direct Action Network の評議会に出てみると、マダガスカル の氏族社会をリサーチしていたときの、彼らの会議とそっくりだったと。マダガスカル の氏族社会の話し合いには、もちろん党幹部などはいない。Direct Action Network の評議会でも皆、対等にかんかん意見を言い合う。そして、意見を言った人間が責任を持って行動を起こす。その人が信用をなくしたらリーダーではなくなる。

直接民主主義は実に古い起源を持っていて、廃れることもありません。廃れたと思っても、また戻ってくる。いまの自然発生的な大衆運動は60年代末の大衆運動の続きに見えるかもしれませんが、60年代末の運動も過去から回帰してきたものだったのです。自然発生的な大衆運動は常に新しく、そして古いのです」

「日本は世代を超えて共有している宗教がない国です。代わりに、ある年齢までの人なら太平洋戦争の記憶が共通神話としてあった。それに比べたらオウムや阪神大震災はそこまでの体験にはならなかったし、311もそれ単独ではならないと思います。ただ、もう原発の問題は、原発単独ではなくなった。」

〈資料・12〉二木信「ドキュメント 反原発デモ (5) 思想と実践の交点から 柄谷行人・小熊英二」
(下)(WebRonza 2012年3月10日)

〈資料・12-1〉

——今日の話でテーマとなっているイオニア。その社会を特徴づける、一番重要な原理が「イソノミア」であると、柄谷さんは書かれています。元々はハンナ・アーレントが、デモクラシーとイソノミアを区別して論じていた。デモクラシーは多数支配(Demo = 多数、cracy = 支配)であり、支配の形態

のひとつでしかない。それに対して、イソミアとは「無支配」であり、そこでは人びとは伝統的な支配関係から自由であり、経済的にも平等であった。このイソミアが、民主主義の限界を超えるものであると、柄谷さんはおっしゃっています。

柄谷 イソミアの概念は、『革命について』でアーレントが書いたことから学んだものです。そこで彼女は、フランス革命とアメリカ革命の違い、そして、その意味について書いたのですが、最初のほうに、ギリシアのことで、イソミアとデモクラシーを区別して語っています。デモクラシーは「Cracy」（支配）の形態であり、イソミアは無支配である、というのです。しかし、そのあと、彼女は本論に入って、十八世紀アメリカのタウンシップを高く評価し、それを評議会だと言っています。評議会とは、ロシア語でソヴィエト、ドイツ語でレーテと呼ばれるものです。ある意味で、これは僕がいう交換様式 D の形態です。しかし、そんなことをいうならば、彼女は、ギリシアのイソミアがデモクラシーと異なる評議会のようなものだと、なぜ思わなかったのか。結局、ギリシアに関して、彼女はイソミアとデモクラシーを区別できていない。それはアテネとイオニアを区別しなかったからですね。

彼女は、十八世紀アメリカのタウンシップに関しては、それがフランス革命的デモクラシーと異なるだけでなく、アメリカ革命以降の民主主義とも異なることを明確に示しています。タウンシップあるいはイソミアは、貧富の格差そのものが生じないようなシステムであり、ゆえに、無支配です。ところが、デモクラシー（多数派支配）は、たえず生じる貧富の差、階級問題を、国家権力による課税一再分配によって解消するような体制です。そこには絶えず闘争がある。アテネのデモクラシーも、フランス革命以後のデモクラシーもそういうものです。現在もそうです。

〈資料・12-1〉「柄谷行人 ロングインタビュー『民主主義を超えて、イソミアの回帰を』（「週刊読書人」 2013年1月4日）

〈資料・12-2〉

ギリシャに「イソミア」という言葉があります。同等者支配と訳されることが多いけど、アーレントは無支配（ノールール）と訳した。デモクラシー（民主主義）のクラシーは支配ですから、無支配はまるで異質です。デモクラシーでは自由と平等は背反しますが、イソミアでは違う。自由であるがゆえに平等です。

これはイオニア（現トルコのエーゲ海沿岸部）の植民都市に存在した。アテネ民主政を始めたときされる執政官ソロンの改革（債務奴隷の解放など）は、イオニアから学んでイソミアを実行しようとしたのだと思う。しかし、財産上の階級分化が起こっていたアテネではうまくいかず、僭主（せんしゅ=独裁者）政に帰結した。その後の民主政でも、イソミアとはほど遠い。

今後、代議制民主主義が大きな問題になることは間違いないですね。例えば、ギリシャの民主政からは、僭主が現れる。あるいはデマゴグが出てくる。こちらは日本にすでにいますが（笑い）。民主主義はひどいものだけど、それよりいいものがないから、やむをえないというシニカルな見方が強い。しかし、やはり民主主義を超える理念が必要です。僕の考えでは、それがイソミアですね。だから、イオニアの哲学について考えて欲しいと思います。

〈資料・12-2〉「古代ギリシアに希望の光：柄谷行人インタビュー」（「朝日新聞」2014年1月15日）

●「路上の群集評議会」?!

最後になりますが、いま問題にしなければならないことを、一言で言うと、「社会と政治を結ぶ新たなインターフェイス」をどういうふうに創り出せるかということです。ただ、「社会と政治を結ぶインターフェイス」なんて言うと、政治学の教科書みたいな感じになってしまうので、あまりこんな言い方では考えたくないんですけど、自分たちの言葉で言うと、「拒否」の強度を高めるということ、まさに「拒否」を人びとの政治表現として形成していくということは、どのようにして可能か。そういうことを考えたいと思います。とりわけ、「3・11」以後の日本の社会運動とほぼ同時並行的にあった〈オキュパイ〉運動。〈オキュパイ〉の運動というのは、完結しない運動なんだと思います。ここまできたら終わり、というような運動ではない。またいくらでも拡がる可能性はある。日本の反原発運動にしても、日本のいまの現実の政治に、どれだけくいこんだかという角度だけから見れば、まだまだの話です。だから、そういうふうに見る目じたいを変えなければいけないと思います。——なお、ネグリ=ハートの『叛逆』は、〈オキュパイ〉運動を「応答」的に捉え返しつつ、その言うところの〈共^{コモン}〉の構成へむけた既存の政治の「構成的解体」=新たな「構成的権力」へ向かう「マルチチュード」の課題を明らかにし、今回舌足らずに問題にしてきたことを扱っており、とても判りやすいので、ぜひ参照してください。

社会運動のレベルで成立してくる人びとの意志が、政治に向けてどう表現されるのか、というときの政治を、現在のこの列島空間に存在している政治としてイメージしてはいけない。政治という概念じたいを書き換えなければいけない。事態が変わる、というところへどうやっていくかという話なんだと思います。

だから、何度も言いますが、社会運動=政治表現ではないということです。これまで、政治を形成しようと思う好色精神旺盛なものが、社会運動というのは、必ずそこへつなげるものだというふうに思ってきた。そこにつながらなければ、価値がないと思ってきた。そうではなくて、〈社会運動が、政治を創る〉ということは、どういうことなのかを、あらためてもう一度考えてみなければいけないのだと思います。

言うまでもありませんが、「民衆評議会」といえるものが、どこかにあるわけではありません。でも〈資料・12〉を見ていると、どうでしょう、なんか「既視感」のようなものにとらわれませんか。どうでしょう?あの〈オキュパイ〉運動の構成のされ方、あの「運動」で展開された「予示的政治」を思い出しませんか?〈オキュパイ〉の時空間のありようこそ、「民衆評議会」ではないのか、という気がします。いわば「路上の群集評議会」?!

そこからぐっと引き寄せてみると、去年の参議院選挙の際の例の三宅洋平の「選挙フェス」、あれなんか「路上の群集評議会」?!じゃないか、と思いませんか。今のところ、?!がついているんですが。〈資料・13〉に三宅洋平の言葉を入れておい

たので、見てください。

〈資料・13〉

政治をマツリゴトに

夜中にダンスしたっていいじゃないか。
戦争なんて無い方がいいに決まってる。
原発だって無い方向を全力で探りたい。
「手作り」や「自然」を大切にしたい。
大事な情報はオープンであるべきだ。
文化や教育にちゃんと税金を使ってもいいだろう。
もっとファンキーで多様な社会にしたい！
命、大切だろう！！

...

いま、こういう感性を共有している人たちがけっこう沢山いる気がします。
そして彼らは、思いとはかけ離れていくクニのあり方を、憂慮しています。
そんな人たちが結びつくきっかけとして「選挙に参加する」が在れたら。
「人間が地球にとって有益な微生物である社会をつくりたい。」

そのためにまずは話し合いへ混ぜてもらいに、国会へ行こう。
教わることも、教えられることも沢山あるはず。
とことん話し合って、
チャランケ（アイヌ語：部族間の話し合い）して、
お互いに学ぶ先に、素敵な答えは必ずあると信じています。

例えば、「経済優先」の是非を論争するのではなく、
「経済の質」を話し合い、その意味を膨らませたい。

一緒に、勉強していきませんか？
云いたい事の云い方を。
聞きたい事の聞き方を。
伝えたい事の伝え方を。
支えたい人の支え方を。

相乗り大募集。
よろしく申し上げます。

いつものスタンスで、
マツリゴト。

日本アーティスト有意識者会議代表 三宅洋平

〈資料・13〉 「参議院選挙への立候補宣言」(三宅洋平 日本アーティスト有意識者会議
(N.A.U 2013年5月15日))

〈資料・13-1〉

三宅洋平の場合

「政治のことば」を変えようとしている——

三宅洋平さん（1978年生）の「唄う選挙演説」を見て、ぼくが感じたのはそういうヴァイヴでした。こういう選挙演説もアリってこと、それ自体がおもしろい。

「政治のことば」を変えるって、べつに「チャライ言葉」を使うってことじゃないです。ぼくみたいなひねくれ者には、三宅さんの演説は熱すぎて眩しいし、いきなりタメ口っていうのもどちらかというと苦手です。だけど、そういうことじゃない。「政治のことば」を変えるって、そういう表層的な意味じゃない。「政治をマツリゴトに」という彼の主張は、スーツを脱いで、新しい「政治のことば」を紡いでいこうぜ、ということだと思います。

「俺も分かんねえことだらけだからさ、一緒に勉強していこうよ」と三宅さんは言います。アイヌ語で「チャランケ」という言葉があるそうです。なにかもめごとがあった場合、彼らは何日間でも持てる英知を絞って論争を繰り広げる。三宅さんが主張しているのは、徹底的な「対話」なのです。

自分の周辺から少しずつ、小さな「チャランケ」を紡いでいくこと。そのことについて話し合うこと。三宅さんのそういった姿勢を知ったときに、親和性を感じたのは、2011年9月17日にアメリカのウォール街で始まった「OWS (Occupy Wall Street/ウォール街を占拠せよ)」のこと。かつてぼくは、OWSが官邸前デモとも重なって見えました（過去記事）。

「お互いの声を増幅させ、皆の声を聞き合おう」

それは、民主主義を取り戻すための草の根ムーブメントであるように思えます。人間マイククロフォンとして、ナオミ・クラインの言葉をくり返して喋る人々の、祝祭的な雰囲気。それは「よりよい未来を作る」という行為に、自らがコミットしようとしている人だけが持ち得る「喜び」です。

三宅さんが「チャランケ」によって変えようとしているのは、「公」という言葉の概念。「公」を自分たちのマツリゴトとして引き寄せようとしている。「公」という言葉の使われ方と「Public」という言葉の使われ方って、日本とヨーロッパではまるで違うんですね。それらの言葉を聞いて想起するイメージもたぶん違うし、それらの言葉が使われるバックグラウンドもまったく異なっている。

日本では、公務員は既得権益とされてバッシングの対象になります。公務員や議員を減らせという声が世論としての主流です。まるで公務員が多いことが問題であるかのように扱われていますが、日本は公務員の少ない国であり、すべての欧米先進国より少ないというデータもあります（参考）。「滅私奉公」なんていう言葉が美德としてあることから考えても、日本における「公」という言葉の位置づけは推して知るべしです。

ヨーロッパで「Public」というのは「自分たち」のこと。あなたは自由な意志をもって生き、この世界とルールをつくっていく一人でもあるということ。「公」とは「お上」のことで

はなく、「どんな社会をつくりたいのか」という、自分の意思を持った「自分たち」のことなのです。

人々の意識下にある「お上にお任せ」は根強い。民主党が崩壊した後の自民党への振れ幅をみていると、そう感じざるを得ません。民主党がダメだったからやっぱり自民党、だなんて短絡的すぎる。知的な逡巡がなにも無い。だけどしょうがない。長いこと「お上にお任せ」でやってきた日本市民のバックグラウンドはそういう文化的土壌なのだから。一度や二度の政権交代で簡単に意識が変わるわけじゃないんです。何十年もかけて、言葉とともに成熟させていかないといけない。

三宅さんが緑の党から全国比例区で出馬した先月の参院選。ぼくは「政治のことば」が変わっていくことに期待して、彼に一票を投じました。そういう投票の仕方もアリってことが自分でもおもしろかったし、結果として、三宅さんは落選でしたが、がっかりはしなかった。選挙制度をよく知ってみれば、無名の政党から比例区で出馬すること自体が無謀であったことが分かるし、そう考えると個人名での17万票という得票は、あの参院選でのトピックのひとつとして挙げていいと思います。

三宅洋平さんは、「全候補中26番目の得票で一人の政治的立場としての存在感は生む事ができた」としつつも、「ルールはルール。それを理解して臨んだので言い訳にするつもりはない。比例で勝つには、強い党を作らなければならない」と言っています。

今回、彼に投票した人々が、それをきっかけにして選挙制度の不備について知ったり、あるいは原発や今後のエネルギー政策について話し合ったり、民主主義について考えたり、、、つまりあの17万票は議席には結びつかなかったけれども、それがもし「お互いの声を増幅させ、皆の声を聞き合う」という「チャレンジ」に結びつく出発点になるのだとしたら、それはたった一つの議席よりも、もっとずっと大きな意味を持つものになるかもしれないと思います。

「滅私奉公」から「活私開公」へ、「公」という言葉の概念が変わるとしたら、きっとそれまで無関心だった人たちの政治に対するスタンスも変わります。だいたいにおいて、「政治」という言葉を聞いたときにまずはじめに受けるネガティブなイメージをなんとかしたいですよ。政治家って、本当はクリエイティブな仕事であるべきだと思います。もしそのように「政治のことば」が変わるならば、それは「革命」だと思います。

〈資料13-1〉「革命について(1)坂口恭平、佐々木中、三宅洋平、外山恒一に学ぶ、ぼくらの革命」

(yamachanblog 2013年8月8日)

今後、彼のことをもう少しフォローしたいと思っていますが、彼の言う「チャレンジ」や「いつものスタンスでマツリゴト」というのは、そんな匂いのようなものを感じさせます。ぼくのような古い人間からすると、一方で安倍の策動が人々、とりわけ若い層の身体を逆撫でしており、他方で、いわゆる「サウンドデモ」の登場以来のミュージシャンの音楽＝運動の流れがあって、3・11以後、それらが、今回

の三宅洋平の「選挙フェス」にまで来ている…というような感じがしますが、トンチンカンかな。「選挙=占拠」！？

むろん語呂合わせなんかして浮かれていいわけではありませんが、また、三宅洋平の行く方についてもどうなるか分かるわけではありませんが、その言動はきわめてしたたかで、「確信犯」的です。前世紀末からの「アート/社会運動」の流れ（文化=政治というような捉え方もありますが）の中で、いわば、「下からのカウンター生政治」というようなものが垣間見られるように思います。「路上の群集評議会」→「路上の群衆評議会」→「路上の民衆評議会」と生成変化する行く方を考えてみたくになります。

今回の彼の「選挙フェス」は、全国各地をまわって、いわば「一味同心」とでも言うようなものをつくりあげていく営みだったのではないのでしょうか。——上でふれたネグリ=ハートは「占拠に参加した人びとは、そこに一緒に存在することをおして新たな政治的情動を創出する力能を経験した」と言っています。

なお、私・たちのつくっている「拒否」の〈前〉線情報」の4号で、三宅洋平の「選挙フェス」を特集する予定でいますので、ここで言ったことを、ここでもう少し展開したいと思っています。また御覧下さい。

最後に、これは泣き言ですが、どうしても言いたいことがあります。実は10月に武藤さんにお出でいただきましたが、その後で話すことには大きな抵抗感がありました。案の定、お話したようなことを準備しているなかで、今更ながら自分が武藤さんのようなビッグフレーム・ロングタームで考えることができていないことを痛感しました。今日考えようとしたことを、すでに武藤さんは25年も前から提起されています。以下に少し前の発言を〈補註〉にあげますので、ぜひ目をとおしてください。

どうも締まらない話を長々としてしまいました。これで終わります。

〈補註〉

- +1. 武藤一羊「もう一つの世界」への道を探る—ハート、ネグリの批判的検討を手がかりに」
(PP研:オルタキャンパス2008・11～2009・4)
- +2. 武藤一羊「帝国の没落と「もう一つの世界」への道筋を探る」(上)
(「季刊ピープルズ・プラン」42 2008)
- +3. 同上(下)(同上 43 2008)
- +4. 討論会「オルタナティブな世界を創る運動・思想・主体」(武藤+花崎・崎山・金井・天野)
(同上 45 2009)
- +5. 武藤一羊「民衆憲章序論(1)非物質的労働とマルチチュードの不思議」
(同上 46 2009)

IN/OUT

「素朴な叫びよりもさりげない
はるかな暗号のように響き合う
言葉」(清田政信「遠い朝・眼の
歩み」)

予示的政治をめぐる

渋谷 望

予示的政治 prefigurative politics という言葉を知ったきっかけは高祖岩三郎の著作(『ニューヨーク烈伝』、『流体都市を構築せよ』など)を介してだったが、その後、デヴィッド・グレーバー、ジョン・ホロウェイ、レベッカ・ソルニットらがこの概念を運動の原理として使っていることを知った。この語には運動のあり方について多くのものが賭けられている。ただ、日本の運動界隈では、この言葉自体はいまのところあまり浸透していないようにみえる。

従来の運動が「未来」を志向し、現在の犠牲——ヒエラルキーに基づく抑圧——を強いる。これに対し、1999年シアトル11月30日で顕在化した新しいアナークシスト的運動は、〈いま、ここ〉の運動のなかに来るべき未来の社会——抑圧のない直接民主主義的な社会——を一時的にであれ、現前させ、かいま見せてくれる。そうした運動の原理を予示的政治という。権威主義的で男性中心主義的なヒエラルキーによって成立していたかつての革命政党や新左翼運動が「未来」の革命や理想の社会のために「現在」の抑圧を強いたとすれば、この轍を回避するための原理である。運動は目的—手段の図式で合理的であることを止める——それは自分の人生が何かの手段でないのと同様である。

したがって予示的政治は「いま」を犠牲にする生真面目なエートスよりも、唯一無二の〈いま、ここ〉で消尽する祝祭的な雰囲気と親和的である。このことはシアトルの抗議行動が音楽、ダンス、パペット、仮装によって彩られたものだったことからもうかがえる。日本では祝祭的という意味での予示的政治への志向性は、イラク反戦のサウンドデモ以降の街頭デモにもみられた。海外のアクティヴィストが多数参加し、オルタナティブ・キャンプを作った2008年の北海道でのG8抗議行動が、予示的政治をかなり意識した運動だった。また素人の乱の「革命後の世界」を先に作るという発想も予示的政治を志向するものであろう。

しかし祝祭的な運動には抑圧がないかといえばそうではない。東京の仲間たちと2012年12月にオーストラリアやドイツのアクティヴィストを招き、予示的政治をめぐるカンファレンスを開催したが、このときの報告者の一人である、オーストラリアのマーク・ゴーンが、「アンダー・コモン」という語を、予示的政治を支える装置(ないし「下部構造」)の意味で使って

いたのが印象的だった。彼は運動における情動的な関係(友情など)が、ある種の「下部構造」に支えられていることを強調し、予示的政治も同様だと言う。その場合の「下部構造」として議論されたのが、たとえば「セイファー・スペース」であった。しばしばデモなどの直接行動の際、女性、子供、障害者などの「マイノリティ」が、ハラスメントや危険を感じる人が多い。こうした危険から守られた空間を作る試みが、日本でも2008年の G 8抗議行動の際に紹介され、野営地でも作られた(たとえばその試みは Zine 『セイファー・スペース』を参照)。また山谷の労働者福祉会館が主催する夏祭りでもセイファー・スペースがもうけられている。しばしば予示的政治は一時的自律ゾーン(TAZ)の側面が強調されるが、こうした問題への持続的な関心が底流にあり、アドホックとはいえある程度組織的なサポート体制が必要であり、これらが予示的政治を支えている。

もちろん、実際に現場でこうした場が避難所としてうまく機能していたかといえば評価は分かれるだろう。ほとんど利用者がいなかったのではないかという声もある。だがこれらの避難所が実際に利用されていたかどうかというよりも、それを作る過程で提案され、議論され、問題が可視化され、共有されてきたことのほうが重要ではないだろうか。この過程で人々はニーズの多様さや差異に気づく。セイファー・スペースの存在自体が参加者に多様なニーズの存在を気づかせ配慮を促すメッセージとなる。ニーズの多様さは人々の多様さや差異に由来する。有象無象(マルチチユード)の人々の運動であればなおさらその多様さは計り知れない。

「アンダー・コモン」についても一つ。フェミニスト+クイアー・ユニットがオーストラリアのウェブ・ページからセイファー・スペースについての文章を訳しているが(<http://femqueerunit.wordpress.com/about/>)、運動における「燃え尽き」を問題にし、運動から距離を置く必要も指摘されている。おそらくこうしたケアセルフ・ケアも予示的政治の「アンダー・コモン」の一部であろう。

「闘争のサイクル」(マイケル・ハート)というものがあるとすれば、その上昇期にも下降期にも固有の困難があり、「燃え尽き」の問題がある。オーストラリアの友人は、収容所から抜け出した難民を自宅にかくまう過程で完全に「燃え尽きた」という(オーストラリアでは2000年にウーメラの難民収容施設が支援者によってフェンスが壊され、大量の収容者が収容施設から抜け出した)。その後、彼が運動に対してシニカルな態度を取っていた時期を経て、運動に復帰したのは数年後である。運動へのかかわり方を長期的なタイムスパンで考え、持続可能性の条件を考えることが重要であろう。

レベッカ・ソルニットが『暗闇のなかの希望』や『災害ユートピア』で予示的政治に関して指摘していたことだが、予示的政治は、そこに参加したり、偶発的な理由で巻き込まれること自体が、平等とは何か、直接民主的とはなにか、相互扶助とはなにかを直接体験する啓示的な経験となり、次世代の予示的政治の条件となる。つまり予示的政治自体がペダゴジック的な機能を果たしもする。マーク・ゴーンという言葉を使えば、予示的政治自体が来るべき将来の予示的政治のアンダー・コモンである。

「拒否」の「前」線情報

この列島の反転へ向かう未成の「拒否」の前線—その予兆としての「前」線＝色とりどりの『身体の述語たち』の軌跡／動線を「寄せ木細工」する試み

風聞：「路上の群集評議会」！？ ——三宅洋平の「選挙フェス」

はじめに

+1

「僕等は今の音頭取りだけが嫌いなのじゃない。今のその犬だけが厭なのじゃない。音頭取りそのもの、犬そのものが厭なんだ。そしていっさいそんなものはなしにみんなが勝手に踊って行きたいんだ。そしてみんなその勝手が、ひとりでに、うまく調和するようになりたいんだ。

それにはやはり、なによりもまず、いつでもまたどこでも、みんなが勝手に踊るけいこをしなくちゃならない。むづかしく言えば、自由発意と自由合意とのけいこだ。

この発意と合意との自由のない所になんの自由がある。なんの正義がある。

僕等は、新しい音頭取りの音頭につれて踊るために、演説会に集まるのじゃない。発意と合意とのけいこのために集まるんだ。それ以外の目的があるにしても、多勢集まった議会を利用して新しい生活のけいこをするんだ。けいこだけじゃない。そうして到るところに自由発意と自由合意とを発揮して、それで始めて現実の上に新しい生活が一步一步築かれて行くんだ。

新しい生活は、遠いあるいは近い将来の新しい社会制度のなかに、はじめてその第一歩を踏み出すのではない。新しい生活の一步一步の中に、将来の新しい社会制度が芽生えて行くんだ。」(*1)

これは、今から90年前に、大杉栄がいわゆる「大杉一派」の「演説貫い」への批判に対する反批判を行った際のことばである。

梅森直之は、いま大杉栄を読むことの課題について、次のように言う。

「こんにち大杉を読むとは、身体と社会主義を節合することで切り開かれたその地平の可能性と危険性を、二つながらに検討することである。」(*2)

何故なら「枯渇していった社会主義が、今一度オルタナティブとしての息吹を取り戻すためには、規律・訓練の作用点である身体を、その運動と理論の中に位置づけ直すことが不可欠であろうからである」(*3)として、さらに、大杉の「革命」観がいかに関心のありようをおしたものであるかについて、以下のように言う。

「大杉の革命論は、崩壊した社会主義を貫いて、現代社会にまで達する射程を持っている。それは、大杉が現代社会を構成する権力の質を、その身体を通じて明確に感じ取っていたからにはほかならない。革命と身体との密接な関連は、大杉のテキストに頻出する五感表現からもうかがえる。

(……)

「新しい生活は、遠いあるいは近い将来の新しい社会制度のなかに、はじめてその第一歩を踏み出すのではない。新しい生活の一步一步の中に、将来の新しい社会制度が芽生えて行くんだ。」

(……)

大杉にとっての革命とは、今、ここにおける実践を通じて新しい主体と秩序の創造の連鎖を触発していくことを意味していた。その具体的イメージは、次のような濃厚な身体感覚とともに投げ出されている。「みんなが勝手に踊って行きたいんだ。そしてみんなその勝手に、ひとりで、うまく調和するようになりたいんだ。それにはやはり、なによりもまず、いつでもまたどこでも、みんなが勝手に踊るけいこをしなくちゃならない。」(*4)。

大杉栄の「革命」のイメージが「踊り」として表現されているのは、直接には「演説貫い」との関わりにおいてであるが、あるいは、やがて日本でも生まれてくる「古典バレエ」から分岐してくる「モダンダンス」と共鳴しているのかもしれない。

それはともかく、そのイメージを共有しながら、ここでは、文字どおりにその「踊り」をダンスとして受け取ってみよう。

+2

周知のように、ここ数年来「風営法」による「クラブ」＝「ダンス」規制をめぐる攻防がくりひろげられている。その「生政治」的攻撃は、安倍政権の策動とからんで、若い層の身体を逆なでしている。「踊ってはいけない国、日本」(*5)で、「踊り続け」(*6)ようとする身体は、「カウンター生政治」を突き出し、「DANCE to DEMONSTRATION」となって生起している。

「自分の身体を「取り戻す」ないし「奪い返す」こと、それが、生政治のポジティブな側面です。僕たちのイニシアチブによって行う、いわば「カウンター生政治」です。メジャーな権力による家畜化に抗い、自分の身体のイニシアチブを奪取することです。(……)

ダンスの自由を求めることも、今言った「カウンター生政治」の一環であると考えられるわけですね。だから、公教育でのダンスの必修化というのは、奇妙な話だと思うんですよ。」

「ダンス」とは、権力論の視点からは、「自分の身体を自分なりにコントロールし直す」ことであると規定できるでしょう。ダンスを楽しむことは、フーコーの言葉を使うなら、既得権益のための身体の「ディシプリン」(規律訓練)から逃れることです。身体技法のイニシアチブをめぐる闘いがあるわけですね。常識・良識的な身体のコードから自分を逸脱させること。踊る身体の軌跡は、オルタナティブな共同性の様態をスケッチしている。規律訓練された身体、共同体を、別の形へと再構成する。従属的でない自己の構え、自己準拠する構えをつくるための技術としてのダンス。そのように考えるならば、今回の問題は、少し法律を変えて踊れるようにしようというだけではなく短期戦術としては、控えめにそのくらいの目標でいいのかもしれませんが原理的、ないし中長期的には、個々人のいわば「マイナーな身体づくり」の権利をどうやって「取り戻す」か、もっと激しく言うなら「奪い返す」か、という問題であると考えられます。」(*7)

+3

身体を貫く「カウンター生政治」の感覚、それは、ある人のことばを〈引用〉すれば「B 感覚」と言ってもいいだろう。

「B 感覚」、つまり、「BIO・POLITICS」を貫く身体感覚は、その生起のながい系譜のうえにある。(*8)

この列島に限っても、〈68〉年の身体の叛乱があり、その〈68〉年の反転の反転としての00年代の路上において、とりわけ「イラク反戦」をめぐる「サウンドデモ」として、それが隆起したことは、記憶に新しい。

「まず権力や資本によってずさんなエディットを施されたぼくらの身体感覚、神経にダイレクトな刺激を与えてリミックスし直し、そこから矛先を敵へと向けていくぐらいの強度が必要だ。だからこそ、用意された選挙じゃなく、空間を占拠し、音に身にさらすサウンド・デモなのだろう。」「そこで、DJがかける音楽は、テクノやハウスなんかのダンス・ミュージックが主。どちらにしろ、サウンド・デモは音楽的にも、風景的にもその街との親和性、敵対性という両義的要素によって、支えられている気がする。渋谷でのサウンド・デモに街行く人々が次々と踊りながら、加わってくるという、従来のデモでは考えられないような異様な光景を生み出したのも、その街の中で、閉じながら開く、一種の自治空間的な雰囲気があったからだろう。言うならば、それは権力と資本に骨の髄までむしゃぶりつかれて非一政治化させられたカラカラの身体を、音の洪水の中でシェイクする身体再生装置。そう考えると、少しは身体が潤ってくる気にもなる。」(*9)

「今日の日本において、抗議運動としてのデモはサウンドの媒介力を備えるようになった。近年のデモは、シュプレヒコールだけでなく、音の媒介力をもって自らのスローガンを

アピールするようになってきている。こうした運動形態をもつデモのなかでも、二〇〇三年から起こった「サウンド・デモ」は日本におけるその新奇性によって注目を浴びた。

サウンド・デモは一風変わったデモである。このデモは、その名の通り、音楽や楽器の利用が前景化されたデモであり、参加者はサウンドシステムから鳴り響く爆音に合わせて踊る。サウンドの力は、歩行者を参加者へと転換させる機能を果たし、車道と歩道の境を消し去っていた。このような様子は、いわばパーティの様相を呈しており、それが新奇であるといわれた。」(*10)

「有事法制反対、自衛隊のイラク派兵反対、戦争反対、殺すな、反ブッシュ、反小泉、反石原。サウンド・デモは実際いくつかのスローガンを掲げているし、そのどれも賛同出来るのだけれど、僕はデモの最中のあのコールがどうも苦手で、そこに乗ってったことがない。それより踊るのに夢中だ。確かにスローガンやコールには搾取されるような感覚が付きまとう。それに対して、踊る、という行為はそこから自由だ。踊っていて搾取されているような気持ちになる DJ もいるけど、サウンド・デモではある種の緊張がいい方に働いて、そんなことはない。そして、ビールを飲んであははとか笑って踊ってるだけ、そんな勝手な事も許してくれるのがサウンド・デモだ。それどころか、スローガンには賛同出来なくともいいんじゃないか。怖い。でもガシガシ踊ってるようなひとがそもそも路上で踊るってのが政治的だし、どんなスローガンよりもサウンド・デモはそれを大事にしているはずだし、そこに賛同出来るんだったらそれでそのひとは仲間なんじゃないか。だから、そうか、僕は「つーか、踊りに行こうよ」と言えばいいわけだ。「最高のパーティがあるんだ」」(*11)

それ以降、社会運動はおしなべて、アートとしての社会運動／社会運動としてのアートという色をおびており、「3・11」以後の反原発アクションに、それは著しい。

ここで、とりわけ00年代のストリートで生起した身体の隆起をつらぬいてきた「B 感覚」のありようにふれたオリジンを〈引用〉しておこう。

「ある種のロックンロールのざわめきと主体の政治的緊迫は非常に近い快樂であり、MC5 はそのことに気付いていた。磯部氏の感じたこれもおんなじ、ヒリヒリする武者震いに似たアレ。この感覚は、一つの向精神効果といってもいいだろう。カフェインやアルコールやニコチンとも違う合法的なハイだ。山登りや運転や潜水やダンスや格闘技とも似ているけれど違うし読書とも近いが違う。そうね、アートをアウト・プットしてる気分にも大分似ている。

(.....)

自分へ世界が距離を詰め急に近付いてきた瞬間に脳の中でドキンとするアレだ。世界の構造に手を振れて、グラグラと揺すった感じだ。概念を改めてまさぐって自分以外とに差異を作った瞬間だ。

僕はこれを、今流行の政治哲学用語である生政治 Bio-politics に絡む向精神効果と考えた。エクスタシーの E、LSD の L ならぬ生政治の B とか？

(.....)

アートとは本来、政治と別次元から人間を掘り起こし、権力が作る人間概念に対決を仕掛ける行為だ。

(.....)

Bとは世界を知覚する快樂でイキイキと生きる行為だと、>(*12)

その鋭敏な嗅覚で「B感覚」のありかをつかんできたRLLが、再び「B感覚」というタームで、先の2013年7月の参院選での「三宅洋平の選挙フェス」にふれている。

「参院選に立候補したミュージシャンと役者のふたり、三宅洋平(比例全国区)と山本太郎(東京選挙区)が仕掛けた選挙フェスに、ここ数日夢中だ。

ふたりはマジで国会議員になろうとしている。そのために能力をフル回転させて、ぶっ飛ばしている。彼らの態度には、ネットに溢れるシニシズムやニヒリズムやルサンチマンが全くない。これは驚嘆することだし311後にとっては当たり前のあり方だとも云える。

フェスと選挙活動を兼ねたものだけど、2007年杉並区議選を松本君を担いで遊んだ「高円寺一揆」の記憶がよみがえってくる。マツリゴト政祭一致なところまったく同じ。

そこと同じ場所で、高円寺駅前での昨年末の衆院選のときの山本太郎応援のパーティがあつて、そこでの三宅洋平にいたく感じ入ってしまったから、ハマってしまったのかもしれない。

特に三宅洋平の吐く言葉が、政治と詩と音楽のその高度な融合が、今までにない現代的な表現としてアートとしてきていると思ってしまった。バンド時代ミュージシャンとしての彼もとうぜんカッコよかつたんだけど、そこはまだ音楽だった。聴いている間は最高の時間だけど、翌日には忘れてしまう多くの音楽のひとつだった。年末のパーティでは、この乱世の時代になったリアリティを、言葉と音をシンクロさせたムーブメントとして、忘れられない体験として刻み付けられた。特にボブの反原発の「Redemption Song」を三宅洋平が現代日本語に意識したこの曲で、僕は涙を流した。

Redemption Song

Redemption Song

2006年に「B感覚」ってブログを書いている。

<http://www.rll.jp/hood/text/intellipunk/20060218060938.php>

B感覚とは、身体が政治と出会うことである、変成意識のこと。ある種の覚醒効果。もちろん、機動隊にボコられて両手に手錠をかけられ取り調べを受けた僕の2011年911体験のときもバッドではあつたがB感覚でバッチシキマつた。その春の原発やめろデモ！の高円寺での吹き上がった瞬間でも。2007年の高円寺一揆でも、2008年反G8での大阪府警に人間の鎖にタックルされたときも。昨年(2011年)の紫陽花革命の車道決壊のときも。イラク反戦サウンドデモでも。この10年はこれにずっと痺れてきた。

昨年の山本太郎応援ライブの三宅洋平の「Redemption Song」から～今回の選挙

フェスまで、その B 感覚を感じてビリビリしている。」(*13)

+4

「新しい時代は始まった」と、RLLは言う。

「Tシャツ髭キャップでギターを携え、「ヤーマン！」とラスト式挨拶、演説はポエトリーリーディングのように吐き出される。この祭政一致スタイルは「〈政治〉を〈マツリノゴト〉に——音楽・文化のような、愛のあるものに取り戻したい」趣好である。選挙カーの名前連呼やドブ板の挨拶回りや駅前の朝立ち、出馬・選挙戦・出陣式などの戦争比喩を廃止して形骸化した従来の選挙運動を刷新した。

カネの無さや供託金600万円の高さを語り、放射能や不正選挙や国際金融権力などネットジャーゴンやスピリチュアルや陰謀論すらも開陳。ツイッターで直接対話し、すべてをツイキャス中継、YouTube でアーカイブ化、交流も情報も交換するネット選挙時代の水平開放コミュニケーションを試行。シニシズムやニヒリズムやルサンチマンがなく屈託のないしなやかな存在感だけがあった。

3・11 後に逃げて沖縄に来ててもそこにオスプレイが、どんなに逃げてても政治は追いかけてくるのなら政治をぼくらの手に取り戻そう、デモ・嘆願・陳情・院内交渉といろいろやったけど、と立候補の動機を明かす。僕らが政治家を遠避け孤独にしたから聞がうまれた、専門家へのお任せをやめ当選後も手伝いに行こう、と「愛と応援の循環型社会」を提案した。「ボブ・マーリーもゲバラもいない、皆フラットでひとりの重さは変わらない、あとはあなたが行動する時だ」と煽る新手の直接民主主義を志向し、ツイッターフォロワーをノマド秘書とし、バブル以降に育った同世代に各地方議会へ出よと誘う。

「あなた」とはまた「わたし」である(これは I & I というラストファリズム用語で捉えられる)として安倍首相やワタミや幸福実現党ですらリスペクトし対話したい、アイヌ由来の和合のための言葉の戦争「チャランケ」、ネイティブアメリカンのイロコイ連邦民主制を国会で施行したいとする絶対対話主義。

ベクレル検査棟を各県にと考え、祝島に馳せ参じ、緑の党のネットワークで全世界400基余の原発の廃炉を目指し、反グローバリズム、反 TPP を説明し、オーガニックTシャツや R 水素を紹介し、食器洗剤をやめ自然農を实践した、惑星意識を持ったエコロジー思考のグリーンアクティビスト。

ステルス戦闘機やイージス艦の費用があれば「文化は最大の輸出品」でスペシャル文化外交をして日中・日韓の摩擦をなくすと断言し、戦争経済から脱出したくないですか！と全世界の軍事産業を廃しようとするインターナショナル平和主義。最終日には憲法九条を詠み至高の憲法を称揚して聴衆を泣かせる。

そして政治からウンザリしていた人びとから全国比例十七万得票した。当選した東京選挙区の山本太郎の六六万票に比べ、低いという面はあるが、それを補うほど若者たちが熱

狂して現象化したのは事実だ。選挙アドバイザー斉藤まさしが「革命」と語るが、三宅はこれを「革命ですらない!」「皆一人一人の意識と生活の変化」「世の中はもう変わりましたよ」と表現するパラダイムシフト思考。今までにない新しい希望だ。」(*14)

+5

上でもふれられているように、「選挙＝占拠」運動とでも言うべき営みはすでに「高円寺一揆」で試みられたものだが、三宅洋平の「選挙フェス」でも、そのようなありようが顕著であったように見える。

また、以前沖縄の「ヘリポート」建設阻止の高江の「座り込み」闘争についての「占拠するアート／アートする占拠」というレポート(*15)に接したことがあるが、風聞するところ、三宅洋平の「選挙フェス」は、さながら「選挙(運動)するアート／アートする選挙(運動)」でもあったと言えようか。

このように、このたびの三宅洋平の「選挙フェス」は、この列島のストリートに生起してきた「B感覚」の系譜にあるものと言ってよいように見えもするし、全国各地7カ所を遊動し、全国の「一味同心」の参集をはかったその「選挙フェス」は、その断面を切り取ってみれば、「3・11」前後に世界各地で展開された「オキュパイ」運動、とりわけ「ウォール街占拠」に近接しているようにも見える。

「ウォール街占拠運動は、準備段階から従来の社会運動スタイル、すなわち、演説者と聴衆という一方通行の関係であるラリー(集会)型の運動スタイルや各運動組織を代表する指導者たちの合意で物事を決めていく実行委員会型の運動スタイルの根本的な変革をめざしている。それは、すでに述べたとおり、ワーキング・グループでの議論を基礎に、誰でも参加できる全体集会での——まさに平場で合意を形成していく——直接民主主義を強く志向している。一人ひとりの自発的な参加と意志を大切にしながら議論をつくして合意を形成する。運動のなかに、指導者やヒエラルキーをつくらない。新しい水平的な社会関係を創り出す。これがシトリンらのいうHorizontalism(水平主義)である(Sitrin 2006 : Sitorin 2011a)(……)広場＝公共空間の占拠運動は、社会運動を物理的に可視化していく運動である。そこに人々が集い、議論する。誰でも参加し、発言できる **General Assembly** (全体集会)が開催される。様々なワーキング・グループの会合が開催される。意志決定や合意形成のプロセスが可視化されていく。台所、図書館、メディア、情報、医療などのテントが設置され、占拠を維持し、そこで生活していくうえで必要な活動が進められる。広場を占拠し続けることは、参加者たちがめざす社会や社会的関係をその場に創り出す実践である。それは参加者たちがめざす新しい社会を(予示)することでもある。

ウォール街占拠運動は、その活動を新旧様々なメディアを通じて、全米へ、全世界へ可視化させている。**Occpied Wall Street Journal**をはじめとする様々な紙メディア(それは同時にウェブサイトにアップされる)、ウェブサイトやブログのみならず、インターネット

を通じた動画中継や YouTube、Twitter、Facebook などのソーシャルメディアが積極的に活用されている。」(*16)

ここで冒頭でふれた大杉栄のことばの続きを引いておこう。

「音頭取りの音頭につれて踊る社会では、学校でも演説会でもそうだが、講壇や演壇の上の人は、一人でも長い独白を続けて、下の人々に教える。下の人々を導く。しかし人間がだんだん発意を重んずるようになると、その長い独白がちよいちょい聴集の質問や反駁にてあって中断される。そしてついには、いわゆる講義や演説が壇上の人と壇下の人々との対話になって、一種の討論会が現出する。

(.....)

弁士と聴集との対話は、ごく小人数の会でなければできないとか、十分にその素養がなければできないとかいう反対論は、これでまったく事実の上で打ちこわされてしまった。

僕等のいわゆるヤジは、決して単なる打ちこわしのためでもなければ、また単なる伝道のためでもない。いつでも、またどこにでも、新しい生活、新しい秩序の一步一步を築きあげて行くための実際運動なのだ。」(*1)

「我田引用」がすぎるかもしれないが、ここで〈引用〉するにはまさにうってつけではないか。

+6

今号の「FOCUS」のコーナーの末尾でふれたように、この間の私・たちの「安倍のつくる未来はいらない」の〈前〉線の創出という関心からは、三宅洋平の「選挙フェス」のありようを、「路上(ストリート)の群集評議会」! ?と試してみたい誘惑が避けがたい。

むろん安易にそのような言辞を弄したいわけではない。私・たちは、「革命期」に生起し、「革命権力」によってその営みを篡奪されてきた民衆(ピープル)の「憲法制定権力」の原基形態としての「評議会という幻想」にとりつかれてはきたが、それが非望の遠い夢であることを、自覚していないことはない。「路上の」・「群集」と言っていることに、注意して欲しいし、「選挙フェス」にはしっている「議会制」への無邪気なベクトルをみないでいるわけでもない。このたびの「選挙フェス」がその狙いを実現するには、あたかも三宅洋平は永遠の「候補者」であり続けなければならないかのようにもみえる。

しかし、私たちは、したり顔をしてそれを見物していればいいというようなところに、立っているわけではない。その「選挙フェス」が、三宅洋平が永遠の「候補者」であり続けなければならないようなものとしてあるということは、既往のタームで言えば、「議会内政治勢力と社会諸運動」のブロックのありようの問題に他ならない。

とすれば、問われているのは、私たちなのではないか。とりわけ、「B感覚」の系譜を生き＝行き継ごうとしてきた私たちなのではないか。「議会内政治勢力＋社会諸運動」のブロッ

クを、久しく空位においてきたのは、私たちではないのか。三宅洋平の挑戦をおしあげるにたる安倍政権にむきあう社会諸運動の連合をなお創出することができないでいるのは、私・たちではないのか。

「路上の群集評議会」が「路上の群衆評議会」に、「路上の民衆(ピープル)評議会」に、そして、〈民衆(ピープル)評議会〉に生成変化するという夢を手放さないかぎり、「三宅洋平現象」からその「選挙フェス」の可能性を読み尽くさなければならないのは、私たちではないのか。この「戦争の出来る国」へ向けた「セキュリティ装置」の著しい亢進の時に、その機能の喪失の極みにあるかのような「議会制を超える議会制」(*17)ににじり寄る試みに挑戦しなければならないのは、私たちではないのか。(*18)

——今回の「拒否」の〈前〉線情報は、このようなモチーフから構成されている。この列島のストリートに生起してきた「B感覚」の3・11以後現在までの流れをたどり、三宅洋平の軌跡との重なりをはかりながら、その「選挙フェス」のありようを探る。その上で、そのありようをめぐるいくつかの論評の検討を通じて、私・たちの認識の妥当性を検証することを、試みてみたい。

〈註〉

1. 大杉栄「新秩序の創造」(「大杉栄全集」第6巻所収)
2. 梅森直之「身体感覺的社會主義のゆくえー大杉栄のアナーキズムと脱植民地主義の言説」(「現代思想」2004年5月)
3. 同上
4. 同上
5. 磯部涼編著「踊ってはいけない国、日本」(河出書房2012))
6. 同上 「踊ってはいけない国で、踊り続けるためにー風営 法問題と社会の変わり方」(同上2013)
7. 千葉雅也「享樂を守るために、法のクリエイティブな誤読を」(5に収録)
8. その系譜については、毛利嘉孝「文化＝政治」(月曜社2003)・「ストリートの思想」(日本放送出版会2009)参照ーなお、毛利「3・11以降の反原発運動にみる政治と文化」(「ネグリ、日本と向き合う」NHK 出版新書2014・3)は、この間の反原発運動を、簡潔に整理している。
9. 二木信「祭りの余波はまだまだ続く でも・・・DEMO・・・サウンドデモ」(「音の力〈ストリート〉占拠編」インパクト出版会2005)
10. 「サウンドの媒介力と都市」(吉見俊哉・北田暁広編「路上ノエスノグラフィ」せりか書房2007)
11. 磯部涼「デモパーティ論」(「情況」別冊2004・3)

12. Wearable Ideas RLL－「B感覚」

(<http://www.rll.jp/hood/text/intelipunk/20060218060938.php>)

13. Wearable Ideas RLL－三宅洋平の選挙フェス

(<http://www.rll.jp/hood/text/intelipunk/20130708010223.php>)

14. 川邊 雄(RLL)「新しい時代は始まった－三宅洋平の「選挙フェス」(「季刊ピープルズプラン」NO・62)

15. 阿部小鈴「占拠するアート/アートする占拠」(「VOL」・3以文社2008)

16. 青野恵美子・高須裕彦「ウォール街占拠運動」(「労働法律旬報」NO・1774 2012・8・25)

17. 市野川容孝「社会」(「シリーズ思考のフロンティア」岩波書店2003)・市野川他「変成する思考」(同上2005)参照

18. 市田良彦「「社会的なもの」の行方」(前掲・「ネグリ、日本と向き合う」)は、この間の反原発運動の危うさを、鋭く指摘している。

私・たちの今回の試みこそ、その指摘に該当しているようにみえるかもしれない。上の17に挙げた市野川の営みは、まさにその点を巡る論点の整理を行っている。私・たちはそれに大きく触発されてきたが、「議会制を超える議会制」についての市野川の捉え方に共鳴しているわけではない。「評議会幻想」がその共鳴を阻んでおり、その意味でも上でふれた私・たちの問題意識はいわゆる「議会外左翼」のそれを踏襲するものではないことは、言うまでもない。この点については、本号の「 FOCUS 」で扱った問題を更に検討することを通じて、考えていきたい。



<http://starserverclub.com/?p=278>

I. 「B感覚」の系譜：ダンス・トゥ・デモンストレーション

I-1. 2003年—サウンドデモ

全世界的なイラク反戦の波の中、「戦争反対・路上解放」を叫ぶ独自隊列として、ASC(Against Street Control)のサウンドデモが、東京渋谷の路上に登場した。

5月10日 STREET RAVE AGAINST WAR—関わっていた当事者たちが、その時の「皮膚感覚」を語っている。

〈資料・1-1-A〉*1

野田 (……) 昨日に関して言えば、不思議なくらいかなりスムーズに「音の力」と政治的意思表明が結びついたよね。

水越 (……) 音楽のリズムや爆音にまぎれて、自分の声が街の中で孤立しない感じがして勇気が出たんじゃないかな。そうして自分たち自身が「音」に——まあ「雑音」なんだけどさ——なったよね。DJ マユリがかけたビーステイナー・ボーイズ「ファイト・フォ・ユア・ライト」の「(トゥ)パーティー！」で、思わず声を合わせてたというのも、誰に訴える、というより、「言いたい」「言える」「叫べる」勇気を音楽にもらった感じだった。

野田 (……) よくもまあ、あそこまでアナーキーに盛り上がったと思うよ。八〇年代末のイギリスで最初にレイヴ・カルチャーが顕在化したとき、「おまわりに包囲されながらも誰もダンスを止めなかった」というエピソードをよく聞いたじゃない？ それに近い光景がこの日本でも見られるとは思わなかったからね。公園通りを下ったところで機動隊に囲まれても、誰もダンスを止めなかったんだから。

(……)

水越 (……) 今回やってみて、いちばん面白かったことは、美術の人たちや左翼と「一緒に」作れたということ。(……) 私が今回やったデモのことで強調したいのは「音の力」だけじゃない、「ヴィジュアルの力」だけじゃない、「政治的な力」だけじゃない、それらが集まった時にだけ実現できるものが見えた気がするということなの。

(……)

野田 それは本当にそうで、デモするときの緊張感って、ストリートの置かれているある程度の状況を皮膚感覚でかき取っているからだろうしね。ダンス・ミュージックがあの場合で有効だったのは、その緊張感や政治的態度を実におおらかな次元にまで押し上げたからじゃないのかな。

(……)

水越 (……) 政治系とか音楽系とかっていつまでも分けられるようじゃつまらないと思うよ。その境界がどこまでも曖昧になって、渾然としながらストリートを埋め尽くしたい。だから、デモで騒いだ後には、両者が言葉で話せるようにならなきゃいけない。音と言葉に交互に耳を貸してると、音も言葉もどんどん変わって聞こえてくると思うから。

〈資料・1-1-B〉*2

ASCは、初めノーマークであった。(……)警察が甘く見たのだ。(……)渋谷の街中で一挙に500名にまで膨れあがったデモ隊はストリートをわがものとした。(……)

ASCは当初から Reclaim the Streets! の運動を念頭においていたが、(……)皆がストリートレイヴのもたらす集合の力をのっけから体感することになった。しかし、(……)警察は必ず対策をたててくる。主催者自身がそう自覚していた。

5月30日 有事法粉碎 STREET PARTY TO DEMONSTRATION ー
ほとんどの人間が弾圧を予感していた。つまりASCは覚悟したうえで、勝負に出ていたのだ。「派兵反対・路上解放」と今言わずして、いつ言うのか、と。

*3

〈資料・1-1-C〉*4

(……)現場でいつもナマナマしく感じていたのは、「今日こそ何が起こるか分からないし、何が起こってもおかしくない」という文字通りのヤバイ感覚でしたね。(小田マサノリ)

〈資料・1-1-D〉*5

クソみたいにつまらないデモもあれば、ヤバすぎるデモもある。デモは人を変え、人はデモを変える。一つとして同じデモなどない。出会い、言葉、緊張、感動、戦慄、暴力、そして、愛。全てが路上と街角にある。デモ隊が三々五々蝟集し真っ黒な塊となり、サウンドカーから分厚く重苦しいビートが巨大な心臓のように空気を鼓動させ、人垣を突き抜け、震わせ、路上に生まれた新しい生命が動き出す。(……)動き出した途端、その一瞬、一瞬に、イチかバチか、常に何かを賭けている。(……)

〈資料・1-1-E〉*6

(……)終始デモ隊のペースで踊る練り歩きがふたたび貫徹されたのだ。先頭についた

トラックの運転手は警察の恫喝にめげず、スローペースで運転を続ける。活動経験者は隊伍を組んでトラック直後の車道側(「右フロント」)について規制線をはねかえすために汗をかき。熱狂するデモ参加者＝踊り歩く人たちと機動隊の緩衝となって、ギリギリの線で仲間たちに「警察との対峙」のありようを例示する。弾圧させるなという緊張のもと、そのほかの要所にもはりつく。そのために事前に「意志一致」をしておく。盾をもった機動隊員がトラック前方の歩道と車道の間からの侵入をはかれば、参加者は参加者で「邪魔をするな！」といわんばかりにモッシュしながら押しもどす。面割りにピッタリくっついてくる公安をよそに、DJがパフォーマンスに没入しPAが煽りをくれる。トラック荷台後方からはダイヴ。前回以上に飛び込みの参加者がふえ、水ぶくれするデモ隊が街を席卷する。

ついに予感が現実のものになった。

7月19日 PARTY!! DEMONSTRATION!! and BULLSH IT!!

禁止することを禁止する！！ ANARCHY, PEACE, FREE!! DUMB

〈資料・1-1-F〉*7

警視庁の規制はといえば当然ながら回を重ねるごとに強度を増しており、この時のデモでは歩道側に機動隊が並んで通行を遮断し、野次馬の合流を阻止しようと躍起になっていた。車道側から盾で圧縮をかけるのはいうまでもなく、サウンドカーの前には指揮官車を、最後尾にさえ機動隊をはりつけて外から見えないようにするなど、周囲から封殺する「軍艦巻規制」のプロトタイプをぶつけてきたのだ。

(……) 私服が突然 H の戸籍名を怒鳴ってつっこんできた。やっぱり来たか！そしてその背後には遅れをとるなとばかりにいきりたった機動隊の連中も続いていた。これが二名の逮捕者を出した弾圧の引き金となり、H が東京都公安条例違反(停滞)で、もう一人が混乱のなかで公務執行妨害をデッチアゲられた。

(……) 弾圧後には主催関係者への聞き込みや任意出頭要請などの攻撃もあったが、ASC はそれをはねのけ、救済 DOP (Defend Our Party) をたちあげてフル回転で救援に没頭した。

I - 2. 2003年10月－弾圧をくったデモによろこそ！！

SET BUSH FIRE!!! STREET PARTY+DEMONSTRATION

〈資料・1-2-A〉*8

(……) 機動隊がデモ参加者を車道と歩道からぐるりと囲い込み、二人に対して、一人という異様で、不当な弾圧にもかかわらず、1000人以上もの人が集まるほどに膨れあがった。(……) サウンド・デモに、街行く人々が次々と踊りながら、加わってくる(……)

〈資料・1-2-B〉*9

(……) 政治的立場や思想やジャンルや世代やセンスも異なる人々を駆り立てていたのは、「何が起こるか分からない」という予測不能な経験への期待、妄想、そして夢想だった。言ってしまうと、そこで夢見られていたのは、新しいデモや新しいパーティではなく、もっと根本的に路上の秩序、そして自らの身体感覚を揺さぶる意味での「暴動」だった。だから、デモでもレイヴでもストリートパーティでもあり、そのどれでもないという新しい空間を切り拓くことが可能だったのだ。

そういう意味で、2003年10月5日に行われた「SET BUSH FIRE!!!」は一番のハイライトだった。出発前に宮下公園で行われたフリーパーティでは、ハードコア・バンドのストラグル・フォー・プライドやラッパーのECDのライブがくり広げられている横で、ペペ長谷川や鵜飼哲、元ゼロ次元の加藤好弘らによるシンポジウムが開かれていて、さらに公園の奥ではシロー・ザ・グッドマンのスピニングするジャングルの上でヒップホップ・グループの temple ATS (現・降神) や、MSC のラッパー・漢がフリースタイルをしていた。公園を囲い込んだ機動隊とマリファナをネタにした流暢な漢のライミングは、バツサリと分断されていた現場と現場をライムひとつで一気に繋げているようで圧巻だった。7月19日の「Anarchy, Peace, Free!! Dumb 禁止することを禁止する！！PARTY + DEMONSTRATION」では、参加者と現場責任者の二名が逮捕され、その日も1000人の参加者を500人の機動隊が車道と歩道から囲い込んでいた。それでも、ランキン・タクシーのサウンドシステム〈TAXI HiFi〉を搭載したサウンド・カーの上で、フォース・オブ・ネイチャーのDJ ケントがここぞとばかりにスピニングした、パブリック・エネミーの"Fight The Power"に群集が狂喜乱舞する、その光景は、やはり「暴動」としか表現のしようがないものだった。(……)

〈資料・1-2-C〉*10

ぼくらの住むこの世界には、デモに出る理由があり (イルコモンズ)

反戦サウンドデモは、大阪・京都・名古屋に飛び火した。警察の妨害をものともせず、車道と歩道を融解させるほどの熱狂的なエネルギーを出現させていった。

〈資料・1-2-D〉*11

踊らされるな、 自分で踊れ



I-3. 2007年4月-「高円寺一揆」:「選挙」=占拠の1週間

サウンドデモは、それを権力や資本主義とのせめぎあいの「場所」として明確に意識し、そこに「音の力」をしかけようとするDJやミュージシャンとその「場所」を共有しようと群れ集まったひとびとによって、しだいにパフォーマンス化していく。その極みとも言うべきありようを呈したのが、2007年4月の「高円寺一揆」だった。

日 高円寺駅南口に選挙カー横付け 改札口にむけ大音量:DJ・フィラスティン・ECD-駅長が怒鳴り込む

- 月 駅北口の交差点の真ん中に運動会用のテント
- 火 ハードコア系ロックバンドが出張るー「氣勢をはる行為」で警告
- 水 ダンスパフォーマンス BABY-Q 道路の真ん中で踊る！寝そべる！ーバス・タクシーがよけて通る
- 木 わざわざ選挙区外の新宿アルタ前へ
駅前で狸をモチーフの路上劇
- 金 街頭でトークイベント:雨宮処凜・成田圭祐・松本はじめ、進行
ペペ長谷川ー酔っ払いがダイヴで乱入
- 土 16時から駅前を占領 500人 自民・公明にゆずらず モッシュ&
ダイブしまくり 「ブロックパーティ」状態で20時まで * 12

〈資料・1-3-A〉* 13

奇妙な縁は、いつも 路上でつながる

(……) 2007年4月に松本哉が杉並区議選に立候補する。2006年4月30日にフリーター全般労働組合(以下、フリーター労組)の呼びかけで行なわれた「自由と生存のメーデー 06——プレカリアートの企みのために」のサウンドデモで、トラックの荷台に乗っていたDJがはじめて逮捕され、それ以降、乗車申請をせずに荷台に乗ることは逮捕の危険性を孕むことになっていたため、「家賃デモ」では、DJやミュージシャンは荷台の横をカニ歩きしながらパフォーマンスしていた。そういう背景もあって、デモではない「路上解放」の方向性を模索して、選挙を使って路上占拠するオルタナティブ・フェスティヴァルとでも言うような高円寺一揆が素人の乱によって準備され、4月15日から21日まで、毎日サウンドシステムを積んだ選挙カーが高円寺駅前に登場し、連日イベントがくり広げられた。

4月15日。晴天。選挙カーは高円寺駅南口のバス停留所のすぐそばに横付けされた。オープニングには不釣合いなノイズ・ミュージックをバックに松本哉が「自分たちの街は自分たちで作る!」「先に革命後の世界を見せる!」とアジテーションすれば、山下陽光は「こういうのが自治だろ!」と叫んで、5、6人の頭上に勢いよくダイヴする。DJ/アクティヴィストのフィラスティンが、駅前の路面に次から次へと叩きつけるエッジの効いたエスニック・ブレイクスのミクスチャー感覚は、駅前に集まった、まるで統一感のない群衆のサウンドトラックとしてぴったりはまっている。フィラスティンのライブに飛び入り参加したECDの「働かねーぞ!」というコールに、それまでバラバラに踊っていた群衆が一気にレスポンスを返す。さらに、北口に移動してから、ECDがアカペラで“言うこと聞くよな奴

らじゃないぞ"をラップすると、どこからともなくコール&レスポンスがはじまって、何人もの声がまるで渦巻きのように広がって駅前を覆い尽くした。高円寺一揆は、自治をキーワードに「杉並に貧乏人の一揆を！！」というキャッチフレーズや、放置自転車の撤去反対、路上喫煙解禁、路上の監視カメラ撤去というスローガンを掲げていたが、駅前の光景こそが高円寺一揆のコンセプトそのものだった。

〈資料・1-3-B〉*14

「公共」を取り戻した

鶴野 済(ライター)

駅前という場所で、パーティやライブやトークやパフォーマンスやアジテーションをあれだけ好き勝手にやること自体が革命的だった。日本の街の構造からして、駅前は公共の場の最たるものなのに、今ではそこが「買物」と「通勤・通学」のためのこぎれいな通路になり下がっている。その、奪われていたことさえ忘れかけていた「公共」を取り戻したのが気持ちよかった。こういうことは選挙活動じゃなくても、できていてしかるべきだったのだ。他にもいくらでもあるはずの、下手をすると何百年も前から少しずつ「奪われていたもの」や「できなくさせられていたこと」を、こうやってひとつひとつ、その記憶ごと取り戻していくことが大事だし、面白いんだろうなと思った。

とは言っても実際は、選挙活動全体がひとつのハプニング・アートみたいで、「今日はどうなってるのか」を見たくなり、連日のように通ってしまったただけなんだけれども。

〈資料・1-3-C〉*15

ツアーで日本に滞在していた Filastine* が、「素人の乱」の「一揆の呼びかけ」に応え、東京都杉並区にあるJR中央線・高円寺駅前で路上ライブを行った。

(……) プレイ後の Filastine のコメントは「ははは、疲れた、しかし、ナイスだった」、そして「民衆のエネルギーに驚かされた。」だった、という。

言うこと聞くよな奴らじゃないぞ、
働かねえぞ、働かねえぞ、
職質やめて、職質やめて、
言うこと聞くよな奴らじゃないぞ
「言うこと聞くよな奴らじゃないぞ(アカペラ)」
(feat. 素人の乱 + T.C.D.C.)



それは遠くからみると、こんな感じだったらしい。説明なしでみたら、ほとんど一揆その

ものだが、至近距離でみたそれは、これとはまた景色が違っていて、それはもっと解放的で、祝祭的だった。

(……)

初日としてはまったく申し分のないばかり騒ぎだった。大切なのは、こういうばかり騒ぎによって、見えないものや存在しないことにされてしまってる人びとのいろんな情動や思いを目にみえるものにする事だ。「こういう社会にしたい」というビジョンを、よりリアルなかたちにし、その空気を共有することだ。これはまだほんの地ならしにしかすぎない。一揆は、まだ、はじまったばかりだ。

〈資料・1-3-D〉*16

フィラスティンと「異花受粉」、 それから「場所」について

成田圭祐

6月にドイツやデンマークのコペンハーゲンを訪れたが、そこではフィラスティンの言う「異花受粉」の結果として、アクティヴィストとアーティストの共存が、一個人の内部も含め至る所で見られた。スクワットに滞在したり、様々な抗議行動に参加して分かったのは、その共存は、スクワッティング、公園や街頭でのパーティやライブ、デモ行進など、「場所」をめぐる権力や資本主義との実際のせめぎあいの中で培われているのだな、ということだった。

(……)

アートやら音楽やらの活動をやってる人が、規模の大きさや表現の形態や質よりもまず先に、「場所」を作り出すことから考えて動き始めたら面白いと思う。政治活動においては、何かことあるごとのカウンター・アクションだけではなく、日常的にラディカルに「場所」を求めていく人と行為がもっと増えたら状況も雰囲気も一変すると思う。関わる人の幅も広がる。

では、実際にどんな方法があるのか、「選挙戦」を「占拠戦」に転換することに成功した今回の「高円寺一揆」は有効な一つの例でしょう。誰かのお膳立てや「ヒーロー」の登場を待ってないで、自分自身でいまそこから動き始めてしまおう。

ストリートの空気 動かしてやるぜ！

サウンドデモ——いま・ここでの解放感

街におけるノイズになる！

一瞬のユートピア的空間の創出

—— 一人一人の〈身体〉の記憶と人のつながりは、種となって、まかれた。

〈資料・1-3-E〉*17

人はどんちゃん騒ぎのなかに社会変革の夢を見るか

(……) だが、〈われわれ〉は悪態をつきながらもなんどでも集合する。

初期サウンドデモは路上解放を一意に追求したが、そのなかで〈われわれ〉は全的な社会変革を夢見たというより、解放への熱をはき出すための、いわば前段集会を組織しようとしていたと思える。然れども集会未だならず。ありえたのは集会ではなく行為め集合である。野合といってもよい。〈われわれ〉は多くをなしたつもりでいたが、「世直し」という意味ではなにもしていないに等しい。ただ各人が主体の訓練をそれぞれ繰り返したという事実だけがある。

(……)

だからこそつぎのことを問わなくてはならない。定着をみたかのごとき現在のサウンドデモは、反復する抑圧とその抵抗のなかでいったいなにを夢見るのだろうか、と。

I-4. 2011年4月10日-「原発やめろデモ!!!!」

東日本の人々が極度の緊張状態を強いられていた時期に、高円寺で「原発やめろデモ!!!!」のシュプレヒコールが沸きあがった。それはまさに爆発的な動きの始まりであり、時を経ずして一挙に列島各地に広がっていった。

〈資料・1-4-A〉*18

池上:参加した方も多いとは思いますが、「素人の乱」が呼びかけた最初の2011年4月10日の最初のデモのころのことを思い返してみましよう。3月11日に地震や津波があつて12日に原発が爆発した。それから約一カ月間は、みんな何があつたかよくわからない。不安で重苦しく、何を言っているかわからない、何を考えていいかわからない、そういう状況だったと思うんです。じゃあどうしたらいいんだろう、っていう時に、4月10日に「素人の乱」のデモが高円寺であつて、それから一気にみんなしゃべりだした。何か行動しだした。だから、ぼくもデモは初めてではないですが、デモンストレーションというのはこんなに勇気を与えるんだ、こんなに力があるんだ、ということを実感したような気がするんです。これはデモに参加した人もそうだけど、参加しなかった人もそうだと思うんですよ。何かが始まっている、何かをやっていいんだ、何かをしゃべって

いんだ、と感じられた。それだけすごいデモだったと思うんです。

〈資料・1-4-B〉* 19

平井◎ (……)あれは、デモっていうよりロックフェスだった。私なんかデモ隊をあちこち渡り歩いてばかりいたよ。

二木◎ たしかにフェスをはしごするみたいな感じ。

(……)

平井◎ ただ渋谷はデモ隊がひどく分断された分、どっかでばったり出会っちゃ面白さがある。

二木◎ あと、交差点でデモがクロスするポイントを作ったんです。結果的に街全体でデモをやってる感じになった。

平井◎ いかにも警察を出し抜くか。隊列ごとの雰囲気も違って、まさに階層化してましたよ。上野俊哉いうところのトライブとは違う、パンクスとチンドンなんて別の階級の空間があるって感じで面白い。

二木◎ 僕はそこがもっとミックスされたら面白いと思うんです。ちんどんやドラム隊について行く参加者と DJ やラッパーのライブについて行く参加者がデモの中でもっと混じって欲しい。8 トントラック借りて、DJ ブースもバンド・セットも全部を設置できたらいいんだけど。それによってデモ隊のうねりやそこで誰と出会うかも大きく変わるんじゃないかなと。

大熊◎ 広場性だよ。一つのキーワードとしての。

〈資料・1-4-C〉* 20

サウンド・デモには、「ただのお祭り騒ぎ」という批判がついてまわったが、高円寺に一万五千人が集結した四月一〇日の「原発やめろデモ!!!!」で、そんな批判など軽々と吹き飛ばすような音楽の力をまざまざと見せつけられることとなった。サウンド・システムを積んだトラックが青梅街道に進入し、百人を超えるデモ参加者が交差点を占拠した時のことだ。群衆にぐるりと取り囲まれたトラックの荷台には、日本のテクノ黎明期から活躍する DJ マユリが立っていた。その場面で勇敢な彼女は、メロディアスでソウルフルなテクノをプレイした。迫力のあるテクノがスピーカーからけたたましく鳴り響いた瞬間、それまで所在なげにトラックの周りをうろろうしていたデモ参加者が飛び上がるように踊り出したのだ。そして、どこからともなく「原発やめろ！」のシュプレヒコールが沸き上がり、街に響き渡るほどの異議申し立ての大きな声となっていた。それは音楽がデモ参加者に声を上げる勇気を与えた感動的な瞬間だった。

〈資料・1-4-D〉*21

(……)大きなデモは、松本哉が率いる高円寺のリサイクル・ショップ「素人の乱」の呼びかけで4月10日に行なわれた「高円寺・原発やめろデモ！」だった。これにもぼくは行き、大熊ワタルが率いるジンタラムータに、河村博司、ジゲンらが加わった楽団が、「(¡El pueblo unido, jamás será vencido!) (団結した人民は決して敗れない)」という原題の曲「不屈の民」や、73年にチリで起こった軍事クーデターのもとで殺されたビクトル・ハラ曲「平和に生きる権利」を演奏するところや、サウンド・カーのPAを使って、日本のレゲエの礎を築いたランキン・タクシーが、チェルノブイリで原発事故が起こった年の翌87年に作った反原発ソング「誰にも見えない、匂いもない」を歌っているところを見たりしながら歩いた。このデモは、主催者発表で1万5000人が集まる空前の規模になった。

このときも、会えなかった知人がたくさんデモに参加していたことをツイッターで知った。そのなかのひとり、フォトグラファーの久保憲司は「ノッティング・ヒル・カーニヴァル」を思い出したと呟いていた。ぼくも84年にロンドンに行ったときにノッティング・ヒル・カーニヴァルで見た「LONDON AGAINST RACISM」の垂れ幕を横に着けたサウンド・カーが、その垂れ幕の文字を「NO NUKES」に換えてそのまま高円寺に出現したと思っていたところだった。

I-5. 2011年6月11日—新宿アルタ前に ぼくらの広場をつくらう

〈資料・1-5-A〉*22

松本哉 この日は、デモはデモでやったんです。

デモにもたくさんの方が来て、届け上は、デモはアルタ前広場で解散、ということだったんですね。でも、実はメインはそこからだったんですよ。

(……)

(政党の街宣車を借りて)アルタ前広場の周りに3台配置しました。演説をやっているのを大量の人が聴いている。それが事実上の集会になる、というやり方でやったんです。

(……)4時間くらいやりましたっけ。(……)これはすごかったです。

〈資料・1-5-B〉*23

東日本大震災が起こってからちょうど3か月の6月11日、雨上がりの土曜日に「新宿・原発やめろデモ！」が行われ、ぼくも参加した。主催は、素人の乱である。

新宿中央公園を出発して、新宿駅西口を通過するとき、サウンド・カーではスチャダラパーのシンコがDJを担当していて、パブリック・エネミーの「ファイト・ザ・パワー」(89年)をプレイしていた。63年のワシントン大行進の実写映像に始まり、メンバーがデモ隊に混じってラップするというこの曲のMVが、ぼくの頭のなかでオーバーラップした。シンコの横にはラッパーのECDがいて、ファンク・サインを出していた。サウンド・カーの近くには、「ダメ絶対」と書いたプラカードを持ったランキン・タクシーが歩いていた。デモ隊が青梅街道を右折して大ガードをくぐり、靖国通りに入ったところでECDがマイクを握った。

(……)

デモ隊はこのあとグルッとひとまわりして、新宿アルタ前広場に集結することになっていた。先回りしてアルタ前広場の方に行くと、先に出発していたドラム隊や、ジンタラムータらが到着して、どんどん人が増えてくるのが見えた。

(……)

この日のデモには2万人が参加したとマスメディアは伝えた。素人の乱はホームページに、新宿アルタ前広場の参考イメージ集として、エジプトのカイロのタハリール広場に大勢の人が集まっている写真や、5月にスペインで実施された地方選挙の頃、バルセロナのカタルーニャ広場に大勢の人が集まっていた写真などを掲げていた。それには及ばないものの、このときのアルタ前広場には2万人が集まったのだ。

I-6. 2011年10月9日ー「怒りのドラムデモ」

スペインーエジプト タハリール広場ーウォール街ズコッテイパークー日本官邸前

いま、世界を覆っているのは、リズムだ

〈資料・1-6-A〉*24

10月9日には、渋谷で「怒りのドラムデモ」が開催された。主催は「怒りのドラムデモ」実行委員会。メンバーのひとり、現代美術家で文化人類学者のイルコモンズは、このように呼びかけた。

「これまで様々な場所で原発に対する抗議のデモが行われてきました。デモのなかで、鳴りもの〈太鼓〉をはじめ、楽器を持つ人が多くいる事がわかってきました。シュプレヒコールの代わりにドラムを叩き付けるがごとく、渋谷の街を抗議の音で満たしましょう！

I-7. 2012年6月29日一夜7時すぎ、大飯原発再稼働に抗議する人の群れは、ついに20万人をこえ、国会議事堂正面に向かう6車線の車道は、人の波であふれかえった

〈資料・1-7-A、B〉*25、*26

大飯で生まれたリズムが全国へ

3・11 直後の高円寺デモで T.D.C. は、「楽器隊」のブロックに加わりました。みな無我夢中でドラムを叩き、そのドラムの音が、その当時あった「不謹慎」という言葉の重圧から人を解放し、ドラムのリズムに合わせて自然と声があがってく



るのを目にした時、ドラムの重要性を再確認しました。以後、T.D.C.は、「ドカドカうるさいマーチングバンド」という変名でデモに参加し、人数も50人前後に増えました。

秋からは「怒りのドラムデモ」というデモを自分たちでオーガナイズし、事故から一年目の「東京大行進」では「追悼と怒りのドラム」というブロックを担当しました。

このデモの後に始まった官邸前抗議には、はじめはドラムを持たずに参加してました。官邸に向かって一人一人のナマの声をぶつける、この抗議の場には、人の声よりも大きなドラムの音はふさわしくないと思ったからです。

その後、大飯原発の再稼働を前に、四万人が官邸前に集まった日、この規模になると、コールをもちあげるドラムが必要だと判断し、二〇万人が集まった日は、官邸前の歩道の後方でコールにあわせてドラムを叩きました。

その翌日、大飯原発のゲート前で、徹夜でドラムを叩き続ける人たちの映像を見て、ドラムの音が抗議を持続させることを再認識し、翌週の官邸前抗議では、T.D.C.の仲間達と、どしゃぶりの雨の中、ドラムを叩きました。「再稼働反対！」のコールに呼応して叩く「ダン・ダン・ダン・ダ・ダン！」というリズムが生まれたのはこの時で、やがて各地のデモにも広まっていきました。

そして、その夏の「国会大包围」で車道が解放された時、T.D.C.は国会前の大通りの中央に大きなドラムサークルをつくり、国会前に向かおうとする人の流れを変え、「再

稼働反対！ ダン・ダン・ダン。ダ・ダン！」の巨大なコールを国会前に響かせる役目を果たしました。

I-8. . . .「どんなにアホっぽく、つたなく、荒削りだったとしても、自分のスタイルで生々しい現実をラップして、ビートをたたきだし、バカになって踊り、反抗しろ」（二木信） . . . * 27

〈資料・1-8-A〉* 28

「原発0！ 再稼働反対！ 二〇一二年をエネルギー政策転換の年に!!」と銘打たれ、数百人が参加したその日のデモは代々木公園から出発した。サウンド・カーが渋谷駅を通過し、明治通りを左折したところで、ラッパーの ECD と悪霊、そして ATS の三人の MC がトラックの荷台に乗り込み、マイクを掴んだ。

彼ら三人は代わる代わるフロントを担当して、既存の曲や歌ではなく、DJ が PC から叩き出すディスコやソウルやレゲエのファンキーなマッシュアップのリズムに合わせて、「再稼働反対！」「原発反対！」「子供を守れ！」というスローガンを掛け合いながらくり返した。時に遅く、時に素早く、即興でタイミングやピッチを変化させて、デモ参加者とのコール&レスポンスの渦を巻き起こしていった。それは本当に見事なコンビネーションだった。彼らの、悲壮感を感じさせない開放的なライブは、DJ とラッパーが抗議行動におけるシュプレヒコールのスタイル、抗議の表現を更新したという意味において、私が今まで経験したサウンド・デモの中でも非常に特別なもので、政治運動と音楽の関係が成熟してきていることを強く印象づけた。

その成熟はこの一年ちょっとした反原発運動の蓄積によるところは大きいだろう。さらに、いちばんの劇的な変化は、街の中で声を発して、意思表示をする自由をひとりひとりがたしかに獲得してきているということだ。そして今後、最も大きな力となるのはその自由に他ならない。

〈資料・1-8-B〉* 29

9月11日は平日の昼間だったが、ジンタらムータ with リクルマイが経済産業省前の脱原発テントのところで演奏することをツイッターで知り、急遽駆けつけた。3・11から半年後の11年9月11日に脱原発テントができて、その1周年記念としてイベントが行われたのだが、この日は奇しくもチリで73年に軍事クーデターが起こった日でもあった。

ジンタらムータ with リクルマイのこの日の演奏は衝撃的に素晴らしかった。

大熊ワタルが、チリで軍事クーデターが起こる数か月前に書かれたヌエバ・カンシオンの名曲「不屈の民」のメロディをクラリネットで奏で、ジンタラムータの演奏が始まった。そこにリクルマイが MC を被せてくる。

「私たち、今日ここに集まったひとりひとりが不屈の民です。絶対に諦めない。再稼働反対。原発いらぬ」

(……)

続けて「平和に生きる権利」が演奏される。ジンタラムータ with リクルマイは、中川敬による日本語詞の 2 節目と 3 節目を「平和に暮らし 生きる願いを 福島から果てしない大地から」と替えて歌った。

〈資料・1-8-C〉* 30

日本のヒップホップの逆襲

(……) これは音楽の話だ。われわれは、アンダーグラウンド・ミュージックに社会や既成の価値をガタガタと揺るがすような騒音のサウンドを求めてきたのではないか。音楽はその奔放な想像力によって、秩序を乱し、道徳と常識に唾を吐きかけ、カオスとノイズを導入することで、今ある社会を攪乱することができる。そして私たちは自分の知らないフレッシュなスタイルや価値に気づき、より豊かな世界があることを知り、理想を抱くのだ。それは理屈ぬきに痛快な体験で、私たちを興奮させる。

(……)

日本のヒップホップの逆襲が始まろうとしている。

I-9. 2013年12月5日-「ECDのコール、美しいと思ったよ」

〈資料・1-9-A〉* 31

12月5日午後、特定秘密保護法案が参議院国家安全保障特別委員会で強行採決された。このニュースを聞いて、ぼくも国会周辺へ行こうと決めた。

(……)

国会正門前では、いつものドラム隊が太鼓を打ち鳴らし、何人かのコーラーが持ち回りでマイクを握っていた。

「秘密保護法、絶対廃案！」

「絶対廃案！」

というコールがずっと続いていた。

(……)

ECD がコールする姿を見ていたとき、石破茂はこれを「テロ行為とその本質においてあまり変わらない」「単なる絶叫戦術」と規定したことを思い出して驚いた。呆れるとか、怒りを感じるとかいうレベルではなく、えっ、これが？という驚きである。

コールする ECD の隣で、「戦前かよっ？」というプラカードを掲げている人がいた。この時ぼくはそれが誰かを知らなかったのだが、その人も入れて撮った写真をツイッターに上げた。すると、友人でドラム隊の一員でもあるオチュンが「@nuho世界中のレベルミュージックを撮影してきた石田さんの写真にヌホさんが。rt@masataka_Ishida :石破が〈民主主義の手法と異なる〉と批判する〈絶叫〉ってこれのことか。ECD のコール、美しいと思ったよ。」と呟いて、本人に伝えてくれた。

〈註〉

1. 野田努＋三田格＋水越真紀「ダンス・トゥ・デモンストレーション」 （「現代思想」2003・6）
2. noiz 「サウンドデモ史考」（「アナキズム」12号2009）
3. 同上
4. 「東京サウンドデモ会議」（「音の力〈ストリート〉占拠編」インパクト出版会2005）
5. 松沢呉一「歌と言葉と行動と」（WEARABLE IDEAS RLL「騒ぐ者は騒げ、俺は青空。」）
6. 2に同じ
7. 同上
8. 二木信「祭りの余波はまだまだ続く でも・・・ DEMO ……サウンドデモ」（前掲「音の力」）
9. 二木信「奇妙な縁は、いつも路上でつながる」（「VOL」3号 以文社2008）
10. イルコモンズ「ぼくらの世界ではデモに出る理由があり犬は吠えるがデモは進む」（「情況」2003・10）
11. 「踊らされるな、自分で踊れ 関西サウンドデモ座談会」（前掲「音の力」）
12. 松本はじめ・二木信編「素人の乱」（河出書房新社）から要約
13. 9に同じ
14. 12に同じ
15. イルコモンズのふた「高円寺一揆・外伝」
16. 12に同じ
17. 2に同じ
18. 松本はじめ・樋口拓朗・木下ちがや・池上善彦「高円寺素人の乱とウォール街を結ぶ」（2012・2・28）
19. 「闘走的音楽案内：新春放談－平井玄・二木信・大熊ワタル」（「インパクション」183

2012・1)

20. 二木信「音楽と反原発：2012年のサウンドデモ進化論」(「しくじるなよ、ルーディ」(Pヴァイン 2014))
21. 石田昌隆「ソウル・フラワー・ユニオン」(河出書房新社2014)
22. 18に同じ
23. 21に同じ
24. 同上
25. 「毎日新聞」2012・7・5
26. 小田マサノリ「ふつうのときのやり方じゃまにあわない」(小熊英二編「原発をとめる人々」(文芸春秋 2013))
27. 二木信「暗黒時代のファンキー宣言」(前掲「しくじるなよ、ルーディ」)
28. 20に同じ
29. 21に同じ
30. 二木信「日本のアンダーグラウンド・ヒップホップはアウトサイダーのオアシスである！」(前掲「しくじるなよ、ルーディ」)
31. 21に同じ



<http://www.hmv.co.jp/news/article/1204130065/>

Ⅱ. 三宅洋平——その軌跡

一つは、Shing02氏、西田亮介氏との対談、もう一つは、「三宅日記」ブログ（2005年9月以後約1300回投稿）。これらをもとに、『選挙フェス』にいたるまでの三宅洋平の軌跡に関わる部分を構成した。

また、ブログの内容を、思想／思想形成にかかわること、音楽活動／音楽活動の告知、社会問題／活動への意識、原発問題／運動への意識、沖縄問題／沖縄での活動、そして政治にかかわる考え／行動に分類して構成した。

はじめに 外国育ち—日本への違和から 「政治表現を含む音楽活動」へ そして 「政治(マツリゴト)」へ

Shing02氏と西田亮介氏、両氏との対談から、「ベルギーで生まれ、7歳で日本に帰ってきた」ことが、音楽活動・政治活動に、どのように影響を与えたかについて語られた部分を<引用>した。

外国での経験が、日本を相対化し、対抗的(?)な意識・政治的な意識を形成するうえで、大きな意味をもっているようだ。

2012年 4月	<p>23日 Shing 02 氏との対談</p> <p>僕も生まれがベルギーで、七歳で日本に帰ってきたんだけど、結局ヨーロッパってさ、自分のルーツ(先祖)、宗教を含めて、自分が何者であるかを自分の言葉で紹介出来なきゃアイデンティティが成り立たないわけよ。バックパッカーをやる日本人って、日本では要求されなかった「自分の事を自分の言葉で話す」事を、初めて要求されるわけ。日本にいとその必要性にかられてなくて、むしろ「同化する技術」をみんな学ぶんだよ。だから「話し合いをし尽くしての“和”」を作るのは苦手なの。はじめから同じ者同士ではずれない事は得意なんだけどさ。</p> <p>それは決して日本人の悪いところではないんだけど、今の時代状況において、その民族性は研究された上で使われてる。“Still Occupied JAPAN”だっていう事実を認識しないと。じゃないと脱出できないから。</p> <p>「“日本人の事”そして“これからの事”に」(HMV オンライン) http://www.hmv.co.jp/news/article/1204130065/</p>
-------------	--

2014	14日 西田亮介氏との対談
年	政治的な表現を含む音楽には、10代のころから接していました。
2月	その理由のまず一つは、僕は親の仕事の関係でベルギーで生まれて、7歳で日本に帰って来たのですが、そのときのカルチャーショックがとても大きかったのです。 たとえば、当時小学校では、入学すると全員が同じ鉛筆を買わされて使っていたのですが、僕だけが外国から転校してきて、ボールペンを使っていました。すると、先生に「三宅くん、ボールペンは禁止です」と言われた。僕、その時「禁止」という概念が理解できなかったのです。というのも、ベルギーの学校は生徒の貧富の差が激しいので、小学1年生になると「家にある何か書けるペンを持ってきてください」という指導があるだけ。鉛筆を全員そろえるなんて理解できませんでした。まさに「経済大国・日本」的なやり方で……そういった、一つひとつのことに引っかかって、校則に反発したり、校長に直訴したりすることを通じて、社会との接触、折衝、軋轢が子どもころからたくさんありました。今思うと、あれは『政治』だったんです。 「政治の理念を再定義しよう ネット世代の選挙のゆくえ」（「ジレンマ+」） http://dilemmaplus.nhk-book.co.jp/talk/6080

政治表現を含む「音楽活動」から「選挙フェス」へ！！

三宅の音楽活動は、日本はもちろん、外国での活動も多く、これらの地域での経験が、さらに自身／日本のあり方を相対化していく契機となったに違いない。

三宅が、自分が訪れた地域での経験を「社会的なこと／政治的なこと」として持ち帰ることを、音楽を含めた表現活動の「作風」にしていたことも見えてきた。

「3・11/12」は、三宅に、沖縄への移住を決断させた。それ以後、三宅は、生業としている音楽活動から「社会運動」、「政治活動」へとフィールドを広げ、徐々に重心を移していく。

特に農を含む環境問題に関心を持ち、参議院選挙で「緑の党」から立候補したことが、直接「選挙フェス」と名付けたユニークな選挙運動のあり方を実現させたように見える。

●思想／思想形成にかかわる投稿

2006	17日 MORE HIROSHIMA
年	14日広島 china town、15日福山 JB'S
4月	盟友 Cro-magnon との広島2 DAYS ミニツアー。たくさんの「広島」に出逢えました。

	<p>昨年出場した瀬戸田海岸でのフェスタ・デ・ラマ以来、そして市街地でのライブとしては初めて訪れる広島県でありました。</p> <p>両親が岡山県の出身である僕は、広島にも同様の「懐かしさ」を感じます。</p> <p>「瀬戸内」の空気は、何か懐かしいのです。それはきっと幼少時代より、こちら辺一体に良い思い出しかないからです。当たり前です、親戚や祖父母のところへ里帰りに行く時しか来てないわけだから。生まれてから7歳までベルギーに居た僕にとっての「日本」とは「岡山」だったわけですね。</p>
2006年5月	<p>7日 大阪から帰宅・夕寝・晩飯・言葉のスケッチ</p> <p>政治や経済の力学に押し流される時代において、自分の知らないところで人生を決められていくことに憤懣(ふんまん)やるかたなき「自我ピーポー」たちが、生きることへの誠意と愛と賢さと熱さと馬鹿やれる正直さと熱さと賢さと愛と誠意と「行動力」を持って、然るべきところでは連帯して、然るべきところでは個人でケツふいて、そうやって「当たり前」のことを自然に実現していきたいものです。</p>
2006年6月	<p>9日 アグリカルチャー————</p> <p>やっぱ農業だね。</p> <p>(田植え前の代掻きとならしをやったわけです。左から仲野茂(アナーキー)・後ろがシャケ君(ex レッドウオリアーズ)・モチ(法螺貝吹きのフリーマン)。そして手前満面の笑みが、犬式百姓っす。百姓を放送禁止用語にしてるってのはアホだね。分かってない街のやつらの仕業だべ。俺は二度スタジオグロウンの生放送中に「基地 guy」と「ルン・ペン」を言ってPワードにされたけれど、そろそろこの自主規制を見直したほうがいいと思う。何故誰も変えないのかなあ?)</p>
2006年12月	<p>17日 福岡にて 3</p> <p>日本のことなど何も見ていない安倍総理大臣がいう「愛国心」などわざわざ植えつけられなくても、街やストリート、村や大地を愛して日々人生を其処で営んでいる人々にはそれ以上の気持ちは存在していて、むしろ政治家の中でも少しは志のあるやつバラはこっちに呑みに来て学んだほうがいい。地下街に下りてこない政治家は、人生の悲哀も庶民の暮らしも分かりはしない。</p> <p>此処には、人生の独学・独行の徒が多く、故に己の開祖みたいな人間が多い。私はそういう人間を「パイオニア」とか「クラシックス」と呼ぶ。恐れずに此の世から逸る、独学の徒である。「俺」という人生を「俺」以上に教えられる者など居るはずもないのである。</p>
2007年1月	<p>26日 ライフスタイルのはなし</p> <p>働く、かどうかなどはモハヤあまり重要なことではなく</p> <p>本当に造っているかどうか</p> <p>誰かの心に本当に響くことをしているかどうか</p> <p>自分が満足できているかどうか</p> <p>などといったことを大事に考えていったらいいと思う。</p>
2007年	<p>10日 国民投票</p> <p>国民を蚊帳の外において政治への関心をなくさせて「業界内」で都合よく決めていくという、永</p>

4 月	年の日本政治の在り方は、今こそ変えるべきです。国民の手出しできないところに、政治があつては投票率など上がるわけないのです。
2007年 7 月	20 日 露西亜紀行②露西亜の車窓から ヤクザ・リセッション 泥棒国家(クレプトクラシー) 八百長国家 日本が「法治国家」であるというも建前だけであるとし、なぜなら、日本の法律は 100 年も前に欧米を模倣して作った形骸化した法律が多く、これらの法に基づいて国家の運営を行うのは不可能であり、政治家の口利きや官僚の裁量に基づいて国家が運営されている「人治国家」となっている為に、至る所で法が恣意的に運用されている「八百長国家」に成り下がっている。売春やギャンブルなどが黙認されているのもこれが原因である。
2007年 9 月	17 日 時局 自民党の時代は終わったから、麻生だろうが福田だろうが、首相にはならないのだと願うが、政治家一家で育った三世に、いったい庶民の何が分かるというのか。「漫画読んでます」くらいで「麻生さんはコッチだねww」なんて騙されてちゃいけないよ、オタクさんたち。麻生はカップラーメンにおにぎりで食いつないだ惨めな経験なんか一回もしちゃいけないはずだよ。騙されちゃいけない。
2008年 3 月	15 日 言葉 普段考えていることを言葉にすると哲学になる。いつも感じていることをつとめて言葉にするのは自分によく語りかけている人であり人によく語りかけている人だろう。学歴も教養も関係なく哲学している人はあらゆる階層に居て、自信に満ちながら思ったり悩んだりして居る。
2008年 9 月	19 日 人格 ぼくが 詩的表現を 司るのは 即時的に伝わらない ことのほうが 長い目でみたら 本当のことに近いことを言えるからだ 人間の意識や 脳内は そんなに理路整然としていないんだから オチをつけたり ボケたり 突っ込んだり ばかりを考える必要はない それは 会話のリズムを生み出すための 手段でしかなく テレビなんかでは そのリズムしか存在しない会話が 延々と続いている 無理矢理ずっと 楽しい話だけしてても 後で空虚が訪れるだろ
2009年 2 月	10 日 こういう意見もある 世界の富の98%を人口の1%が占めているのだったら、彼ら次第でほとんどの貧困の問題や、乱開発から生まれる環境の破壊は解決されるとおもってしまうのだが。なにせ色んな情報がまことしやかである。人の数だけ真実は存在するのだろうか。 いま、地球の社会で起きている不可解なことを知り、解決していきたい。仮にあと4年で、或いは40年で、人類が滅亡するのだとしてもとにかく今をどうにかしたい。とだけは確かに思う。 学校や学問は何も教えてくれない。真実を掘り当てた興奮が、次の真実をおしえてくれるのだ。
2009年 7 月	19 日 正しい知識そしてディベートという文化 反対派も、人々の恐怖をヒステリックに煽るばかりでは安保闘争の如く、運動そのものの自己満足に陥ってしまう危険性があり大切なことは「全ての人にとっての共通の目的」を見失わないこ

	<p>とだと思います。推進派の人々にも、家族があり、生活があり、今日まで築いて来た価値観と信念があることも忘れてはなりません。僕が健太に言ったのは、「反対派」になるな、ということです。</p> <p>彼が推進すべきなのは、「皆で考える」ということだと思います。</p> <p>「賛成」VS「反対」の闘いの構図に持ち込むこと、それこそが両者の裏にあるルシファーの思う壺なのです。</p>
2010年 1月	<p>7日 明けたね</p> <p>大人にだけはなりたくなかった。でも子供のままだもいたくなかった。子供な大人になれるよに、今年は努めます。大人よりもっと素敵な何かはその先にあるに違いない。具体的にいうとそれは、元気な老人ってことなのかもしれない！</p>
2010年 4月	<p>29日 永久の話し合い</p> <p>かつてアイヌの部族は異なるムラの間で争いが起きると、部族長たちが解決するまで何年でも話し合いを続ける掟があったという。双方の言い分も、延々聴いていると、お互いに理解し共感できてしまうのが人間だ。</p>
2010年 11月	<p>25日 ARTISTIC FRONT LINE ASIA</p> <p>僕らの世代で、インディペンデントな音楽家たちで前進していきましょう。僕らには、慢性的な活動資金、制作費の不足という以外の縛りはありませんから。そのぶん、大きな株主や経済体の言いなりにならずに済むわけですから。自由に動ける、自由に発言できる、そして自由に表現できるという、最大の武器を手にはしています。</p>
2010年 12月	<p>23日 新ブログ開設の挨拶</p> <p>今年に入って twitter を始めてから、欲しかった情報へのアクセス確度がとても高まり、長年モヤモヤしていた事の原因＝世界の構造がよく見えて来た。発信する言葉にも、大きく確信を持てるようになってきた。それらに突き動かされた自分に動く猶予があったことで、今年は本当に収穫の多い一年だった。</p> <p>一人の市民がどれだけ動くか。それを密やかな愉しみにできるくらいの、逞しさをもって現実に向かって生きたい。人間のライフスタイルを、何年も何世代もかけて自然や宇宙と調和のとれたものにしていく努力を続けたい。自分による実践しかないのだが、今年も見事に51得点49失点だったなー。勝ち点3には、変わらない！</p>

●音楽活動／音楽活動についての告知にかかわる投稿

2005年 11月	<p>19日看板</p> <p>12月18日 日曜日</p> <p>西徹頭徹尾(nishi-tetto-tetsbi)</p> <p>大阪・梅田 SHANGRILA</p> <p>OPEN・START 16:00(23:00END)</p>
--------------	--

	<p>ADV. 2800/1D DOOR 3300/1D</p> <p>先着50名にイベント特製ミックスCDR進呈。</p> <p>LIVE SOUL FIRE 1★狂</p> <p>cutman-booche 犬式</p> <p>DJ 光(BLASTHEAD) icchie(ex.DETERMINATIONS/BUSH OF GHOSTS)</p> <p>BUNBUN(1★狂) YACCHAN</p> <p>説明</p> <p>『徹頭徹尾』:犬式が2002年より西東京は武蔵野の首都・st.吉祥寺の地下で始めた1季1回開催のディスコ。春が『春徹頭徹尾』夏が『夏徹頭徹尾』秋が『秋徹頭徹尾』そして大晦日の一日前に行われる『大徹頭徹尾』が在る。「頭カラ結マデ終始一貫シテハマリコメル才溢れる楽団ト盤廻シニヨル音ノ空間ニ於イテ、文字通り徹頭徹尾感じ入ッテ挙句ニ訪レル感性ノ解放ヲ約束スル」という主旨のもと、吉祥寺ローワーイーストサイド市公式指定無形重要文化財として民の心の励みとなっている。近年、8里ほど神奈川方面に南下した東京のブルックス・町田の衆による「地中音波」との友好がすすみ、2006年には「徹中徹波」が開催予定。併せて13年を越える歴史の新しい1ページを開いた。音のみならず、グラフィック、飲み屋、飯屋、のんだくれ、その他アートが形成する熱い裏路地文化を、各地少しづつ姉妹都市提携していくことも標榜する。</p>
<p>2005年 12月</p>	<p>21日 御礼。西徹頭徹尾。</p> <p>商魂ではなく、人間らしさが表現のバイタリティであるような音楽。</p> <p>300年ほど前の産業社会の誕生以来連綿と続く悪徳、つまり現代社会に巢食う「契約と金」で人間性を牛耳る「富と権力」に屈しない、いや屈し得ない「民衆」の音楽。レベルミュージック。</p> <p>自由とは踊りのリズムであり、踊りとは自由である。</p> <p>拍とは全てが「1」であり、偶数の拍子ばかりが気持ちいいとは限らない。心とは表わすものであり、勘ぐりあうものではない。表現とは心であり、それは元来「濃い」ものである。</p> <p>心を勘ぐりあう社会には、心を表わしあう社会から学ぶことがたくさん在ると思うので、表現を生業としている以上、僕には僕の相も変わらず譲りたくないスタンスがあって、やはりそうした事にも改めて気付かされた秋でした。</p> <p>日本社会はカンگری(勘繰り)精神が旺盛すぎて、かといってよりオープンな社会に「おもしろい」や「気遣い」がないわけでもなく、僕の知る限り此の島では誰しもが一抹の寂しさと不安を抱えて生きているように思います。</p> <p>自分を表わす事への橋渡しをしてくれる音楽という存在に感謝しつつ、クチャクチャになった脳みそを忘れて踊り明かして、簡単な答えをひとつふたつ見つけて、なんかしか笑って帰れるようなライブをしたいと思います。</p>
<p>2006年 3月</p>	<p>1日 東京土一揆月間突入</p> <p>「東京土一揆」とは何でしょうか？</p> <p>それは町田や吉祥寺のストリートから生まれた裸の文化を、この混沌とした東京の路上に叩きつけるイベントです。両シティで開催されてきたムラ祭り「徹頭徹尾」(吉祥寺:2002年頃発生)と</p>

	<p>「地中音波」(町田:1995年?頃発生)の合体というコンセプトから、このイベントは生まれました。</p> <p>音楽業界におけるエスタブリッシュメント(既得権益層)たちが、メディアを囲い込んで垂れ流している「パッチもん」と、それにいとも簡単に洗脳されていく余りに無垢な若者たち。連発される「これぞストリートの云々！」。</p> <p>ストリート「いやー、見てねーなー、そんな奴ら。」</p> <p>20日(月)東京・渋谷 club asia 10th anniversary 東京土一揆 東京土一揆。</p> <p>吉祥寺の村祭り徹頭徹尾と、町田の村祭り地中音波のドッキング。</p> <p>それを村人だけのものではなく開かれたものとするべく渋谷で開催した。</p> <p>時代を待つてられない奴らの先走ったアクション。</p> <p>満員の会場の雰囲気は異様なまでに多角、高かった。</p> <p>吉祥寺の夜を彩ってきたそれでもなく、町田のそれとも違う。</p> <p>人間は常に 1+1 を 2 以上にできる存在だ。</p>
2006年 10月	<p>31日 犬式という名の由来</p> <p>僕の中に犬の血が流れているということもあるのですが、つまりそれが意味するところは、古代日本人にとっての犬の存在の重要性とか犬が象徴する自然の叡智や誠実さ、はたまたそうした縄文以来の感性に対する回帰志向といったものがあらわされています。むろん、セクシュアルな意味が多分にこめられていることも、Dogggystyle を名乗りだした当初から変わっていません。</p>

●社会問題／活動にかかわる投稿

2005年 11月	<p>11日 アフガン難民アリジャン勝訴</p> <p>アフガニスタンからの難民「アリー」ことアリジャンの、難民不認定取り消し訴訟の判決発表が本日東京地裁で行われました。児玉弁護士、アリジャン支援者グループ、島田紳助氏らをはじめとする各界の応援者たちの精一杯の支援行動が結実し、彼の難民不認定取り消しの訴えが「勝訴」という最高の結果を迎えることができました。</p>
2006年 2月	<p>9日 指紋をとられる気分</p> <p>日弁連は「指紋採取は個人の尊重を定めた憲法や、品位を傷つける取り扱いを禁止した自由権規約に反する」と主張。「プライバシー権などを侵害する上、外国人と共生する社会の形成を阻害する」として犯罪捜査への利用にも反対している。</p> <p>日弁連の主張の最後の一節が、ベルギー生まれの縄文面には響くのです。国が決めたこと、っていつでもそれは民意の其処に対する意識の低さを反映しているのに過ぎないことを知って</p>

	<p>おかなければなりません。</p> <p>「テロの防止」一見もっともらしい理由であるが、国民のテロに対する恐怖心をいたずらに煽っているように思えてならないのです。911テロが、米国政府の思惑だったという可能性が当たり前に取りざたされている昨今にも関わらず。政府くん。テロの標的になりかねない国策をとるのはやめにしてくれないか。</p>
2008年 3月	<p>24日 チベット問題</p> <p>世界はいま1対99くらいで99は此の世をもっと美しいものにしようと思っているが残りの1が実権を握っていて、とにかく支離滅裂でもいいから大衆を動かしたり操作するための術数に長けていて、いかに論旨がめちゃくちゃでも嘘に満ちて暴力的であってもいいから、99に対する「1」の反論を成り立たせてしまえば、そこに「議論」という名のメディア操作がうまれることを知っている。</p> <p>世論やネット世論は意見の絶対数がいかようにも演出できるから、1:99の議論はまるで1:1の「価値観の相違」と映って、当たり前の意見を抱えた人間たちを天道から逸らして行く、そういう迷いを与えるには充分なわけである。</p> <p>民主主義という名の支配システム。なんとなく文句のいえないところに人々を追い込んでから、「さあ、意見をきこうか」とくる。</p> <p>26日 教育問題</p> <p>さあこんな阿呆な国とはおさらばしよう。阿呆な政治家や官僚を一人一人在るべき者に替えて行くのは国民の仕事だ。俺たちがやらねど誰がやる。1億分の1人としての己の立ち位置から日本は変えられる。65億分の1人としての己の立ち位置から世界は変えられる。淡々と黙々と騒々しく生々しく、ただ自分で在り続けること。決して黙らないこと。決して無力感に敗北しないこと。少しでも真のクリエイションに携わる生活をしようとする努力を積み重ねること。</p> <p>大きな悪を見据えて「悪の大役もご苦労さん」。大きな善を見極めて「ウレシー」。そうした人々が子を生み子を育て、その子が孫を生み孫を育てる。</p> <p>3世代で、全ては変えられる。</p>
2010年 6月	<p>21日 デモンストレーション=アート</p> <p>10数名の警護の警察隊とピカピカ光る数台の警護車に囲まれて、こっちはたったの30人くらいで、日曜日の渋谷の全衆目を一身に浴びてるんだぜ。だったら、センスよくやろうよ。センス磨こうよ。デモ以前の問題だよ、これ。ユーモアこそが活力を具現化して、世の中を変えるんだぜ。</p> <p>24日 社会運動</p> <p>沖縄の問題について、世論が形成されていない日本では、マスコミの情報の真偽ばかりが取り沙汰されて、主体である国民は実際のところ自分の意見を持っていない人が多いと思う。</p> <p>俺たちがライブやイベントでやっていることって、既にもの凄いエネルギーを発した立派な社会運動だと思った。オーガニックなライフスタイルへの探求や、消費する電力の発生源への意識、食生活を通じた根本的医療の知識、子供を尊重した空間作り、など、これからの社会を心身</p>

	<p>のバランスのとれた暮らしやすいものにする試みが溢れている。お金よりも貴いものが、たくさん集って、そして交換されて交感している。</p>
2010年 11月	<p>10日 何かを持って帰るツアー記 その1(愛知・名古屋 前編)</p> <p>カヤック隊の「ランボー」を介して紹介してもらった繋がりから、10月に愛知で COP10 が開催されることを知った。原発の問題というのは、戦争ビジネス、金融至上主義経済、世界的な貧富の格差拡大、世界的搾取システム、等といった現行社会の問題点と大きく通じる問題であり、これは「価値観」の争い、「信条」を巡る意識の戦争とも呼べるだろう。</p> <p>11日 何かを持って帰るツアー記 その2(愛知・名古屋 後編)</p> <p>名古屋市内、栄のパルコ前に集ると、100人ほどの人々が集っていた。かつて忌野清志郎のスタイリングを務めていた「ルーちゃん」が、何十人もの人々の装いを飾っていた。「でもでもでも、デモじゃないよ〜♪」「パレードなの！」前の週に、パリでも同じことやってきて帰って来たばかりのルーちゃんの意気は高い。パリではこうしたアピールや表現は、街頭で好意的に迎えらる。</p> <p>16日 何かを持って帰るツアー記 その3(山口県・上関町)</p> <p>米先進国では、金融機関が原発事業にお金を出さなくなっている＝出来ない。事故の責任などを明確にする法制度が進んでいる。＝原発の抱えるリスクを社会が理解し始め、そのリスクに応じた社会システムが構築されてきた。(日本では、まだ社会が原発のリスクを実感していない)</p> <p>17日 何かを持って帰るツアー記 その4(山口県・上関町)</p> <p>上関・反原発デーの講義の部門が終わる頃には、午前中いっぱい支配していた嵐の気もおさまっていた。上記したように、あくまで「緩やかな安保闘争」的な市民運動の形態を成して、デモ行進が行われた。それでも何も成さない、今の若い世代からすれば驚異的な組織運営力と、資金力を可能たらしめる世代なのだが。やっぱり！このシュプレヒコールは、意を同じくしない人々には「恐怖」すら与える単調さだし、悪く想う人には悪くとられてしまうだろう。</p> <p>「愉しさ」や「格好よさ」、「愛」や「美意識」そして「粹」。祭り事たる「政り事」には其処を忘れて欲しくない。デモという集団でありながら、確固たる独立した個であることは失われてはいけない。優れたサッカーチームがそうであるように。</p>
2010年 12月	<p>13日 何かを持って帰るツアー記 その5・最終回(沖縄県・名護市 辺野古ビーチ)</p> <p>7月に初めて祝島を訪れてから、10月末の辺野古に至るまでの4ヶ月間、今年は勢い任せに、まるで何かの手を引かれているように彼方此方を旅した。原発のこと、基地のこと、政治のこと。納得のいかない事が多い上に、メディア上に十分な形で情報が整理されていない。誰かが過剰に論理的な嘘を流し、そして誰かは過剰に感情的な誤報を広めていた。</p>
2011年 2月	<p>19日 エジプト革命 ?</p> <p>8分ほどの映像です。これを観ると、今エジプトで起きていることについても「世界はまたしても</p>

ダメされている！？」と思えて来ます。オカネのクニの王様たちの、此処数十年の所業と、符合する点多すぎるのです。

27日 バリで2本目のライブ

バリでも、災害復興を有機農業で支える NGO と共にライブを一本組んでもらい、原発のこと、いま田の浦で起きていることなどもアピールする機会に恵まれました。そして滞在4日目の昨日、奇跡が起きました。バリでも有名な ULUW ATU のケチャダンスに、飛び入り参加してしまったのです。

同上 3・11以後

2011年 5月	<p>6日 デモカルチャー創世期</p> <p>4月9日に本州入りしてから、6月5日のタイコクラブまでは終わらない旅が続いています。</p> <p>60年代のヒッピー思想に大きな影響を与えた米国の偉大なる詩人アレン・ギンズバーグが、意思ある学生たち、若者たちに「書を捨てよ。街へ出よ。」と呼びかけたのは、まさに同じような心もちだったのではないだろうか。捨てる必要はないけれど、twitter をみながら、デモに参加しよう。そして自分が1次情報となって、眩きまくったらいいんじゃないでしょうか。</p> <p>18日 九州産無農薬食材をいわき市へ炊き出し</p> <p>4/20 に神戸を皮切りに 4/24-26 の広島の前夜に浜岡砂丘でライブ参加。その後 5/9 まで九州を8箇所、静岡・御前崎は、原発停止の前夜に浜岡砂丘でライブ、横浜で相変わらず最高の(仮)ALBATRUS、東北に入って、緊張の初炊き出し、兎に角、一夜の飯をココロを込めて提供させていただきました。</p>
2011年 6月	<p>11日 611同時多発デモ(明日の中継に関して)</p> <p>611世界同時多発100万人のデモ。日本各地が、北海道から沖縄まで、すんげー事になりそう。原発政策、果ては福島安全基準問題に至るまで、納得のいかない事がある ANTA ! 明日は全部の予定をぶん投げて、最寄りのデモに参加ませう。</p> <p>14日 いわき炊き出し photo ルポルタージュ</p> <p>いわきでの炊き出しの様子を、同行したフォトグラファー伊藤愛輔がルポルタージュしてくれました。</p> <p>28日 ローカリゼーションについてのレジュメ</p> <p>「エコロジカルな社会は、複数の小規模自治体によって構成される一個の自治体——さらに小規模の自治体のひとつひとつはく複数のコミュニンの集合体から成るコミュニン>によって構</p>

成されており、それぞれの自治体はエコ・システムと完全に調和している——によって構成されると考えることは、決して馬鹿げた発想ではない」文化というものは、永続可能な農業と倫理的な土地利用という基盤がないことには長くは続きえないものだからである。

パーマカルチャーには、植物、動物・建物および(水・エネルギー・コミュニケーションなどの)生産基盤などを扱う側面もある。しかし、パーマカルチャーは単にそれらの要素そのものだけに関わるものではない。

●原発問題／運動にかかわる投稿

2007年 3月	26日 能登半島地震 自然からのアクションによって哲学するには 自然からのアクションからワイプアウトしない知恵が必要だから とりわけ今回の地震は原発付近で起きており この島に原発を設けること自体を よく考えなければならないということだと思う。
2009年 3月	20日 後藤健太からの手紙 僕の住む島根県は国や電力会社に買収され原発が3台たとうとしています。日本は戦後急速に原発が立ち並び、白血病やガン患者が急速に増えていきました。これは空気中の放射能や食べ物から体内被爆したためだと言われています。 今後更に日本は原発が増える見込みで、そうなれば美味しい空気や食べ物を安全にとれなくなる可能性があります。 僕は原子力産業という巨大なバビロンに対し、心ある地球を大切にしたい人たちの声を大にしていき、更なる増設を最小限にいとめたく思っています。巨大なものに諦めずに声を出していかなきゃと思うのです。 僕の町のことで恐縮ですが明後日プルサーマルという末恐ろしい原子力の導入が決まってしまうそうです。どうか以下のフォーム松江市長宛にメッセージを送ってしますので、氏名のところ(と日付)を自分の名前に打ち変え、市長のメールボックスへ送信してもらえたらなと思っています。松江市民に限らず、是非沢山の人の協力を募りたいと思いますのでよろしくお願いします。
2010年 5月	31日 原発と活断層 大地震が来て原発が事故を起こしたら東海、中部、関東、甲信越、は言うまでもなく東北から近畿に至るまでがチェルノブイリと同じことになる。 原子力は危険だ。そして実は高コストで、全然エコじゃない。
2010年 9月	11日 昨夜のその後 祝島で起きていることは、「海の地上げ」に他ならない。ボクの目にはソー見える。 どうみても非人道的だし、自然環境への理解と尊厳を感じられない中国電力のやり方には賛

	<p>同できない。原発の安全性に関しても、日本人なら誰もが抱かざるを得ない恐怖と疑念を納得させるに十分な説明を果たしていないのだから、まずはそれが先決であって、世論の見えない所で、まして協定違反の深夜にコソコソと工事を進めるような事であってはならない。「原発立国政策」の見直しを求める、1音楽人です。</p>
2010年 10月	<p>18日 COP 10のこと、そして祝島のこと</p> <p>映画『祝の島』での島人が中電の作業員に向けた言葉が胸にささる。「あんたらのやる事は、違法じゃ無いけえー、余計タチが悪いんじゃわ」</p> <p>金、権力、職、人。手を代え品を代え、経済の論理は「暮らす側」の論理を巧妙に絡めとり、多数決工作を施して「民主的な結論」「住民の総意」を選挙の度に、ねつ造してきた。映画の中の作業員を通り越して、膨大なエネルギーの浪費をむさぼる僕ら都会の市民に言葉は突き刺さる。</p> <p>COP 10開催期間中の15日の朝から、原発建設許可の降りないまま、「埋め立て作業」は強行されている。</p>
2011年 1月	<p>27日 原子力立国政策</p> <p>原子力セミナー 2012年の表紙「原子力だよ就活は」をさして、こういうフザケたものを平気でつくり、ただでさえ就活などという、特定の人達が、意図的に作り出した不足状態の中で、明らかに異常な集団パノイアに駆立てられてしまった学生たちにエサのように突きつける。しかも彼らの殆どが、原発の実態などまるで知らされていないのだ。</p> <p>29日 山口県庁前ハンガーストライキ</p> <p>山口県上関町で30年近く、原発の建設に反対し続けている祝島のことは、昨年7月に島を訪れて以来、再三再四書いてきたように思う。此处で起きていることは、日本という国の在り方を問う問題である。</p> <p>ある大規模開発に対して、数百人の住民が「嫌だ」と云っても、必ずそれをひねりつぶして来たのが、日本という国である。その最たる例が原発であり、国と電力界社とメディアは、権力と金の限りを尽くして「国民の理解」という名の「洗脳」を施す。選挙すら操作する。建設阻止活動にまつわるニュースは徹底的に排除され、それはほとんどの国民が何も知らないうちに、実行される。</p> <p>僕らが安穏と都会の暮らしを享受しているアイダにも、中国電力の工事台船は、埋め立て作業の強制施行を狙ってはやってきてジリジリと境界線を押し広げて行く。この28年間そうしてきたやり方をひたすら推し進める。田の浦を守るバリケードも撤去されてしまったようだ。</p> <p>30日 昨日今日でおもうこと</p> <p>よく観れば、5人のうちの一人は千葉のカンタじゃないか。これで山口県庁前でハンストやってる5人中3人はよく知ってる若者だということが解った。</p>
2011年	<p>10日 日本の原発の核廃棄物で作られた劣化ウラン弾 is killing IRAQ still なう</p>

2 月	<p>イラクの子どもたちが、病院で治療も受けられずに亡くなっていることを初めて耳にした。その報告に大きな衝撃を受けた鎌仲氏は自ら状況を見にいかねばならないと決意する。こうしてイラク入りした彼女は、国連の科した経済制裁による医療品不足で子どもたちが命を落としていくのを目の当たりにした。</p> <p>鎌仲氏は紛争の両者、つまりイラクと米国の双方で被曝した人たち、それにプルトニウム製造施設の風下に住んでいた農民を映像におさめ、取材を行った。この映画を製作している間、鎌仲氏は日本の一般の人たちに原子力に大きく依存している現実について警告を発したいと願い、実際にそうするうちに、彼女の映画を観た多くの人が現在の状況では希望が持てないと感じるようになった。これらの経験を通して鎌仲氏は「ヒバクシャ」という日本語が、広島と長崎における被曝生存者という元々の意味を超えて、放射線被曝で苦しんでいるすべての人々を指すように広げなければいけないと思うようになる。</p>
-----	---

同上 3・11以後

2011 年 3 月	<p>18 日 満月の安息日</p> <p>地震、そして原発事故から7日が過ぎました。あの日から数えれば、今日は日曜日。キリスト教的にいえば安息日です。(僕はクリスチャンでもプロテスタントでも無いけれど)</p> <p>娘と母親(前妻)と一緒に、流れ流れて沖縄まで来ました。無我夢中でただ、娘の将来を護りたくて此処まで来ました。</p> <p>28 日 地震の国のエクソダス</p> <p>地震学の観点から、これほど明確に指摘されている東海地震、南海地震の存在がある以上、原子力発電所は停めて欲しいです。未だに余談を許さない「福島」という前例を作ってしまったのだから「安全です」という電力会社の弁が説得力を失ったことも、また確かです。</p> <p>僕が原発の問題に本格的に興味をもって首を突っ込んだのは此処1年です。まるで、ペーペーですが、たったの1年本気で dig るだけでも、如何に政府と電力会社と経産省が「欺瞞(ぎまん)」に満ちているかは、解ってしまいます。これまで知らなかった方で、知識は追いつかなくても、事故後の幾多の「会見」から感じた「不信感」は、これは確かな感覚です。彼らは、地震以前から、何十年もそうだったのです。これは大事なポイントです。</p> <p>29 日 「日本人は原子力災害を意識し始めているものの、未だ事故の重大性には気づいていないようだ」仏・ルモンド紙</p> <p>事態の終息までに何ヶ月、何年かかるか解らない、と東電の副社長が漏らした。ということは、放射性物質はその間「ダダ漏れ」し続けるということである。それが長い時間の中で、地球上にどう拡散し、生態系にどんなダメージを与え、そして人体にどういった影響を与えるのか?これから</p>
---------------	--

	<p>何十年も、目を逸らすことの出来ない問題だ。</p> <p>「自曝」した日本は、大きな戦争に2つか3つ負けたくらいの「負債」を抱えてしまった現状がある。</p> <p>ハマラれた部分もあるだろうし、自業自得の部分もある。「外国」や「オカネの国」の「火事場泥棒」たちに、これからもっとハマラれない為に国民(住民)全体が勉強して賢くなる必要があるし、気持ち悪くて短絡的な全体主義ではなく、しかし地域レベルでの「愛」ある「連帯」は不可欠になる。それら自律した地域同士の「協力」「共有」はさらに、不可欠になる。</p>
2011年 4月	<p>1日 内部被曝への対処</p> <p>やめられない活動があるから、福島近くに居る人も多い。体内被曝とは何かについて、知り、対処をはかってほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●最大の住民プロテクトは放射能の埃を体内に入れないこと。 ●マスクをすること。屋外での食糧配布はやめて屋内での配布とすること。 ●雨には当たらないこと、 ●子どもの屋外での遊びは極力避けること、 等々... <p>19日 農と云える日本</p> <p>1年前から反原発で突っ走って、大してない貯金も使い切ったところで、一日12時間停電が当たり前の国 NPL でライブを録音して、1ヶ月ぶりに日本に帰った翌日に地震が来て、娘連れて沖縄に突っ走った。</p> <p>19日 (映像) 0326 @名護市港公民館 ちばりょーとうほく！ チャリティライブ</p> <p>反原発を訴えていた頃から理解されずに苦しみ、事故が起きた直後からも内部被曝の危険性を訴えて理解されずに苦しみ、不安を煽るなデマを流すなど叩かれ、かねてからイメージしていた沖縄に安住の地をみつけた事を理解されずに「逃げやがった」「裏切り者」と揶揄されて苦しみ、住み慣れた街を突然予期せず離れたことに戸惑い、何より関東に残った仲間や家族と心が繋がれなくなった事に苦しみ、正直俺も Peace-K もボロボロだった。いや、みんなボロボロだったんだな。借りたギターで飛び入りしたライブで『意識の大陸』を唄う前に、Peace-K と目を合わせ、「あ、一緒に音楽やるの、久しぶりだね」と呟いた。</p>
2011年 10月	<p>12日 高汚染がれきを全国で燃やす理由</p> <p>高濃度放射能汚染されたがれきを移動させるのは犯罪。なぜ法律を変えてまで汚染物を全国にばら撒いてるのか？バスビー博士指摘。高汚染がれきを全国で燃やす裏には癌患者を全国に広め提訴されたときに福島発癌率を他地域と比較できないようにするのが目的。</p> <p>13日 世田谷区弦巻 4.699 μsv のホットスポット周辺で</p> <p>僕には前妻との子(6歳女)が東京に居て渋谷の小学校に通っています。一時避難で 3/13 より東京を連れ出し、共に沖縄に避難しましたが、4/6 に入学式があるという理由で戻りました。</p>

	<p>個人的には反対でしたが、説得できませんでした。それでも、あと数ヶ月以内に四国、中国以西 or 海外へ出られればまだ、大丈夫だと信じています。ひとまず、冬休みだけでも沖縄へ「細胞の復活期間」を過ごしにこられたら、と誘っている最中です。なんとかしなくてはならない問題です。</p> <p>14日 世界版 SPEEDI を用いた予測 (9/6) 福島第一原子力発電所事故に伴う Cs137 の大気降下状況の試算 - 世界版 SPEEDI (W SPEEDI)を用いたシミュレーション -</p>
2011年 11月	<p>3日 1万人の原告に参加 九州玄海原発廃止請求訴訟</p> <p>九州の玄海原発の廃止を求める訴訟に「5000円」で原告として、参加できるそうです!!!! デモもひとつの方法。社会がどう変わるかってことも大事だが、まずは参加することで参加した人が当事者になれる。</p>
2012年 2月	<p>20日 放出された放射性核種は1134京ベクレル(爆発～3/14のみで)</p> <p>誰が「真の」政治家であったか。将来、社会はそれをちゃんと評価しなければならないだろう。そのために我々は今、多くの現実を直視し記憶に焼き付けなくてはならない。今、利権やしがらみや癒着や圧力に負けずに正しい情報を発信しようとしている、南相馬の市議のブログに注目が集っている。</p>
2012年 3月	<p>19日 水俣と福島に共通する10の手口</p> <p>■水俣と福島に共通する10の手口■</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、誰も責任を取らない／縦割り組織を利用する 2、被害者や世論を混乱させ、「賛否両論」に持ち込む 3、被害者同士を対立させる 4、データを取らない／証拠を残さない 5、ひたすら時間稼ぎをする 6、被害を過小評価するような調査をする 7、被害者を疲弊させ、あきらめさせる 8、認定制度を作り、被害者数を絞り込む 9、海外に情報を発信しない 10、御用学者を呼び、国際会議を開く <p>毎日新聞 :特集ワイド :かつて水俣を、今福島を追う アイリーン・美緒子・スミスさんに聞く</p>
2012年 4月	<p>4日 うるま、南城 両市が受け入れ拒否の意向</p> <p>反対や阻止、を越えた「政治参加」。</p> <p>公開質問状、請願、陳情、院内交渉、市長や町長とのアポイント。デモや署名以外にも沢山できることがあります。しかもオモロイ！勉強になる。役人や政治家たちと意思疎通ができて、ホッコリしたりする。日本の地方政治を軸にした「真の市民政治」という革命は、既に粛々と進んでいるように感じています。</p>

2012年 5月	23日 ガレキ拡散問題に関する今日の僕の意見 いま大切なのは、九州と東北を感情的に二分させるような世論誘導に乗せられない事だ。被災地感情としては、ガレキの拡散を「絆」とうそぶいて、ガレキという事業の利権を恩着せがましくも無理矢理に「火事場泥棒」していく、全国の関係事業者と、彼らの支援する政治家に対する怒りこそあって然るべき。拡散を止めようとする他地域の市民を恨んでたら、彼らの思うつぼだと思う。
2013年 1月	4日 首都圏の土壌汚染はいかほどか。 首都圏、そして福島がどのくらい放射能汚染されているか、という事を把握しやすい番組です。ぜひ、観ておいてください。

●沖縄問題／沖縄での活動にかかわる投稿

2006年 5月	3日 沖縄 今まさに米軍再編問題で揺れまくっている沖縄の、その存在自体の抱える矛盾については、僕はまだ踏み込んだ意見を吐けるほど何も知らない。ただ、沖縄を「日本」と呼ぶことに、無理がある。あそこは、「琉球」である。
2010年 6月	18日 こんな時代だからこそ 沖縄の人々の民意を無視した日米合意。そのためだけに作られたのではないかと思わせるくらいの鳩山内閣。弱々しく闘うポーズを米国に対してとっただけで、結果は丸呑みなんてわなだろうか、これはヤマトの人々の民意など、形成されてすら居ない。1億人もの意見をまとめるには、マスメディアがちゃんとしていなくちゃならない。でも、マスメディアは株主に不都合なことが書けない。我々日本人は、「真実」を守ることを疎かにして、「金」に負けてきた。もうそんな腰抜けの時代は、終わりにしたい。
2010年 7月	16日 辺野古への基地移転問題 地元の推進派、および消極的な推進派つまり従わざるを得ない人たちには、こう思う人も居るだろう。「外から来た奴らが良く解りもしないのに、とやかく云わないでくれよ」けれど、原発だとか基地だとかっていう事は、どうしたって地元だけの事ではあり得ない。

同上 3・11以後

2011年 5月	31日 旅のまとめ 長い旅を終えて、今週は東京の家を片付けて居る。これが最後の片付けで、今週末のタイコクラブ(6/5)を終えたら沖縄に本格的に移住する。地震と津波と原発で沢山の人生が大きく変わり、僕もライブと旅の連続のひと月あまりの中で、考えと望みと生きる道が、削ぎ落とされて姿を顕わしていった。
-------------	---

2011年 9月	30日 農ライフ 此処一ヶ月ほど、沖縄のパーマカルチャー仲間たちと1000坪を拓いていました。内地へのツアー続きだった僕は、数えるほどしか顔を出して居りません。仲間の皆さんが頑張ってくれました。感謝。キリギリスではなくて、アリギリスになれるように人生をデザインしていきたいものだ。
2011年 12月	10日 今、沖縄にて想うこと 先日、沖縄の浜で出逢ったオジイがこう云ったのを忘れられません。 「おじさんたちの時はね、日本から助けなんてなんにも、本当になーんにも来なかったんだよ。だから、東北で助かった人達は恵まれてる！頑張らなくちゃならない。」 10月に、南部は佐敷(沖縄県・南城市)の毛遊び(もーあしび)に呼ばれて出演した時、出演を依頼してくれた地元の青年マーシー君が佐敷の浜を指差して「洋平さん、あすこの浜で13万8千人が死んだんですよ」。本土返還後、日本のナショナリズムに対抗するために根強く発展していった琉球独自の民謡と芸能文化の象徴である毛遊びに、ナイチャーの僕を出演させてくれたというのは、かなり奇跡みたいな話であり、その感謝の念は生涯消えないと思う。
2012年 2月	20日 3/11(日)ティダノワ祭のお知らせ 地域から社会を、生活から世界をつくっていく。個人の実践がちゃんと反映されて、みんなが生き活きできる社会。失業や競争に負けるのを恐れる就労じゃなくて、人々がツナガっていける社会。 この日から始まる1年を、愉しく大切に生きていきたい。沢山の感性がこの日ここを訪れて、色々なことを感じて持って帰ってくれる。これは非常に愉しみな祭りです。 311から1年の節目。東日本の被災者、放射能という意味では自覚、無自覚を問わず広くあまねく世界中の被災者たち、つまり僕らの未来そのものに、大きな祈りをささげよう。
2012年 7月	8日 慰霊の想いを込めて 昨夜ナイトキャンドルに出向いた、大宜味村白浜(沖縄)の戦時中の歴史。 凄惨な沖縄戦・局地の実態に、読みながら少し貧血を起こしてしまっただが、日本人の一人でも多くに知っておいてもらいたいと思いアップする。恐らく、こうした事を知らずに沖縄を旅行したり、暮らしたりするのは、その人にとって実りの薄い時間になってしまう事だろう。何故、沖縄のそこかしこに慰霊碑が建ち並ぶのか。ほんの70年前。僕にとっては爺ちゃん世代の話である。

●政治／選挙にかかわる投稿

2010年 6月	19日 日曜日代々木公園で 政治を愉しもうぜ。政治ってのは、疎(うと)むほどの大したことじゃない。日々日常の俺らのことだ。だから、俺は俺なりに、愉しむよ。 19日 すべての武器を楽器に
-------------	--

	<p>選挙期間中は、街頭ライブが許可される。こいつあ痛快だ。喜納昌吉を応援する弁士を頼まれた。ギター持って唄って、トークしてくれと。街宣車ステージから唄えるのか？こいつあ痛快だ。俺は無党派で、民主党は監視するし、意見が一番近いのは明らかに共産党だ。だが、コンニチの選挙は党で選ぶものではなく、どの議員を支持するかで選ぶべきだ。</p> <p>俺は此の世に足りていないFUNKYに殉ずる、変態を売りにした、イチ表現者で在る。</p> <p>街頭で堂々と表現できるなんて、ワクワクする。そして、「選挙を祭りに」っていう時のキナさんの悪戯な目が好きなんである。</p>
2010年9月	<p>16日 まつりごと</p> <p>学があろうが無かろうが、近所のがんばり屋のお兄ちゃんらが、もっと町会議員とかならなアカンねん。ほとんどの人が思う真っ当が、当たり前前に達成される社会にするには、政治の敷居を取っ払え。参加することこそ最大の学びなんだ。その学びを多くの有権者が共有して成長できれば、その代議士は充分役割を果たしたことになる。</p>

同上 3・11以後

2012年3月	<p>31日 政府との交渉に行ってきた</p> <p>政治に不信をもっているだけでは何も変わらない。参加しなければ何も起こらない。そして参加するとは一票だけではない。1個人として日常的に活動すれば良い。2人集れば団体を作ってみれば良い。これは愉しくて、自由で、沢山の社会的な権利に気づかせてくれるだろう。院内交渉、デモ、請願、嘆願、陳情、質問状。これらは、実に開かれた市民の権利なのである。</p> <p>【直接行動のバリエーション】</p> <p>今回、「子連れのお母さんは議会に入れません」「慣例です。前例がありません」と言われました。多くの子連れのお母さんが、議場の前で、入れて下さいとお願いしていました。しかし、入れてくれません。そこで、魔法の言葉の登場です。</p> <p>「根拠となる条文を文書でお示し下さい」</p> <p>この一言で、「どうぞお入り下さい」と言って下さりました。</p> <p>早速、記者席に座っている方々には、「子連れで議場に入るのは、前例がないそうです。ぜひ、取材して下さい」とお伝えしました。</p> <p>日本には、民主主義の仕組みがちゃんとあります。公開質問状も要請書も陳情書も請願もできます。院内集会もできます。議員も市長もアポイントをとれば会ってくれます。記者クラブに連絡すれば、ジャーナリストもちゃんと取材してくれます。法律を示せば、ちゃんと行政も動いてくれます。</p> <p>こうした仕組みは、ちゃんと油を差して、動かしていないと錆び付いてしまいます。</p>
2012年12月	<p>2日 政治についてのぶっちゃけトークショー</p> <p>喜納昌吉・三宅洋平 トーク&ライブ</p> <p>沖縄の心に風吹きよ ～政を語ろう～ 第1回ぶっちゃけ会</p>

	<p>日時:2012年12月11日(火)</p> <p>場所:沖縄市民小劇場あしびなー(沖縄市中央2-28 コリンザ3F)</p> <p>12月1日僕が未来の党からの立候補打診を1日考えぬいた末にお断りした日。その夜、翌日に新党「今はひとり」を立ち上げることになる俳優の山本太郎さんと赤坂の沖縄居酒屋でお会いました。</p> <p>「脱原発を掲げる党の皆さんも、まだまだ全然甘いと思いませんか?」「僕は脱原発でもありませんが、むしろ脱被曝なんです」「ホットスポットの子供たち、大人たちを一刻も早く避難できるように道筋をつくらないと」「時間がないんです」「僕は、自分の意見で出たいので無所属で出ます。或いは、党をつくります」</p> <p>彼の覚悟の太さと、まっすぐな目をみて、今回の衆院選はこの人を全力で応援しようと決めた。</p> <p>7日 12/8 山本太郎応援しよ会@高円寺駅前 山本太郎さんの街頭演説(高円寺駅前)にて、応援演説しに行きます♪15時ヨリ。</p> <p>11日 【12/15 投票前最後の山本太郎応援しよ会】 STOP 瓦礫拡散、脱原発、脱被曝、反 TPP、反増税、表現の自由、夜中に踊る権利!</p> <p>14日 第二回 N.A.U. 日本アーティスト有意識者会議) http://nauofficial.tumblr.com/</p> <p>21日 山本太郎街頭演説にて(12/15 高円寺駅前)東京 UPSETTERS</p> <p>【山本太郎の乱】 俺も、気がついたらすっかり絡んでた選挙戦 「山本太郎の乱」。</p>
2013年1月	<p>3日 憲法改正草案をめぐり こんな事を云うとアレルギーな人が現代社会には多いのだろうし、僕自身もこの言葉で的確なのか問い続ける部分でもあるのだが、僕は「憲法第1条(或いは0条):愛」が欲しいと思っている。愛のない法律など、何千か条作っても正しく運用されない。でわ、その愛と呼ばれるものは何であるか?その不定形な要素を大切に護り、考え、話し合い続けることが社会にまず課せられた役割じゃないだろうか。</p> <p>21日 日本アーティスト有意識者会議(NAU)第3回放送のお知らせ 前回放送での「次の参院選に出る」という発言。あれから1カ月あまり。あの発言はどうなったのでしょうか。そもそもなぜ、ミュージシャンが選挙に出るのか、出て何を訴えるのか、勝算はあるのか。疑問はつきないなか、今回の放送ではその点をとことん掘りさげていきます。</p> <p>30日 第三回 N.A.U. 日本アーティスト有意識者会議 http://nauofficial.tumblr.com/</p>
2013年3月	<p>29日 NAU 公式ロゴ 投票受付中(4/1 結果発表) 前回の放送で公募した nau のロゴが30点以上集まり、選考に迷うレベルの高さ(プロ多数)でした。皆さんの気合いや愛が、びしばしと伝わってきました。本当にありがとうございます。</p>

	<p>7月の参議院選挙への立候補を 3/14 表明した三宅洋平が、日本アーティスト有意識者会議(略称「NAU」)を沖縄県選挙管理委員会に政治団体登録。カジュアルで生活に基づいた政治活動を、表現活動と融合させて展開する様を、ひとつのモデルケースとして提示する意思を表明する。</p>
2013年4月	<p>2日 NAU ロゴ発表 そして【443票の投票によりNAU のロゴが決定！】 投票してくれた皆さんありがとうございます。</p> <p>この投票の渦が7月の参議院選挙までに10万、100万に膨らむかどうかの、その最初の大きさが測れました。颱風の芽としては、上々の渦ができあがりました。1 クリックで何でも済むこの時代には煩わしい投票方法でしたが、1アクションありがとうございました。</p> <p>23日 【日本アーティスト有意識者会議(NAU)第5回放送のお知らせ】 初の女性ゲストを迎えます。ホッと居ます。さらに！反原発の現場や、がれき拡散防止の院内交渉の現場でも鮮烈な印象を残している「将来の首相候補」富樫くんも、～22時の制限付きで出演です！！</p> <p>23日 第五回 N.A.U.日本アーティスト有意識者会議 http://nauofficial.tumblr.com/</p> <p>29日 NAU の政治資金の寄付を募る口座 / 517Let's DANCE 署名提出集会のさそい Let's DANCE 署名、推進委員会より以下のような誘いがきました。5月17日、僕は全面的に参加しようと思います。夜中に踊る権利を、数十年前に売春を規制するため出来た法律で剥奪されています。日本中の由緒あるクラブが封鎖に追い込まれてきました。この明らかな不条理に対して、文化に愛され文化を愛してきた人たちの声をしっかりと届けましょう。</p> <p>30日 三宅洋平 政策8ヶ条</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.文化を最大の輸出品に 2.復興から保障へ 3.除染から廃炉ビジネスへ 4.送電線から蓄電技術へ 5.消費増税から金融資産課税へ 6.大規模農業から家庭菜園へ 7.官僚主権から住民主権へ 8.破壊の公共事業から再生の公共事業へ
2013年5月	<p>15日 (最新版)三宅洋平 政策9ヶ条</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.文化を最大の輸出品に 2.復興から保障へ 3.除染から廃炉ビジネスへ

- 4.送電線から蓄電技術へ
 - 5.消費増税から金融資産課税へ
 - 6.大規模農業から家庭菜園へ
 - 7.官僚主権から住民主権へ
 - 8.破壊から再生の公共事業へ
 - 9.憲法9条を世界遺産に
- 15日 立候補宣言

【参議院選挙への立候補宣言】

夜中にダンスしたっていいじゃないか。
 戦争なんて無い方がいいに決まってる。
 原発だって無い方向を全力で探りたい。
 「手作り」や「自然」を大切にしたい。
 大事な情報はオープンであるべきだ。
 文化や教育にちゃんと税金を使ってもいいだろう。
 もっとファンキーで多様な社会にしたい！
 命、大切だろう！！

いま、こういう感性を共有している人たちがけっこう沢山いる気がします。そして彼らは、思いとはかけ離れていくクニのあり方を、憂慮しています。そんな人たちが結びつきかけとして「選挙に参加する」が在れたら。「人間が地球にとって有益な微生物である社会をつくりたい。」そのためにまずは話し合いへ混ぜてもらいに、国会へ行こう。

教わることも、教えられることも沢山あるはず。とことん話し合っ、チャランケ(アイヌ語:部族間の話し合い)して、お互いに学ぶ先に、素敵な答えは必ずあると信じています。

28日 LET'S GO TO THE VOTE

山本太郎君から緊急招集を受けて、九州ツアーのさなか東京へ駆けつけた。

太郎くんが発表したことは簡単に二つ。

- ・脱原発、反 TPP、脱ひばく を掲げて参議院選に立候補することを明言
 (全国比例か、小選挙区かはまだ未定)
- ・脱原発、反 TPP で意思統一した野党勢力の大結集を呼びかけ

2013年
6月

9日 緑の党(グリーンズジャパン)の推薦を受けて全国比例区に立候補します
 全国の三宅クラスター(笑)の皆さん。ヘッズの皆さん。希望の船を漕ぎ出すための、一握りの砂金を、船長のところへ集めてください。緑の党へ 6/20 に600万円の供託金を耳をそろえて預ける必要があります。あと、12日。選挙資金まで含めて、キリキリに切り詰めて合計1300万円は要るなー。選挙フェス行きのチケット、一人でも多くの皆さんに「参加」意識を購入して欲しい。マツリゴトを面白く、愉しくするには「全員の参加」が必須です。

	<p>17日 三宅洋平立候補記者会見 本日、参議院議員会館より。三宅洋平立候補記者会見</p>
2013年7月	<p>6日 太郎さんと俺 吉祥寺の初日。俺は、このニーニのまっすぐな思いに、火をつけられっぱなしなんだ。 東京都民は山本太郎、吉良よし子、丸子安子、大河原まさこ、の4人が「脱原発」であることをしっかりと認識することです。</p> <p>11日 あと240時間 今日で選挙も8日目だ。100日全国でライブしまくって語りまくって、資金を集めてどーにか滑り込みで供託金600万円を払って、選挙にエントリーできた。</p> <p>15日 残り9万9千枚の紹介ハガキを1日でハカす作戦 三宅洋平 選挙ハガキ送付先 ご紹介フォーム ⇒ http://p.tl/2v2W - ◇ 投票日までに一人でも多くの方に選挙ハガキを届けたいので、7/16までにご入力ください。</p> <p>16日 あと120時間 本日は、北海道へ向かいます。→ GO 予定 7月16日(火曜日)『選挙フェス@札幌』17:00 ~ 20:00 場所:札幌・大通公園三丁目 / 7月20日(土曜日)『選挙フェス@渋谷ハチ公前』14:00 ~ 20:00</p> <p>18日 左でも右でもなく経済成長を目的としない政党、緑の党とは? http://nikkan-spa.jp/475916</p> <p>19日 (各党比較できて面白いよ)エコ議員つうしんぼ おそらくどの候補者も、無い時間の中で慌てて答えて慌ててコメントしてるぶん、それぞれの「人間性」も出ていて、面白い比較になっていると思う。</p> <p>20日 改めまして、お題目を 三宅洋平政策ビジョン すべての武器を楽器に</p> <p>22日 山本議員より電話 山本太郎参議院議員より電話。厚き御礼を互いに交わし、彼から一言 「3年後の選挙、出てくれるかな?」「いいいとも!」「それまで殺されんように頑張るわ」 「全国の輩たちを総動員して必ず護るよ」皆の命のために立ち上がる山本太郎。 俺たちは彼を厚く、護り支えていくのだと、堅く誓う。</p>

「三宅日記」ブログ 2005年9月～2010年12月

<http://blog.goo.ne.jp/nbsa-inushiki>

「三宅日記」ブログ 2010年12月～現在

<http://ameblo.jp/miyake-yohei/>

Ⅲ. 三宅洋平——政治の言葉を越えて・言葉集

速報／遅報？

ナント1年2ヶ月も前に「選挙フェス」に踏み出すという 方向性が すでに三宅本人の口から 語られていた・・・

三宅談：「デモに参加するだけでは何も変わらない、ということはよくわかったんじゃないかな。・・・もっと早い段階で俺らが政治に参画できていたら、意志を表現できたりやり取りができていれば、デモなんてやらなくていいはずだから。・・・デモの次は何の手立てがあるのか・・・」

以下 2012年5月12日:

三宅洋平[(仮)ALBATRUS]×杉岡太樹[『沈黙しない春』監督]対談

デモに参加するノリでカジュアルに政治に参画する時代の幕開け

<http://www.webdice.jp/dice/detail/3512/> より抜粋

『

三宅: 3・11以降の1年を振り返ってみると、社会的に生きざるをえなくなりましたよね。僕はもともとそういう意識が強い方だったんだけど、日本社会は社会意識、政治意識がとても薄い。(とりわけバブル以降の)日本って自分のために生きてきた人たちの連合だったから、社会として、お金はあるからハード面は充実しているんだけど、そこに住んでる人間がほんとうに機能的で調和的な暮らしができていたかという、そうじゃない。非常にストレスが多い社会だと思うんです。そういうなかでみんな孤立している。

そんななかで、電気がどのようにしてやって来てたのかをほとんどの人が知らなかった。俺は原発については知った時から反対していたし、そのときに、関心がないだけ、どころか、動いている人間を揶揄したり冷たい目で見ると社会的な空気さえあった。もちろん東電や電気事業連合会が大量の広告費を使って洗脳していたというのも事実だけれど、それ以前のおのおの思想的な、哲学的なレベルの低さに問題があったと思う。

このような状況をどうにかしたいと、特に子どもがいる人は意識的に、休日をデモに行ってみたりするようになった。1回でもデモに行った事がある人はすごく増えたと思う。地震の前の渋谷のデモって30

人だったから。護衛の警官のほうが多くて、それで道路で守られて代々木公園まで歩いて、完全に奇異の目で見られて、痛快だったけど寂しかったよ。

それぞれが、たとえば自分がやってる仕事が、社会にとってどういう作用を及ぼしているだろうか、とか、食べもの生産システムとか、いろんなことのルートをたどって物事を考え始めた。だから、今まではみんなに気づかれない所に利権が在ったのが、やすやすと気づき始めて、戦争のメカニズムすら多くの人が解りはじめている。知ることで抑止できると思うし、みんなが社会意識を持ち始めることで、世の中は変わり始めた。

だから必要があるなら、自分が住んでいる小さな町の町会議員に、若いうちにならないとだめだな、くらい思っている。出馬っていう「1票以上の政治参加」の仕方で、10,000人の町で300票とればいい。CD1,000枚売るより簡単だよ(笑)。

三宅:デモってなんなんだろうね(笑)。もっとオーガナイズすることもできるけど、ほんとうにバラバラの個人が集まればいいことで、政治のありかたとか、国という単位の存在の仕方の話だよ。名も無き民衆が欲求不満になっていて、クリエイティブな出口もない。模索しはじめたのが、地震の後のデモはひとつ、デモに参加するだけでは何も変わらない、ということはよくわかったんじゃないかな。それだけでもデモに参加する意味は あると思うし。俺はデモに行くようになって、良かったと思うのは、このやり方じゃだめですというのをおじさん、おばさんたちに言えたことかな。これじゃ俺らの世代はついてきませんよ、と。

もっと早い段階で俺らが政治に参画できていたら、意志を表現できたりやり取りができていれば、デモなんてやらなくていいはずだから。手遅れなところからはじまったんだけど、デモの次はなんの手立てがあるのか、俺自身もつきつめてきたし・・・

杉岡:例えば無関心な人、デモを素通りしていく人に対してはどのようなスタンスだった?

三宅:無関心層に対するいらだちの時期は、地震の前に通過していて。そういう人達もそれなりに得ている情報から考えて、無関心だったりするから。そういう人ともコミュニケーションできなければいけないし、音楽の趣味みたいなものかな。あの人はクラシックが好きだから、とかいう事に対して「わかってないヤツだな」と、例えばメタル好きがとやかく言えないじゃないですか。同一化したいわけではなくて、すれ違うだけでも、その違和感だけでも感じるというのは大きい。あとはこちらの力不足だと思うよ。ライブと同じで、無関心に過ぎて行く人がいたら「俺の表現の力が足りなくて、キャッチしてもらえなかったんだな」と思うし。だからデモというのはある種エンターテインメントとして成立できていないから、無関心に通り過ぎていくんだなという考え方の方が健康的じゃないかな。

杉岡:1年経って、絶望、希望、どっちに変化した?

三宅:世の中のほとんどすべてのことが予想通りに進んでいて、驚きも怒りもなく、自分自身としては、自分という単位のなかで具体的になにができるか、を考えています。

もちろん音楽表現は俺の生業なので根幹にあるんだけど、それ以外に奉仕できることはなにか。町会議員に出馬するくらいのはみんなやったらいい。10,000人の立候補プロジェクトというのはどう？若者が地方選挙をかき回すんだ。たいして金もかからないし、なにより俺らのやり方で、自分の身の回りが盛り上がる。移住した沖縄でイベントをやって2、300人を集めたときに、地元のおじい「いろいろ思うところもあるだろうけど、ぐだぐだ言ってるだけじゃなくて、こんなに人を集められるならなんでもお前ら出馬しないんだ」って言われた。確かにそうなんだ。集まってる力を政治力にしていけないだけ。ホームページの作り方やチラシの作り方とか、選挙で準備することって俺らミュージシャンがやってることと同じなんだよね。「超得意じゃん！」って。おまけに音楽というフリーコンテンツまである。

じゃあそれをやるのは、今なんだよ。とにかくやってみたらどうなるのかをシミュレーションしはじめているんだ。めんどくさいけど、それで得られるものもあるから。1票入れますから政治に参加しています、という人は多いけど、市民団体を作って請願したりもできるし、官僚に会いに行くこともできる。もっと言えば出馬もできる。いままでなぜデモか署名しかなかったかという、そうした法律的に整備された手段を行使していなかったから。

そういう行動ってそれまではネガティブなイメージがあったけど、震災後そういうのも吹っ飛んだから。俺は具体的にそういうことを考えることになった。どこまで具体的にになれるか。まず政治の敷居を格段に下げてしまいたい。みんながこぞって出入りできるようにしたい。そうしたら、食品の放射線検知器を町の給食センターに設置するために、予算をたてるとか。地元の議員は具体的な要求に応えたくてしょうがないから、議員も自分がこれだけのことを自治体で行ったとアピールできる具体性がほしいんだよ。でも理解を得るのに時間がかかるようだったら、それを変えていくには身内から誰か出すしかない、とか。このなりで立候補したらハッとする人多いと思うよ(笑)。

これまでは理想論的な、非現実的なところから反対していた。でもそれを世の中で成り立たせるためには、越えなきゃいけない障壁がある。ぶつかんなきゃ見えてこないし。それでツイッターとかインスタグラムで伝える。そうして、いともやすやすと永田町に足をつっこもうぜって(笑)。お金持ちの偏った思想に突き動かされてそのシステムを維持するためにみんながいるというものがもう限界にきている。みんな気づいているから。本当の市民社会を作れるようになるために、政治のあり方も変えていきたい。カジュアルな政治をやりたいんだ。

人を信用しているか、愛があるか、俺はカウンターオピニオンとしての市民研究機関がないと、国家って国家を維持するシステムだから、被害を縮小化させたいがるし出費を減らしたがる。そこにいる人たちがそこに邁進していることは責められない。ただ、もうちょっと俺らと心通じあってくれないかなと、なんで俺らが原発をいやだと言っているか、コミュニケーションが足りないんだと思う。そういう場をもっと設けて、人としてお互い向き合えて、話してればわかりあうからね。共感のない者同士が争うからお互いを悪く言うし、デモという場所に参加していても、それはこれから革命的に変えていきたい部分だと思う。市

民は市民を守る研究機関を市町村単位で作ったらいいと思う。知りたい情報を得ることができる。

杉岡:アーティストでも何にも発言しない人や無関心な人を変えていきたいと思う？

三宅:いかなる意見の人の話も聞いてみたいし、俺の意見も聞いてもらいたい。それで必ず混じるから、双方にとって利益しかない。話すことで自分の立場もよりはっきりするし。エモーションだから、お互いに語り合わないといけない。「そういう風に考えているから推進しているんだ」ということがわかると、無為に相手の心を踏みにじるような反対意見の出し方をせずに済むようになる。問題なのは、反対したいことじゃなくて、伝えたいこと、場合によっては自分の要求をどうしたいかということだから。ときには怒らなきゃいけないこともあるけど、官僚にも「気持ちよく」伝えないと。

三宅:だからこの映画は、ものすごい序章だろうね。最初の 44 日間で、芽が生まれた。デモってほんとうに稚拙な表現だけど、将来的には、1 年後にはここまで実現したという、そういう記録であってほしい。だから杉岡くん、よろしくお願いします(笑)。一部の人に託す、というのではなくて、誰もが無理せず政治はできるべきだから。デモに参加するノリで政治に参加する時代の幕開けにしたいなと思って、僕は僕なりに動いている。

三宅:あと、もうひとつの観点から言うと、他の国だったら暴動が起こってもおかしくない政治情勢なのに起きなかった。世界の人はずなぜ日本人は怒らないのか、という意見もあったけれど、いや、俺らは俺なりに、衝動は抱えながら、どうやってそれをセーブして、それでもどう表現しようとしたか、という記録もある。それは世界的にも稀有なことだと思う。

だから、そのとき日本人がそこで怒りを抱えながらどう表現していたか、「何をしなくなかったか」というものが映っている。それは、エジプトの革命とかと比較したときに、実は将来的な大事なことを教えている可能性がある。それを平和ボケというなら、俺は素晴らしいことだと思うから。歴史上そんな平和は構築されたことがないわけだから、僕らはその〈ボケるくらいの平和〉を世界に広めなきゃいけないと思う。それがここには映っているんだ。

』

補註・1

「法律的に整備された手段」を行使して 「政治に参加」することを考えていると明言

「対談」から、2012 年 5 月 12 日当時の三宅が、「デモに参加することはカジュアルなことになったのだけれどもデモでの要求は議会内政治には直接反映されない。デモで意思表示するだけでなく、もっと『やりとり』ができなければ」という思いを強く抱いていることが分かる。

三宅はデモの限界を指摘し、次の手を打つべきだと主張した。ただし、2012年5月12日という時点での発言であることを忘れてはならない。対談が行われた段階で、再稼働阻止闘争や官邸前抗議行動は、まだそれほど大きなうねりにはなっていなかった。（「首都圏反原発連合」によれば、「2012年の3月からほぼ毎週金曜日に、総理大臣官邸前で抗議を呼びかけてきました。数百人で始めた抗議行動は、数千人、数万人と数を増していき、6月29日には約20万人もの人たちが集まりました。」ということである。）その後、原発再稼働を契機に、かつてない規模の抗議行動が官邸前で行われ、抗議行動の「代表者」と時の首相が、大きく制限された環境下であれ、直接話し合う機会をもつという「事件」もあったが、三宅の5月当時の認識を覆すほどに、議会内政治への介入が進んだとは言えないだろう。だからこそ三宅は、「再稼働反対」のうねりを越えた翌年、「次の手」を打ったのだ。

以下で、後に参院選に立候補し「選挙フェス」を行った三宅の、それに関連する言葉を整理しよう。

Q．なぜ三宅は「法的に整備された手段の行使」はデモに勝ると考えるのか？

A．①デモでは結局何も変わらない。コミュニケーションの場をもっと設けるべきだから？

「デモに参加するだけでは何も変わらない、ということはよくわかったんじゃないかな。

もっと早い段階で俺らが政治に参画できていたら、意志を表現できたりやり取りができていれば、デモなんてやらなくていいはずだから。

コミュニケーションが足りないんだと思う。そういう場をもっと設けて、人としてお互い向き合えて、話してればわかりあうからね。共感のない者同士が争うからお互いを悪く言うし、デモという場所に参加していても、それはこれから革命的に変えていきたい部分」

A．②どこまで具体的にになれるかが大事だから？

「そういう行動ってそれまではネガティブなイメージがあったけど、震災後そういうのも吹っ飛んだから。どこまで具体的にになれるか。」

A．③「ネガティブなイメージ」の政治だが「デモに参加するノリ」で参画すればいいから？

「デモというのはある種エンターテインメントとして成立できていないから、無関心に通り過ぎていくんだなという考え方の方が健康的じゃないかな。選挙で準備することって俺らミュージシャンがやってることと同じ」

A．④日本人に合っている？から？

「日本人がそこで怒りを抱えながらどう表現していたか、「何をしたくなかったか」それを平和ボケというなら、俺は素晴らしいことだと思うから」

（註. この発想からすると、「法的に整備された手段の行使」のほうが、「日本人」には合っていると

思ったのかもしれない。)

三宅の「次の手立て」とは・・・

戦略：「カジュアル」を装いつつ既成政治の枠内へ踏み込む・・・というポーズをとること
で、より清新さをアピールしていく

戦術：選挙運動にエンターテインメントの手法を大胆に取り入れることで、既成の概念を
覆してみせる → あわよくばこの概念崩しが議会内でも・・・と期待させる

三宅は、選挙運動を「選挙フェス」に、タスキを掛けずにオーガニックTシャツを候補者である自身の正装に、国会を「チャランケ」の場に、選挙フェス参加者を「ノマド秘書」に、政治の敷居を下げて1万人の若者を町会議員立候補者に・・・というように徹底的に「カジュアル」を装うことで、政治の「ネガティブなイメージ」を反転させようとする。いや、というよりも、「ネガティブ」へ「カジュアル」がどれだけ切り込んでいけるのか、すでに選挙運動を「選挙フェス」として予示的に方向性を見せている三宅が、国会をどれだけ「フェス」にできるのか、それを見てみたいという欲求を生み出すことに成功した。

「選挙を占拠！」「俺たちの選挙！」

——三宅洋平、各地の選挙フェス(2013年7月4日～7月20日)での言葉

◎ 以下、「三宅洋平 伝説的なコトバ達の抜粋(三宅洋平を勝手に応援するネットワーク)」

[http://in-the-eyes-of-etranger.blogspot.jp/p/blog-page.html?sref=t
w](http://in-the-eyes-of-etranger.blogspot.jp/p/blog-page.html?sref=tw)

及び「火の鳥新聞」<https://spacehousepeople.wordpress.com> より抜粋する。

◆3・11と避難とLOVE → 愛があるなら動け＝「個人的なことは政治的なことである」

TPPがどうか 原発がどうか 全部大事なことです 言いなりのメディアも 民を見捨てた戦争(いくさ)も 全部 俺たちの話なんだよね だけどそれ以前にさ もっと目の前のことで——

原発に入っている友達が 「ヨーヘイクン・・・目が見えなくなりました」とか 電話で話したり 「嫁が白血病で死にました・・・」って云う 東北のヤツがいたり 吉祥寺に住んでいた仲間が 白血病になって地元に戻ったり マスメディアはいっこうに報じないんだけどさ 全部 俺の身の回りで起きた

CLOSE な出来事たちで だから なんで自分が立候補するのかって云われたら そういう自分の体験が積み重なって 「この状況でじっとしてられるほうがおかしいだろ！」って 俺は思うんだよね

3・11 の後 東京の仲間たちと 俺をはじめ移住した人間たちは一度 大きな溝を挟んで話しました 逃げるのか 逃げないのか 自分としては 子どもをあの時 2週間だけでも 沖縄に逃げさせられたのは 父親として正しい判断だったと思います だからといって あの時残った人たちが間違ってたとも思ってません

それで時が経って そんな時の仲間たちと 「あん時 おまえおらんで寂しかったんやぞ！」 だから ぼくは こう言い返しました 「あん時 あんたが残って心配やったんだぞ！」とすげー喧嘩したんだけど あん時はね 今振り返ると・・・「心配や！」ゆうのと 「寂しい！」ゆうのと なんだソレ LOVE じゃねえか LOVE だったんだなあ と思って

カッコつけてるヒマなくなってきたからさ 政治がダサイとか言ってるくらいだったら 俺たちが中に入ってって変えるしかないでしょ？ どんなに逃げても政治は追いかけてくるぜ？ 俺はね 沖縄の北部の小さな町まで逃げて 放射能から そこで自然農をやり始めたけどね やっぱ政治は そこまで追いかけてきたんだよね だから踵を返して 東京に帰ってきたよ

◆選挙制度、演説の仕方、候補者の身なり、投票する側の意識を変える

「選挙を占拠！」「俺たちの選挙！」

俺たちでやろうよ！ YOU ' RE THE PEOPLE ! YOU ' RE THE POWER !

HEAT BEAT を酌み交わした HI-TO BI-TO ! (人々) YOU ' RE THE PEOPLE !

立ち上がれ！ YOU ' RE THE POWER ! ミエナイチカラ！ありのままのスタンスでマツリゴト！

600万円も国に預けないと 選挙出して貰えないっていう「世界で一番金持ちしか選挙に出れない国・日本」 このシステムを皆に見せたくてさ だから 俺が立候補することを通して 日本の選挙システムの色々な矛盾を 皆と一緒に体感して貰いたいっていうのが——俺の最初の目的だったんだよね

こういうもの、オーガニックのTシャツってのはさ、ユニクロの倍くらいするよ。でもさ、その背景にある生産システムが人を傷つけているか傷つけていないかまで考えて選んでほしい。食べ物も。金なんかなくも選べる。力が宿るんだ。これが俺の正装ね

「今まで選挙に行かなかった」っていう 真っ当な人たちに 政治の分母を変えて欲しいの その分母を変えちゃえば 彼らの計算はガタ狂いだから

◆戦っちゃいけない

俺は選挙を“戦い”だと思ってないの　でもこの国の首相は　毎日フェイスブックで「今日も戦います！」「戦います！」って云ってんだよ　その感性が違うんだよね　俺は“PEACE”を作りたいんだ　本当の“PEACE”を　皆と一緒に！だから一生懸命さ　自分の身や　自分のスタッフたちを守るためにも　“戦わない”スタンスを出しているの　これは“戦い”じゃない　俺は自民党をぶっ潰したいわけじゃない　政権を取りたいわけでもない　俺はね　安倍さんが出来てないことを　手伝いに行きたいんだよ　「俺たち知ってるよ」って　「お金遣わないでシアワセになる方法　知ってるよ」って　「それと経済成長　噛み合わせたらいいじゃんそういう訳にはいかないのかな？」　それを訊きに行きたいんだ

一番近いとこまで今の俺の身で行けるのは　国会まで　デモ　嘆願　陳情　院内交渉といって　官僚と交渉するの　そういうのもやってきた　「瓦礫拡散やめてくれ」つって　でも「持ち帰って検討します」っていう返事しか返って来なかった　1ミリも動かなかったんだよね・・・　デモの現場いくとさ　長いこと一生懸命さ　日本の環境とかを思って戦ってくれてた　左翼のおじさんたちも一杯いて　でもやり方が古かったんだよね　結局“戦っちゃってた”わけ

コブシ出すのは簡単なんだよ　もう散々やってきたぜ　喧嘩は飽き飽きだよ　やり尽くしてきたぜ　それで学んだのはすべての人との調和のとれた　今みたいなこういう時間が一番のPOWER　だってこと

これが　セイジ　これが　クニツクリ　これが　マツリゴト　これが　クニ　これが　タミ
YOU'RE THE PEOPLE　YOU'RE THE POWER!　EVERYBODY, YOU'RE THE
POWER!　POWER!　チカラ!　ミエナイチカラ!　YOU'RE THE POWER!
PEOPLE!　HEAT BEAT　を酌み交わした　YOU'RE THE PEOPLE!

◆不満をぶつける当事者はいない、国なんて実体はない、自分が変われ

普天間のゲート前でも　やっぱり俺すげー悲しくなったんだ　警官隊　市民のデモ　フェンスの向こうのセキュリティ　ぶつかり合ってるんだけど　顔見りゃみーんなウチナンチュ　その内側でウチナンチュのセキュリティに守られた米兵が　明後日の方向見て立ってんだよ　で「GO HOME MARINES！」って声が響く　居心地悪そうに彼らが明後日の方向を見ている　でもそいつらの顔よく見たらさ　アメリカ人じゃなかったりして　コスタリカとか　南米の移民で　市民権がない　ビザもない　長男の“アルベルト”かなんかわからないけど　「おまえ　米軍行ったら家族に全部市民権やるぞ」って言われて「マジで？」って命賭けて米軍に入ったヤツら　みんな同じ人間で　同じ市民だったんだよね　だからこの・・・まんまとハメられてんなと思って　だから“当事者”がいないんだよね　そこに　俺もいままでさ　国に　スゴイ文句をぶつけてきたの　こういう大きなモノに――あ　これは県庁だけど　ワーってやってきたんだけど　“国”ってなんなんだろうと思ったら　居なかったんだよね　3

・11 明けてみたら “国”なんていう実体なかった何にもやってない　じゃあ“国”って何だろうと思っ
たら——“俺たち”なんだよね　現に俺たち　だから　よく・・・有り体の言葉だけども 『世界を変える
には自分から変われ』って　その意識をマジで持って

たとえば　福島に　東北に　原発被災地に　安全な食糧を提供するような動きってのはさ　“国家
単位”でやらないとできないよ　小さな市民たちが　青息吐息で　給料遣いながら　なんとか助けたい
と思ってやってる　ベクレル検査もそう　だけどこんなことは　“国”がちゃんと指導しないとできないこ
と　それをちゃんとやってほしいと思ってたの　だけどさっき言ったように　よく考えたら“国”って“俺”な
んだよね

◆俺を話し合い(=「国会」)の中に入れてくれ

で　与えられた権利が　まだ使ってないのが1コあった　正面玄関叩いて“中”に入れてくれって云
うこと　「仲間に入れてくれ　俺を！」って　この話し合いの中に

山本太郎を応援してて　「こんなこと云ってたら　この人殺されちゃうよ」って思ったの　だから的は一
個でも多い方がいいなと思って　もう俺も出ようと思って「参議院選　俺出まーす！」って　太郎くんの
杉並の集会で俺　宣言しちゃったんだよね

ぼくの夢　最後に言っときます　仲間たちが何人か国会に行つて　ちゃんと勢力を作る
伝えることは伝える　「あの人たちがやらないから俺たちがやるよ」じゃないの「あの人たちのやってるこ
とに俺たちの色をちょっと混ぜたい」

俺が緑の党の推薦候補を選んだのは緑の党　まだちっちゃい　ちっちゃい党　新聞でも“諸派”
名前すら載らない　だけど「循環型の社会」とか　「人を大事にする社会」とか
だいたい　俺が叫び続けてきたことと　ピッタシ同じことを言ってたんだよね

HUMAN BEING！人間だ！俺も人間だ！国が人間くさいことやってくんねえから、俺たちが国会
行こうよ！おっちゃんも一緒に、俺と一緒に、国会行こうよ！

だから“地球人”なんだよ。もうさ、民族とか言ったら、もうキリないんだ。俺も地球を守りたい！新宿
の空気も、もっとよくしたい！飲める水を掘りたい！この街でも。そういうことを、国会に行つて訴えたい！同じじゃね？気持ちはず？

◆「おまかせ」民主主義でなく、立候補しよう　選んだ議員に意見し続けよう

「あなたのそんなスタンスでは　うちの　おじいちゃん・おばあちゃんとかには伝わりません」でも俺は

思うんだ「あなたのおじいちゃん・おばあちゃんに 語りかけるのは あなたの方がうまいよ」って「おじいちゃん・おばあちゃんが 俺の この風体を見て生み出される誤解を解けるのは あなただよ」って「あの人あんな風に見えるけど めちゃくちゃ考えて動いてるんだよ」って云ってくれよ！ って思うんだよ それがね 俺は日本の民衆が 政治家に 何かを期待しちゃってたっていうことの 意識の典型的な現れだと思ってるの 民主主義はそれじゃ絶対成り立たないと思う あなたにもできること一杯ある 立候補だけが答えじゃないよ もちろん そういう選挙にしたい そういうマツリゴトにしたい

Yahman

「ヨーヘイさん 頑張ってください！」とか云われると 俺あ寂しくなるんだよね だってこれ以上頑張れないもん これ以上頑張ったら死んじゃうよ じゃあ誰が頑張るのって 「頑張って」って云ったアナタなんだよね

“キッカケ”はつくりまますよ でもやるのは“皆” 次はさ……アンタの番だぜ！ みなさんを 応援しています！ 今までの俺らのままで これまでやってきたことを 自信を持って チョット永田町の方に顔を向ければいいんだよ “お任せ”をやめましょうっていうことです

町議会議員になるのには 供託金かかんない町も多いです 一万人位のちっちゃい町だったら 400票とったら 町議会議員になれますよ 政治をぼくらの手に取り戻す 本当の市民の社会をつくる 既存の空気なんか読む気ねえぞ！ 空気は読むもんじゃない 吸って 吐いて 創るもんだよ！ いまこうやって息吸って吐いてるだけで 俺たちは時代を創っているんだよ！

俺たちは俺たちの言葉で語りたいね これ選挙終わっても ぼくたちめっちゃくちゃ色んなことできるよ もうすでに…(会場「YEAH！」「確かに」)このチカラで何でもできる

俺は国会行ったらシゴトできるって確信してるよ 皆がいるから！

「なんか手伝うことあるー？ 困ってるでしょ？ やりたいこと出来てないよね？ 俺手伝うよ？」って云う人が何人いるかが その議員のチカラだと俺は思うの だから俺が国会に行ったらさ 『ノマドな秘書部隊』として ちょっと子守の間の10分とかで 俺がツイッターで「これについて誰か調べて」っていうのをリサーチしてくれたり ぐぐったり ウィキったりそういう「手間」を支持者全員で分け合えば 山本太郎も10円弁げ出来ずに済むし 俺も声が枯れなくて済む筈なんだ

一応9か条の政策は考えて出しました これはお題目です そこに紐付される具体的な案は 皆で考えたいの 6年間 皆で徹底的に勉強して 思いをぶつけるだけじゃなくて 伝える方法も学んで 変えたいんです

一票入れてくれなんて、おこがましくていえない。好きに選んだらいい。自分が「こいつとなら6年付き添える」っていう人間に、意見し続け、情報長者にするんだよ

◆民主主義は多数決じゃだめなんだ

民主主義は多数決じゃだめなんだ。すべての人が大声を出せるシステムじゃなきゃだめだと思うんだ
議事をパワハラじゃなく、おれたちの話し合いの場に戻そうよ だけどね、国会議員を孤独にさせて
闇を生んだのはおれたちだぜ。注目し続け、意見し続け、政治を孤独にしないこと

◆豊かさの概念を変えよう

政権を打倒する 日本をひっくり返す じゃなくて ぼくらの人数分 ぼくらの色に ちょっと染めさせて
ほしいんですよ この日本を なぜか？ 特にバブル以降の時代に育ったぼくらの世代ってのは
皆一緒なんですけど お金がなかったもんで お金がなくて どうやって豊かになるかをすごい必死に
追及してきたんですよ だから お金持ってる人たち 権力持ってる人たちが 知らない豊かさをい
っぱい持ってます 見えない富でジャラジャラですよ ナンボお金積んだってね 自分で作った野菜よ
りうまい野菜は 買えない！

だからさ 卑屈になったり “やられてる”とか “俺たちは少数派だ”って思い込むんじゃなくて ち
よっと先に気づいた “これ美味しいよ”っていうのを 皆に教えよう

こういう物 オーガニックなTシャツっていうのはさ ユニクロのTシャツの倍くらいするよ でもさ
その背景にある生産システムが 人を傷つけてるか傷つけてないかまで考えて 選んでほしい 食べ
物も 金なんかなくても 選べる で そうやって選んだものは こうやってライブの時に着ようと思う
チカラが 宿るんだ これが俺の正装ね 一生モンを一杯集めよう

◆為替相場・賃金格差・そして国境をなくしたい

経済成長 もちろん皆の幸せと 頑張りの上に成り立ってんなら それはどんどんしたらいい だ
けどそれは各国との競争である必要はない お金がない国をもっと助けるべきだし 俺はね 為替
相場って なくなってもいいんじゃないかって思ってて 同じ働いた時間と努力になんで差が生まれ
るのか Yahman

TPPをね 自由化だ 自由化だと言ってくれるのはいいんだけど ぼくも“自由化”したい派なん
ですよ “国境”を！ TPPっていうシステムには 俺は反対 地域経済がぶっ壊れる

◆原発の後始末を！環境破壊から環境再生事業へ

今 この時代に 戦争のない世界をどうやって構築するかとか 現に今 世界に400基ある原発を
どうするかっていうことは これは逃げれない現実なんだよね 世界に今 原発400基あるもうす
でに動いてて 今から止めても ずーっと廃炉作業 永遠に冷やし続けなければいけない原発が
世界に400基以上 もうこの時点で 世界の戦争に 100兆円以上使っているんだけどそんなヒマぜ
んっぜんない だから俺は 世界から戦争を無くしたいんだ で 原発400基の面倒をちゃんと見れ
る国 —— 国じゃないや惑星にしたいの マジで時間がない

いますぐ全員が マジで本気だしてアクションしないと この子たちに未来が無いよ だから俺たちはさ ちゃんと カッコイイ大人として責任持って行こうよ 俺たちは 親にこう云われたんだよ「お母ちゃんたち 若い頃は あの川も泳げたんやけどね」って 俺はその逆のことを云いたい「俺たちが頑張って綺麗にしたから 自由に遊べよ」って 俺が云っている 『破壊から再生への公共事業』ってのは 本気でそういうこと そのためには 開発業者 土建屋 官僚 政権与党 あと市民 皆が一つにならないと絶対できない

そのためには 開発事業をやってる人たちとこそ チャランケして —— 今 日本の一級河川でダムがない川って ないんだよね 広い川だと 200個くらいダムがある
ダムを作るために ダムを作る 治水でもないんでもないんだ かえってそれで洪水が起きている 山が崩れて 作ったダムを川に戻すのは 作るより10倍金がかかるんだって いいじゃん 開発業者のみなさん みんなに喜ばれて 自分の中に誇りが生まれて 10倍金がかかるんだったら 俺 税金払うよ 喜んで払う そしたら彼らが 10年後に変わると思うんだよね 「俺たちが綺麗にして戻した川を大事にしてくれよ」って 言ってくれるようになるって 俺は信じてるんだよ 同世代の土建屋一杯いる 皆 悩んでいる 親父たちと自分たちのやりたこいことの狭間で悩んでる 俺はその思いも掬いたい 国会にも届けたい そしてその思いが もっと仕事しやすいようにしたい 皆がもっと使ってほしいと思うところにお金を使ってくれるように 国会で訴えたい 訴えるだけじゃなくて自分も動きたい 皆で喜ぶ顔を見て 「ね 安倍さん！こんなに喜んでるよ！」「こんな顔してもらったことある？」って 彼も喜ばしい

ステルス戦闘機 42機買うのに 9000億円使ったんだって？聞いてねーよ！！ベクレル検査機はどこ行ったんだよ？！「何が国防だよ！？いのちって何だよ！？」ってすげー思った 現に数十万人がまだ自分の土地や家を失って 避難生活をしている最中に その心の傷が癒える時間もない間に サウジアラビアやベトナムに原発を売り歩くという 国のその感性がぼくには理解できないんです 人として 支持もできないんです

◆具体的要求:ベクレル検査機を各県に

ぼくが立候補した理由っていうのは 百個ぐらいあるんですけど やっぱりぼくの中で今 ベクレル検査機を各県に 200台ずつぐらい導入して運営してほしいんです

被ばくを平均化することで補償から逃れようとしているんです (汚染を日本中に広げていること) 全国で被ばくが平均化されてます

チェルノブイリの時は チェルノブイリ一体の区域を 経済的に区画分けして遮断したんです チェルノブイリから食べ物が出ないようになったんです あの当時のソビエト政府ですら 最低限 そのぐらいのことはしたんですよ で ベラルーシなんかでは 子どもたちを今でも 年に数週間 保養に出します 全員です これはもう義務付けられています

一体どこの共産国家のことをバカにできたもんだらうかと

片やひるがえって日本政府がやったことってというのは 「いや やっぱり経済は止められない」と
そこで結果的に猛烈な流通経済に乗かって 沖縄の子供たちの給食にまで 福島のお米を使うか
使わないかっていう話が出てきて その議論をするのであれば なおさらベクレル検査機を日常的にぼ
くらが さっき食べたカルビーのポテチがいくつだったんかとか そういうレベルで好きな時に測れる
体制を 国が作るべきだと思うんです

で 一つの県に200台の・・・たとえば ゲルマニウムの半導体のヤツを使って——いちばんいいヤ
ツですよ 1台500万円する で 技師さんつけて その給料払って 200台47都道府県に配って 大
体いくらぐらいで出来るかなって 算数の弱いぼくが計算したんですよ 2千億円ぐらいで出来るはず
なんです ま 多く見積もってじゃあ倍で4千億でもいいや できるはずなんです やろうと思えば

それをやらずに日本政府は何をやってるかっていうと 去年か一昨年かの予算の中では 42機のステ
ルス戦闘機を 米国から9千億円で買ってます 定価の倍です で 一昨日ぐらいのニュースで
今6艦あるイージス艦を 8に増やしたそうです 1つ2千億円の買い物 2つ増やしたらしいんですよ

4千億円 ぼくたちの税金からです これを云いに行きたい 文化を3000億円 三倍増して事業
費使うのも 今の予算からみたら ちっちゃなことだよ

◆戦争をなくし戦争経済からの脱出を

世界から戦争をなくすのって どうやるか 本気で考えませんか？ 戦争経済から脱出したくない
ですか！ 知らず知らず買った家電製品や 知らず知らず預けたお金のメガバンクが その利益が
アフガンやイラクで人殺しているような そういう“ねじれ” 国会の“ねじれ”より先にそっちを解消した
くないですか！

◆話し合おう 応援し合おう チャランケしよう

じゃあね 何ができる？あなたに 何ができる？それを考えよう 話し合おう ひとりで抱えない
どんどん口に出して 話し合おう 勇気付け合って 応援してまーす！！ぼくが 皆を 応援してまー
す！ もっと大きい声で応援するチカラをください！ Peace!

安倍総理の言っていることが全然理解できないから、国会でとことん話し合いたい、嫌うのではなく、
どんな人ともとことん話し合って、平和的に物事をよい方へ導きたい

マスコミがマスゴミと呼ばれるようになったのは、みんなが伝えることをメディアにまかせっきりにしてチ
ャランケするのをさぼっていたからではないのか

ぼくの信頼するメディアは、ここにいるみんな。みんなの口から口、手から手 目から目。手芽口土

◆日本から世界へ広めよう

今回の参議院選挙から もう海外のメディアの人は何人か食いついてきてくれてんだ 「これはすごいことが起きてる メディアは これを取り扱わないといけない」って外国のメディアの人が言ってくれてる 「私も動く」って言ってくれてる

資源のない日本のチカラは 人のチカラ 職人イズム 音楽のみならず すべての芸事 職人 手作り ハンドメイド それが日本のチカラ

日本の今回の この参議院選挙をきっかけに 原発や原爆を味わった日本人から始まる 本当の 世界平和の運動が 今 始まったんだよ！！これは世界中に広まっていくんだよ！！俺たちのシゴト！ 一番傷ついてる奴らが 一番痛みがわかる奴らが 一番やさしくなったの世界の人にそれを伝えるよ！ 一番傷ついている奴らが、一番痛みが分かる。一番優しくなったの。それを世界に伝えるよ。The riot is still going on! ムーブメントはもう始まってるぜ Yahman! 家に帰ったら皆の番だよ！選挙を楽しもう 最後まで 心の底から考えて この国を良くしよう！困っている人を助けよう！愛してまーす！！

… 以上

補註・2

B感覚をネットで配信 —— 「選挙フェス」はネット選挙に 実によく栄える

以上、合計 14 の小見出しをこちらで付けてみたが、三宅はだいたいこのカテゴリーの中で話をしていようである。読者のみなさんはどう思うだろう。しかし、このように並べてみても、「選挙フェス」を正しく伝えたことにはならないのは、言うまでもない。三宅の言葉は、即興性の高いポエトリーリーディングのような表現形態に乗せて吐かれることが多いのだ。しかも、アコースティックギターやリズム楽器や打楽器、ハーモニカ等の、それ自体が高度な演奏である伴奏を伴って。そのニュアンスは、紙媒体ではとても再現できない。

その意味で、三宅の「選挙フェス」が上手いのは、ネット選挙を誰よりも上手に使ったところではないか。文字では伝えきれない、もっとエモーショナルなものをも伝えることに成功している。しかも、ユーチューブにアップすることは、まるっきり「ノマド秘書」に任せるというお金のかからないやりかたで。

三宅の音楽的なクオリティーの高さは、門外漢にもすぐに分かる。三宅という一流のミュージシャンのフェスを、ライブ中継で、観客の情動もろとも伝えるようなやり方で発信する。ときには文字に起こしてまで。またときには、「リアルチャランケ」と称して、問題意識を抱えた「観客」の一人との丁々発止の言葉のやりとりのスリリングな場面をドキュメンタリータッチで記録して。

そのユーチューブを見ている者は、もはや、選挙演説を聞いているという意識ではないだろう。気持

ちいい。心地よい。しかし、それだけではない。選挙フェスに集う大勢の群集を相手に、画面の中の三宅は、「おれは柄にもなく候補者として立っているぜ。あんたはおれのために何をしてくれる？おれの味方になって何が出来る？」と真顔で問いかけている。その場にいたら、ヤバイ。もっていかれるかもしれない。

RLL・川邊によれば、B 感覚とは、「身体が政治と出会うことである、変成意識のこと。ある種の覚醒効果」「自分へ世界が距離を詰め急に近付いてきた瞬間に脳の中でドキンとするアレだ。世界の構造に手を振れて、グラグラと揺すった感じだ。概念を改めてまさぐって自分と自分以外とに差異を作った瞬間だ」という。しかも川邊は、「(三宅の選挙フェスには)警察官の姿はないし暴力を感じる瞬間も一切ないのに、その場で政治的な回路が開き、群衆が繋がり時間を共にすることでアがる、変成意識を感じた」らしい。なぜか。

前の選挙では防弾チョッキを着ていたという山本太郎は、B 感覚をビリビリ感じているであろう。「的は複数あったほうがいいから」と立候補した三宅もまた、B 感覚を感じているに違いない。それが、その場にいる群集にも伝わる。そのエモーションが動画に映り込み、動画を見た者にもまた飛び火する。

B 感覚をフリーズしてネットで配信すれば、解凍して、不特定多数に何度でも感じてもらうことができる。こうして、普通は街頭に出てデモをやったり、機動隊や警察と対峙したりしたときに感じる B 感覚が、インターネットの動画を伝って(たぶんそれなりに薄まりながらではあるけれど)広がったのではないか。

しかし、B 感覚はかなり危険な香りのする感覚のはずなんだけれど、そのわりには、かなり「健全な」行動を今回は促している。なにせ、B 感覚に触れた実に 17 万人以上が、なんとも辛気くさい「投票」という行為にまで及んだのだから。

ここで、三宅の言動を振り返って整理してみよう

3・11を契機に三宅は考えた。「法的に整備された手段の行使」は、これまで「ネガティブなイメージ」だったが、そんなことは言っていられない。議会内政治への介入をはかるには、現状、最も効果的な方法である選挙に出て当選して議会内に入ることを目指そう。既成の政治が「ネガティブなイメージ」ならば、それを逆手に取ってやれ。

そして、「選挙フェス」で訴えた。「ネガティブなイメージを変えるために、ぼくはこのままで、カジュアルなままで国会に行きたい。ほら、選挙運動だって、こんなやり方でできるんだよ。みんな、ぼくについてきてよ。」

その結果、個人の得票としてはかなり多い 17 万票余りを獲得したが、惜しくも落選。

さて、この先は？「次の手」はどうあるべきか？

実は、三宅が仮に当選しても、しなくても、必ずやらなければならないことがある。

それは、**B 感覚の火を消さないこと**である。

問題は、「法的に整備された手段の行使」をしているだけでは、**B 感覚を刺激し続けられないこと**ではないか。

補註・3

B 感覚を頼りに 議会内政治を突き動かす

—— 議会の内と外とをリンクさせる政治/社会運動ブロックの形成へ

投票行為はいろいろある「法的に整備された手段の行使」の中でも、代議制に従うという意味で、最も **B 感覚**が薄い行為である。この行為だけでは、例えいつの日か三宅を議会に送り込んだとしても、**B 感覚の火**は、早晩消えてしまうことだろう。

当選の暁には、議会内の三宅には、もちろん三宅流を貫くことを期待するが、議会の外で黙ってお手並み拝見しているだけはいけない。また、三宅の言う「ノマド秘書」をいくら勤めても、それだけではだめだろう。なぜなら、「秘書」は代議制の枠内にあり、どれだけ熱心にやっても **B 感覚**をさほど刺激しないからだ。

B 感覚は既成の概念や枠組みにたてつくことで強く刺激される。今欲しいのは、**B 感覚**を推進力にした政治が議会内政治をも突き動かせる、という手応えなのだ。

三宅が議会内で **B 感覚**で居続けるには、議会外にも、**B 感覚**に基づき、天下国家にたてつき続ける元気な層が、母体としていなければならないだろう。

「はじめに」でも触れているが、「議会内政治勢力＋社会運動」のブロックとして、例えば 60 ～ 70 年代の「社会党＋総評系労働運動」ブロックを想起してみよう。組織労働者によってがっちり組織された労組運動が、社会党という議会内政治勢力とブロックを形成し、議会内外で連携して自民党に対抗し、一定ブレーキをかけてもいた。

しかし今は、総評が解体され、支持母体を失った社会党も極小政党となり、労組運動は社会諸運動の中心を担ってはいない。イラク反戦デモから始まり、フリーター系労組や高円寺を主戦場にしたデモ、そして 3・11 以降の反・脱原発デモ、再稼働反対デモ、官邸前抗議、秘密保護法反対デモ……。これらのデモの主体は、議会内政治勢力とブロックを作って連携するほど固まっていはいない。さらさらした砂粒だ。

サウンドデモが主流になってからは、ミュージシャンや DJ やアーティストも中心に関わるようになり、整然と声をそろえてシュプレヒコールを叫び、拳を振り上げるような旧労組系のパターンは時代遅れになった。きっと、主催者の掛け声に合わせて身体を動かすことは、もう **B 感覚**を刺激しないのだ。きっともう一つ別の既成の枠組みに没主体的に囲い込まれる息苦しさ、違和感を感じてしまうのだろう。むしろ、ノイジーな音で街の秩序をひっかきたい。ノイズに乗せて身体をくねらせ勝手なダンスを踊

りたい。飛び入りで列に入って一緒に騒ぎたい。誰にも縛られたくない。そこに国家権力を体現した機動隊やら警察やらがいると、B 感覚がまたぐっと上がる…。この B 感覚を納得させる議会内政治勢力は、まだないのだとも言える。

三宅の選挙フェスで集った群集も、組織ではなく一人一人が砂粒のようにばらばらだ。だが、ただ一つ、それぞれがそれぞれなりに B 感覚を感じているという共通点はある。だから、この共通点である B 感覚を生かして隣同士繋がるしかない。でもそれは大変なことだ。「いうこと聞くよな奴らじゃない」ぶん、組織化は難しいのだ。

しかし、この先は、三宅が背負い込む問題ではない。三宅は当代一流のミュージシャン。観客を集め、歌いかけ、語りかけ、踊らせ、投票にまで行かせた。国会という舞台でのステージパフォーマンスも一流かも。けれど、ミュージシャンと観客の主客は逆転しない。それがフジロックから流れる「フェス」というもののルールなのだ。プロである三宅は、あくまでもそのルールに則っている。

問題は、三宅を国会に送った後の議会外の「観客」たちが、どう三宅に呼応するのかだ。B 感覚を感じる感性を持った砂粒たちが、「選挙フェス」がなくても、デモやらオキュパイやら再稼働阻止現地行動やら反基地座り込みやらを契機に、それぞれ B 感覚に目覚め、それを研ぎ澄ませる。さらに、現場の空間を共有するお互い同士が自分の感覚を言葉にしてやりとりし合う。それぞれの B 感覚を、「自分たちの感覚」として共有するために。そうすることで、その場が一つの「評議会」然！？となるかもしれない。この点に、議会内政治勢力と議会外の社会諸運動とのブロックが、新たに形成できるかどうか懸かっているような気がする。

三宅が「チャランケ」と言っていることを、三宅は三宅なりに国会内でやるつもりだろうが、それは、議会外の諸社会運動の現場でも、そこに集うお互い同士が、あるいは運動体同士が、もっとできないなければならないことなのだ。

案外、この砂粒同士の「チャランケ」、小さな社会運動体相互の「チャランケ」自体も相当スリリングで、B 感覚を刺激するかもしれないよ。例え、背後に、機動隊や警察の「書き割り」がなくてもね。

●「選挙フェス」開催地一覧

2013 年 7 月	4 日	参院選公示！第1弾 街頭ライブ@吉祥寺
	5 日	街頭ライブ@新宿→新橋
	6 日	選挙フェス@渋谷ハチ公前特設ステージ
	7 日	街頭ライブ@川崎→横浜
	9 日	選挙フェス@那覇
	10 日	選挙フェス@福岡
	11 日	選挙フェス@広島
	12 日	街頭ライブ@神戸
	13 日	難波→梅田→此花区@大阪
	14 日	選挙フェス@渋谷ハチ公前
	15 日	選挙フェス@名古屋→京都

〈資料〉

16 日	選挙フェス@札幌
17 日	選挙フェス@仙台
19 日	選挙フェス@柏
20 日	選挙フェス FINAL @渋谷ハチ公前

<https://miyake-yohei.jp/category/%E6%B4%BB%E5%8B%95%E5%A0%B1%E5%91%8A>

[/page/7/](#)

IV. 「選挙フェス」はいかに語られたか ——からだが動けばところが動き出す・ ところが動けばからだ動き出す——

以上、これまで述べてきたように、私・たちは、三宅洋平の「選挙フェス」の可能性を読み尽くすことに向けて、「ディシプリン(規律訓練)」から逸脱・逃走しようとする濃厚な身体感覚や「B感覚」に基づく「カウンター生政治」の系譜を、ダンス規制反対運動や、03年のイラク反戦運動最中のサウンドデモから「3・11」以降のサウンドデモ・アクションまでの「路上解放運動」の流れから探ることを試みた。併せて、三宅洋平のブログ・ツイッターの記事から「選挙」フェスに至るまでの彼の軌跡や齟齬の歩みをたどると共に、彼の発言等の分析を通じて、「選挙フェス」の中の「B感覚」のあり様について論じてきた。

以下では、「選挙フェス」をめぐる文章を更にいくつか紹介しながら、これまで述べてきたことをもう少し補足したい。

1. 野外フェスのスタイルで〈政治〉を創り出す

「アースガーデン」ブログに、「南兵衛」のペンネームで以下のような「選挙フェス」の熱気を伝える記事が掲載されている。

(1)

三宅洋平／選挙フェスの爆発的な反響は、オルタナティブな仲間たちの輪を超えて一般の人々に届きつつあり、僕が熱に浮かされるように書き上げてアップした前記事への反響は、たった3日間で閲覧者数4万人近く、SNSの「いいね&RT」の合計も1万7千を超えるというコミュニティレベルでは熱狂的なものになりました。

それでも、比例全国区のハードルは100万票です。冷静になればヒトケタ違う反応が欲しいのが現実でしょう。

この1-2日で、やっとマスコミからの取材依頼が来るようになったそうですが、いかんせん時間がな

い。明日の新聞紙面に載っても木曜日、明後日なら金曜日。一般の人々の意識への浸透が、どこまで追いつくのかは、本当に未知数。何しろ投票日はもうたった4日後です。

けれども、今、たった今も現在進行形の選挙フェスが現してくれた姿、三宅洋平があらためて語ってくれたコトバには希望があります。それ以上に時代の必然だと感じます。

“自分たちが毎日使うものは、誰がつくってるのか？

環境や第三世界の人に迷惑をかけていないか、

丁寧に選んで納得して選んで身につけたいよね。

今、俺が着ているのはオーガニックコットンのTシャツなんだけど、

そうやって選んだものは胸張って気持ちいい。

こうやってみんなの前で着ようって思えるチカラが宿る。

これが、オレの正装なんだよ。

一生モノをいっぱい集めよう。

値段が高いって思うかもしれないけど、

俺たちの財布の中身が、3000円減るか5000円減るかなんて、

地球には関係のない話なんだよ。”

地球環境やエコロジーを語る政治家はこれまでも沢山いましたが、こんなにわかりやすく、あたり前の言葉で等身大に語る若い候補者を他に僕は知りません。

まあ、言葉使いは少々乱暴なのですが(苦笑)。(＊1)

(2)

官邸前抗議からの爆発的な脱原発のうねりの中、そのプロセスに深く関わり8月末の野田総理との面会にも参加した僕自身は、あらためて民主主義を考え向かい合うことが必要だと思いました。

(……)

今まさに、目の前で芽を出し始めている、新しい世代の政治、参加型民主主義の成長を目の当たりにした半年でした。

そうした中、今回の参院選のまっただ中に飛び出てきた、選挙フェス／三宅洋平の存在には興奮します。彼の発する言葉や姿に、これまでの政治の言葉づかいを超える新しい息吹を感じるからです。

そのダイレクトなライブ感、誰もが参加できるオープンなあり方、ポストバブル世代だからこそ語れるオルタナティブな意識、ボランティアをドンドン巻き込んでいく勢いと心遣い、参加型民主主義を自然に飲み込んでいる、新しい心のあり方。

時代の色んな要素が必然が、彼を真ん中にしたウズの中に透けて見えてきます。(＊2)

(3)

この10年強のカルチャーの象徴のひとつに、フジロックを筆頭とする野外音楽フェスティバルの成長と定着があります。

フジロックの始まり以降2000年前後から、野外会場で数万人レベルの音楽フェスティバルが次々と誕生し規模を拡大していきました。そしてその先のこの5年ほどで定着してきたのが、日本中さまざまな地域、会場の特色や個性を活かした数百人から数千人規模のローカルフェスの広がりです。

元々、三宅洋平はミュージシャンであり、フジロックを筆頭とする数々の音楽フェスに出演してきた、フェス世代の筆頭とも言える存在です。知名度こそ高くはないものの、そのライブのクオリティと独特の存在感で、全国各地の中小フェスにひっぱりだこの存在でした。

そうしたこれまでの仲間たちとの全国各地域でのリアルなつながりがあるからこそ、東京を離れ名古屋、京都、神戸、広島、福岡、札幌、仙台と、「選挙フェス」が全国各地をめぐる盛り返り続けています。

“これからの時代は、テクノ、ヒップホップ、ロック、パンク、ソウル、トライバル、民謡、全部もう一緒だよ。

僕たち、政治や世界に先がけて先にもうみんな一緒になって、ひとつになって、やってますよって言いたいよね。
永田町に行って教えてあげたいよ。”

“ちまたの選挙見ているとさ、これオレ達でもできるよなって思ったんだよね。

フライヤーつくって、モノ伝えて、人に動いてもらうって、
オレ達がフェスやイベントでやってきたことなんだよね。
得意分野だよ、オレ達の。”(*3)

「(1)」と「(2)」の記事では、書き手自身が、環境問題といった大きな課題について「わかりやすく、あたり前の言葉で等身大に語る」三宅洋平の言葉や、オーガニックコットンのTシャツを「正装」として、自発的なボランティアを巻きこんで生み出される「選挙フェス」の「ライブ感覚」に溢れた熱気に身体感覚を刺激されている様子を、思いを込めて描いている。「選挙フェス」では、そうした解放感に充ちた身体感覚を、他の多くの参加者も同様に共有していたように思う。

また、「(3)」では、「選挙フェス」に先立って、これまで三宅洋平が「ローカルフェス」も含めた野外音楽フェスティバルの開催・運営に深く関わってきたことに触れると共に、「フライヤーつくって、モノ伝えて、人に動いてもらうって、オレ達がフェスやイベントでやってきたことなんだよね」という三宅洋平自身の言葉を紹介している。音楽活動と国政選挙という一見無関係に見えることが、彼の中では一連なるのこととして意識されていたことが、そこからもうかがえる。

そのように、三宅洋平が昨年夏の参議院選挙で注目すべき動きを創り出すことを可能

にした一つの要因として、野外音楽フェスティバル方式で街頭での選挙キャンペーンを展開していく「選挙フェス」という、今までにない人々の集合のスタイルを創造したということが間違いなくあるだろう。

2. 「参加型・対話型」の新しい〈政治〉を体現

季刊『ピープルズ・プラン』編集長であり、日本での「緑の党」の活動にも深く関わっている白川真澄は、昨年の参議院選挙をめぐる分析の中で、三宅洋平の「選挙フェス」について、以下のように言及している。

知名度のない緑の党を苦しめたのは、マスメディアによる徹底した黙殺であった。国会議員がいないがゆえにマスメディアでの発言機会を完全に奪われ、「諸派」としてしか報道されなかった。

しかし、緑の党のなかで三宅洋平は、政治の新しい地平を切り開くことに成功した。三宅は、全国で選挙フェスを展開し、演説と音楽を融合させ、「政治は祭り」を実地に演出した。それは、緑の党が主張した参加型・対話型の政治を体現し、人びとの情動を動かした。その言葉はシンプルだが思想性があり、人びとの胸に響くものがあつた。

ネットを駆使した三宅は、またたく間に共感と支持を広げ、新しい伝説を創り出した。サイトの紹介者は最初の 280 人から 88 万人へ、三宅のツイート 978 はリツイート 34021 へと飛躍的に広がった。マスメディアによる黙殺の壁をもの見事に食い破り、17 万 6970 人を投票に赴かせたのである。

緑の党が三宅を推薦候補にしたことは成功だったが、党そのものが新しい政治を体現するものとしては社会的に認知されなかった。正直なところ、緑の党は三宅(の個人票)に救われたが、三宅の当選を支え切れなかった。しかし、三宅が試みたムーブメントから政治の新しい可能性を学び、導き出すことができる。

緑の党は、初めての国政挑戦で惨敗した。だが、この敗北から、日本社会では緑の党が存立する基盤や可能性はない、と断定するのは間違いだろう。共産党だけが安倍政権に対する可視的な対抗勢力として登場しているが、山本太郎や三宅洋平の得票が示すように、共産党とは別の左翼・リベラル対抗勢力を期待・希求する多くの人びとが確実に存在する。

たとえばアベノミクスとの対決において、共産党は、賃上げによる景気回復・経済成長を主張する。このケインズ主義的な対案が中短期的には有効であるとしても、アベノミクスの核心である経済成長至上主義に対抗するためには、脱成長のパラダイムに立つ経済

や雇用のビジョンを打ち出す必要がある。この点で、緑の党はなくてはならない役割を果たすことができるはずだ。

白川真澄「参院選・対抗勢力・安倍政権」(「季刊ピープルズ・プランNo. 62」所収)

白川真澄も、「アースガーデン」のブログ記事と同様に、「演説と音楽を融合」させた「選挙フェス」というスタイルを通じて、「緑の党が主張した参加型・対話型の政治」を実現して、「政治の新しい地平を切り開く」ことに成功したことを指摘している。

白川真澄は、そうした動きに現れている「政治の新しい可能性」として、「共産党とは別の左翼・リベラル対抗勢力を期待・希求する多くの人びとが確実に存在する」と述べている。しかし、三宅洋平に共感する多くの若者たちが「選挙フェス」に集結した際には、彼(女)らが、「共産党とは別の左翼・リベラル対抗勢力を期待・希求」したというよりも、もっと身体感覚的なレベルでの解放感や、何か新しいことが始まるのではないかという期待感がそこに存在していたのではないだろうか。そうした意味では、「別の左翼・リベラル対抗勢力を期待・希求」という白川真澄の分析は、解放的な身体感覚が生み出す「カウンター生政治」への契機を捉え損ねているように思う。

3. 有権者が有権者をまきこむ「ネット選挙」運動が初めて登場

「アースガーデン」ブログ記事の書き手と白川真澄の両者とも、三宅選挙でネットやツイッター等のソーシャルメディアが大きな役割を占めることに注目しているのだが、次に、NHKの報道番組での三宅洋平の選挙結果の分析を基に、三宅選挙でいかにインターネットやツイッターが活用されたかをめぐってもう少し具体的に見ていきたい。

無名にもかかわらず、数千人規模の聴衆を集めた三宅さん。

なぜ、支持は広がったのか。

多くの候補者が一方的に情報発信する中で、三宅さんは、選挙戦序盤から、有権者との対話に力を入れてきました。

最も有効なツールだと考えていたのが、手軽にやり取りができるツイッターです。

脱原発など、自分の主張に対して寄せられる声に、できるだけ早く返信するように心がけてきました。

少しでも時間ができれば、どこでもツイッターです。

緑の党グリーンズジャパン 三宅洋平候補

「思いが入っているやつは無視できないし、全ての空き時間は、ツイッターに費やしている。」

選挙戦中盤、三宅さん支持のうねりを起こしたのは、その主張に共感した有権者でした。
これは、三宅さんのプロフィールや、演説の動画などを集めた応援サイトです。
サイトを作ったのは、三宅さんのツイッターの読者、フォロワーの1人でした。
このサイトが、多くの人の目に留まることになります。

その広がり、NHKのビッグデータ分析で見えます。
最初に、このサイトの存在をツイッターで投稿したのは、およそ280人。
瞬く間に拡散し、1週間で88万人に届きました。

三宅さんを知った人たちは、さらに動きました。
演説の様子を、スマートフォンなどでネット中継したのです。
多いときは、15人以上が同時に中継し、数十万人が視聴したと、みられています。
その一方で、三宅陣営は、選挙運動に関して指摘を受ける場面もありました。
事前に承諾を得た有権者以外に、メールを送ったことが問題だとされたのです。
選挙戦最終日。東京・渋谷で行われた演説には、多くの人たちが集まりました。

緑の党グリーンズジャパン 三宅洋平候補
「日本の参議院選挙から、世界の歴史を変えるんだよ。」

有権者が有権者を巻き込んだムーブメントは、最後まで広がり続けました。

緑の党グリーンズジャパン 三宅洋平候補
「みんなを巻き込んでいくために、ネットは、すごくいいツールになっている。より全員が話し合いに参加できるために、とても必要な技術だったと思うし、これだけの人がついてきている。これは新しい政治力なんで、それをしっかり組織化していく。」

三宅さんが獲得した票は、17万7,000票。
当選はならなかったものの、比例代表で議席を獲得した政党では、当選圏内の得票でした。

“ネット選挙”解禁 政治はどう変わる

ゲスト山下和彦記者(経済部)

●NHKが独自に分析したビッグデータ 三宅さんの場合

山下記者:そうですね、私たちはツイッターの分析とともに、ネット上のさまざまな動きを、この1か月、見続けてきました。

その中で最も目立った存在が、三宅洋平さんだったんです。

その三宅さんのツイッター分析の結果が、こちらです。

選挙期間中に、三宅さんが投稿した選挙関連のツイートは、978件。

1日あたり50件以上で、候補者全体の平均のおよそ5倍です。

また、投稿をほかの人が紹介する、リツイートの件数は3万4,000回。

これは、すべての候補者や党首の中で、最も多い数なんです。

投稿1件あたり、どれだけリツイートされたかを表した拡散力で見ますと、34.8になりまして、三宅さんのツイートは、平均30回以上、紹介されていたことになります。

こうした拡散が、さらに関心呼び起こしまして、三宅さんのフォロワーは選挙期間中、1万8,000から、3万6,000へと倍増しました。

三宅さんは、こうしたネットの特性を生かして、多くの人にメッセージを届けていたことがデータから分かります。

●三宅さんの情報が、これほど広く速く拡散した理由は？

佐藤:そうですね、もちろん戦略的にリアルな活動、フェスのような活動と、ネットでの活動をうまく融合的にやったということ、あとはヴィジュアルイメージを大変重視した選挙戦を行いましたので、映像のクオリティーが大変高いということも大きな要因だと思います。

ですけども、それ以上に三宅さんの政治に対する態度であるとか、そういったものが既存の大手政党が、どうしてもよっている、なんか日本の政治文化みたいなものを大きく揺さぶるような、もっと若い人はそういう政治を求めているんじゃないんだ、ということ、うまく形にしたようなところがあって、そういったところのメッセージが若い人に受け入れられたんじゃないかなというふうに考えています。(＊4)

「Ⅲ. 三宅洋平言葉集」の「補注2」でも、三宅洋平が「選挙フェス」でネット選挙を他のどの候補者よりも巧みに活用していることについて述べた。上のNHKの解説でも、ビッグデータの分析を基に、「選挙フェス」を15人以上が同時に中継し、数十万人がそれを視聴したことや、選挙期間中の三宅洋平の投稿を他の人に紹介するリツイートの回数が平均30回以上にも及んだこと、三宅洋平のフォロワーが選挙期間中、1万8,000から、3万6,000へと拡大していったこと等、「有権者が有権者を巻き込んだムーブメント」の様子を具体的な数字で紹介している。

NHKの解説では、三宅選挙の特色として、「選挙フェス」のような「リアル」な活動とネット

トでの活動を巧みに融合したことや、ビジュアルイメージの重視を指摘している。しかし、それ以上に、NHKの解説員も言うように、オーガニックコットンの T シャツという音楽フェスでのスタイルをそのまま政治の場にもちこんで、論議不在の国会を大事な問題をとことん語り合う「チャランケ」の場にしようとする三宅洋平の姿に、自分たちの既成政治への拒否の意思と重なるものを若者たちが感じたことが、大きいことのように思う。

そうした彼のあり方への共感から、多くの若者たちが自ら積極的に彼の選挙の「運動員」や「ノマド秘書」となって、三宅洋平のツイートを拡散し、「選挙フェス」を中継・投稿する等、三宅洋平自身も掌握しきれないようなネットを選挙のツールとして駆使する支援者の動きや「渦」が生み出されたという意味で、三宅選挙は、まさに「ネット選挙」の名にふさわしいものだったと言えよう。

4. 三宅洋平は「ハーメルンの笛吹男」？！

以上、紹介した文章や解説は、どれも「選挙フェス」に好意的なものだが、ここで、それについてももう少し批判的な視点も含めて論評する若手の研究者の西田亮介の文章を取り上げてみたい。

いつかは「ネットは社会を変える」のだろうか。あるいは、「ネットで社会を変える」なら、どうだろう。そのための、前提条件とはどのようなものだろうか。両者は似て非なるものである。後者には意思と、戦略が必要だ。

この問題を考えるにあたって、参照してみたいのが、2013年の参院選に立候補した、ミュージシャン三宅洋平の事例だ。

結果は落選だったが、176,970票という落選候補者中の最多得票を獲得した。過去にもネットの活用を標榜した国政選挙における、一般的な意味での無名候補者は少なからずいたものの、いずれも数万票にとどまっていた。

2013年の参院選でも、ほかにもネット選挙を活用した候補者は少なからずいたが、テレビタレントとして抜群の知名度を持っていたり、現職議員だった。その他の無名候補は、やはり泡沫のままであった。その意味において、三宅の事例は異色だ。しかも、参院選後も政治活動を継続している。

2013年7月20日、炎天下の土曜日の午後、東京は渋谷ハチ公前には、いつもと同じように多くの若者たちが集まっていた。首都圏のみならず、全国から多くの若者がやってきて、熱気に包まれている。そんな平凡な休日の光景のようにも見えた。

ハチ公を前にして慌ただしく音響機器や簡易のステージの設営が行われ、ちょっとしたイベントが始まろうとしていた。

集まっている若者を見ると、Tシャツでクビにはタオルを巻いて、スニーカー姿のものが目立つ。主催者側と、聞き手の距離は近い。

近年若者の政治離れが指摘されて久しいが、ハチ公前に集った彼らは、三宅と山本(太郎)の最後の選挙運動を応援するために集まったのだ。

そこで行われたのは、驚くほど政治色が薄く、しかも後述するが一般に思われている「脱原発」というシングルイシューでさえなく、政治的メッセージの少ない選挙運動だった。

「選挙フェス」と名付けられたこのスタイルの選挙運動は、17日間に及ぶ参院選の選挙運動期間中、日本全国、三宅の行く先々で繰り広げられ、終盤に近づくほど多くの若者を集めた。

(....)

他方、一見、若者中心の新たなネット選挙運動のように映る、三宅らによる「選挙フェス」は、その狭間で新たな可能性と課題——大げさにいえば民主主義の危機——を浮き彫りにした。

三宅洋平を支持する若者たちは、彼の応援演説を映像に撮影し動画共有サイトにアップした。三宅本人もTwitterをはじめソーシャルメディアで積極的に情報発信を行った。またコミュニケーションの形式としても、スーツも着ず、襷もかけず、冒頭に記したように「選挙フェス」というライブのような形式で行い続けた。

一般に三宅は「脱原発」を支持する候補者として認知されている。だが、応援演説の内容は一筋縄では捉えられないほどにユニークだ。動画共有サイトに、多くの「選挙フェス」の動画がアップされているので、それらを丁寧に視聴すると見えてくるが、実は三宅自身が脱原発を声高に訴えている場面は多くはない。

それどころかエネルギー問題について「自分もわからない」「他人に話しかけてみよう」「他の政党の候補者や政治家もリスペクトしてる」といった他者肯定、あるいは疑問形のメッセージが多いことに気づくはずだ。自身への支持や投票を直接呼びかけることすらあまりない。

三宅はその風貌や、ライブというメッセージの形式もあわせて、聴衆に対して、新たなコミュニケーションの起点となることを促している。

実際、彼の「マニフェスト」を見てみても、それらは箇条書きで、具体的な政策的主張はよく分からない。斬新な主張よりも、新たなコミュニケーションの誘発が選挙運動の中心になったという意味で、「コミュニケーションありきの選挙運動」といえる。

彼はリズムにあわせてこう言う。

「政治のことは正直よく分からない。政治家の人たちも実際に顔合わせて話してみればリスペクトできた。国会に行って、彼らが話していることを聞いてみようと思う。みんなも家に帰ったら、こういうことを話してみしてほしいんだ」と。

古典的な、他党や他の候補者を半ば罵倒し、自身の政策を連呼する選挙運動に慣れていると、どこか頼りなくさえ思えてくる。

だが、選挙戦後半になるにしたがって、明らかに選挙フェスの集客は増えていった。個人に対する信任と政党に対する信任を合算する参院比例区という注釈はつくものの、三宅は落選したが177000票を集めるに至った。

三宅洋平は「地盤・看板・カバン」を持たなかった。ミュージシャンといっても、山本太郎とは異なり、一般的にも著名なわけではない。放送法の規制もあるため、マスメディアが集中的に取り上げたわけ

でもない。その支持は、インターネットやSNSなどを通じて彼の活動を知った若者に由来すると考えられる。

こうした三宅の取り組みを、「若者の政治参加を促す」と肯定的に捉える動きもある。共感できる点もあるが、一方で危険性についても考える必要がある。

具体的な政策メッセージが乏しく、何を主張したいのかが不透明な彼に、そのスタイルに共感した多くの若者たちが賛意を表明している。

「新しい社会運動」と呼ばれるように、90年代から(大文字の政治から離れた)ストリートで政治的主張をこうしたスタイルで行うものは従来からいた。だが、実際に間接民主制に参加し、立候補して若者の支持を集めたケースは少ない。

もちろん三宅が戦略的だったのか、無意識的に行ったのかは分からないが、三宅は政治について漠然とした不満を持った現代の若者たちを、具体的な到着先が分からないまま政治に巻き込んでいった。さながら、ハーメルンの笛吹のように。

またこの「形式」が動員に一定程度有効だということが明らかになった以上、この動員スタイルを分析、模倣しようとするものが多数出てくることも考えられる。もっと知名度があり、圧倒的な動員が見込める人物を使って。とりわけデータからネット選挙にアプローチする与党がこうした手法を採用する可能性を考えると、あまり気持ちが良いものではない。

西田亮介「「ハーメルンの笛吹き」は若者を動員するのか、それとも民主主義の危機か
——2013年、ネット選挙解禁の裏側で」(春秋社PR誌『春秋 2013年10月号』所収)

西田亮介は、三宅洋平の「選挙フェス」について、「実は三宅自身が脱原発を声高に訴えている場面は多くはなく、「三宅はその風貌や、ライブというメッセージの形式もあわせて、聴衆に対して、新たなコミュニケーションの起点となることを促している」ことを指摘している。そのように、三宅洋平の選挙は、「具体的な政策」提言や「斬新な主張」をアピールするというよりも、「問題提起型」で、「選挙フェス」の参加者自身に問いを投げかけるような新たな政治的なコミュニケーションの形を創り出そうするものであることが、大きな特色となっている。ただ、そのことに対して、書き手の西田亮介自身は、「具体的な政策メッセージが乏しく、何を主張したいのかが不透明」と否定的な評価を行っている。西田亮介は、三宅選挙について、「民主主義の危機」という言い方もしているが、むしろ、「こんな政治はもうたくさんだ！」という私・たちの切実な声・思いを顧みないまま、政治が成立しているという現在のこの国の「民主主義の危機」こそが、「選挙フェス」に対する若者層を中心とする幅広い人々の支持・共感を生み出した背景にあると言ってもいいだろう。

また、西田亮介は、「三宅は政治について漠然とした不満を持った現代の若者たちを、具体的な到着先が分からないまま政治に巻き込んでいった。さながら、ハーメルンの笛吹のように」と述べて、三宅洋平が若者たちの情動を喚起して「ハーメルンの笛吹のように」

行き先不明な状態で連れ出そうとしていることを危惧している。そのように、政治的・運動的な新たな理念を創り出し、それを共に分かち合うというよりも、情動の喚起に大きく依拠する三宅選挙のスタイルに、私・たちとしてもある種の危うさを感じないわけではない。しかし、私・たちが危惧するのは、彼が若者たちの情動を喚起して行き先不明なまま連れ出そうとするということよりも、むしろ、「選挙フェス」という「祭り」の後、結局、そこに結集した若者たちが元の日常性に回帰することだけに終わってしまうのではないかということだ。

西田亮介は、「ネットで社会を変える」ための前提条件として、「意思と、戦略が必要だ」と主張している。しかし、その際に彼が前提にしているのは、「有権者は候補者の掲げる政策や主張から判断して、自らの利害を代表する候補者を適正に選択することで民主主義が健全に機能する」といった発想であるように思う。しかし、「選挙フェス」で示されたような既成政治への拒否や、三宅洋平の登場に新たな動きを期待した人々の思いを雲散霧消させないためには、既存の政治制度の枠組みを前提にするのではなく、政治についての漠然とした不満や「こんな政治はもうたくさんだ！」という拒否の意思から、いかに新たな政治のあり方を創り出すかが問われているように思う。

5. まとめにかえて

以上、述べてきたように、三宅洋平の呼びかけに応答して、多くの若者たちが、「選挙フェス」の会場に身を運び、彼のツイッター上のメッセージを携帯電話のメールで拡散したということには、サウンドデモが表現してきたような解放的な身体感覚や、「自分たちが求めているのはこんな政治じゃない」という拒否の意思を直接的に表現するという直接民主的な意思が、間違いなく反映されているだろう。そのように、三宅洋平の選挙キャンペーンへの参加・協力や、彼に一票を投じるといった既成の制度の枠内での行為ではあっても、そこに「自分が待ち望む社会の変化を自分自身が『今、ここで』実現したい」という「予示的政治」の現れ、あるいは少なくとも、その萌芽を見て取ってもいいのではないかと思う。

そのような意味で、「選挙フェス」が拓く新たな政治の可能性を十分に捉えるには、白川真澄や西田亮介の文章に現れているように、明確な言説として表現された政策や政治的な主張の選択というレベルだけで政治を捉えるような旧来からの政治観そのものが問い直されなければならないだろう。「2.」で取り上げた白川真澄の文章で、三宅洋平が「参加型・対話型の政治を体現し、人びとの情動を動かした」ことで、「政治の新しい地平を切り開くことに成功した」と言っていることについては、私・たちとしても特に異論はない。同じ文章で、白川真澄は、三宅選挙を多くの若者たちが支持したことについて「共産党とは別の左翼・リベラル対抗勢力を期待・希求する」動きだと言っている。しかし、「選挙フェス」に多数の若者たちが集結することで既成の政治への拒否や直接民主的な政治への意思を街頭で直接的に表現したように思うが、それは、決して「共産党とは別の左翼・リベラル対抗勢

力」に「期待」して自分の意思を託すということではなかったはずである。

結局、そうした見方をする限り、「選挙フェス」に結集するような若者たちではなく、「共産党とは別の左翼・リベラル対抗勢力(つまり、彼のような従来からの活動家層)」こそが政治の主体だという「代行主義」的な発想を免れていないのではないか。私たちが、三宅洋平の「選挙フェス」の可能性を読み尽くそうとするのであれば、まず、そうした発想自体を問いなおされなければならないように思う。

「Ⅲ.」の「補註3」でも述べたように、「フェス」のルールとして「ミュージシャンと観客の主体は逆転しない」以上、三宅洋平から「観客」の若者たちへという一方通行のコミュニケーションやメッセージの流れが「選挙フェス」で逆転することはなく、また、その場の「観客」同志の間でのコミュニケーションや「チャランケ」が成立することはない。また、「警察、右翼、安倍総理。みんな同じようにこの国を思っている。日の丸が大好きなのか、山本太郎が大好きなのかの違いだけ(*5)」といった政治的な対立や「敵対性」をなるべく消去しようとする彼の発言のスタイルをどう評価するかという問題がないわけではない。しかし、そのことで、福島原発事故後に次々と身近な友人が身体の不調・発病を伝えてきた経験から反原発・脱被曝を唱え、自分で作った野菜の旨さをアピールしながらTPPによる農業破壊に反対するという、あくまでも自分の身体に根ざした言葉を通じて国会を「チャランケ」の場にしようと訴える彼のメッセージが、多くの若者たちの心の琴線に触れ、身体感覚を揺さぶったことの意義を否定してはならないだろう。

「選挙フェス」は、あくまでも選挙戦という「期間限定」のイベントであり、選挙活動として街頭を公然と占拠することが可能だったからこそ成立したものであることは否めない。しかし、そうだとすれば、なおさら、「選挙フェス」のような身体感覚を揺さぶるような街頭での集合性の経験がつかの間の「自己解放感」の享受に終わらずに、選挙キャンペーンという枠を超えて、そこで示された既成の政治への拒否や直接民主的な意思を形にするための新たな集合性を、私たちの側はどのように生み出すのか。そのことが、改めて問われているように思う。

若手の社会学者の古市憲寿は、若者たちの多くが「現在の生活に満足」と答えながら、その一方で、「悩みや不安を感じている」と答えるという矛盾した調査結果が出ていることについて論じている(*6)。彼は、そのような調査結果について、多くの若者たちが、安定的な将来設計が困難な状況の中でばくぜんとした不安を感じながらも、自分の「生」のポルテージを初めから低く設定してほどほどのところで満足感を得るように努めることで、過剰な期待や不満を抱かないように「セルフコントロール」しているのではないかと述べている。彼は、「ムラムラ(村々)する若者たち」という言い方もしているが、多くの若者たちが気のあった友人たちとの「村」的な人間関係に居場所を見いだす一方で、そのことに退屈して「ムラムラ」し、「村」の外部に非日常を求めながら、結局、そのことが自分の置かれている状況を打破することにはならず、再び日常に戻るという「往復運動」を繰り返していると

というのが、彼の分析だ。

「生」の困難を強いるこの社会を生き延びるために、そうした無意識的な「あきらめ」の感覚や「セルフコントロール」を身につけざるを得ないというのは、今さら言うまでもなく、何も若者世代だけに限った話ではない。そうした意味で、イラク反戦運動以降のサウンドデモの流れの中に現れている身体感覚的な解放感が、クラブハウスでの「ダンス規制」といった目に見える形でのディシプルの強制を拒否することから、更にそうした「セルフコントロール」までも打ち砕くような強度をどのように獲得するのか。私・たちは、サウンドデモに現れているような、支配の側が強制する「国民」や労働者としての従順な身体性を拒否する動きを、街頭での「カウンター生政治」の現れとして論じてきた。そのように、民衆側の「カウンター生政治」が、私たちが自らに行使する自己規制的・自己検閲的な「セルフコントロール」を打破するような強度を獲得するには、私たちがその内実を更にどのように豊かにイメージし、対抗的な形で展開していくかが改めて強く問われているように思う。

私・たちが何度か言及してきた「生政治」とは、支配権力に従わなければ容赦なく殺害するか、そうでなければ「生きるがままに放任する」というのではなく、むしろ、人間の「生」に積極的に介入して、「生」の増進・管理・方向付けを行うような近代以降の権力のあり方を指している。しかし、イタリアの活動家・理論家のアントニオ・ネグリは、そうした「生政治」論に対する対抗的なニュアンスを込めて、「生政治」という言葉を使っている。ネグリの言う「生政治」では、人間の「生」を単に支配権力の「客体」として捉えるのではなく、誰にも所有されることがないまま、社会関係やコミュニケーションを生み出す人間の言語に象徴されるような、人間の「生」が「コモン(共)」を創造する力能や潜勢力を、私たちの「生」を分断・「資源化」する世界大の権力に対抗する主体や運動の根拠と捉えている。そのことをもう少し私・たちなりに言いなおせば、例えば、私たちの誰もが一人で生まれて育つということはありません、私たちの「死」さえも、単なる物理的な消滅ではなく、死を看取る他者の視線によって成立するものだという意味で、人間の「生・老・病・死」自体が不可避的に「コモン(共)」を孕まざるを得ないということを抵抗の原理とする、ということになるだろう。

私・たちは、「選挙フェス」のような既成の政治・社会システムへの拒否や直接民主的な意思を表現する人々の新たな集合性のもつ可能性を読み尽くすことに向けて、それを一つの「評議会」として捉えようとしてきた。ネグリの言うような「生政治」の視点からすれば、そうした「評議会」は、議会政治の領域だけに限らず、例えば、対行政交渉の経験や福祉・医療制度の利用に関わる情報の共有化、「生」の保障をめぐる共同の要求の創出等のために、私たちの「生」の再生産の領域でも切実に求められているように思う。

私・たちは、何度も「評議会」という言葉を使ってきたが、民衆の直接民主的な自治の形としての評議会がかつてどのように営まれていたのか、さらに、そうした民衆の自治の記憶が単に過去の一つのエピソードに留まらず、新たな社会を生み出そうとする原動力にもなるのだということを物語るネルソン・マンデラの言葉を最後に紹介したい。

何十年も前のことになりますが、わたしが育ったトランスカイ村で、部族の長老たちが、白人がやってくる前の古きよき時代のアフリカ社会の構成や組織についての話を聞かせてくれたものです。人びとは、王と“内なる者”の支配のもとで政府をつくり自由に暮らしていました。長老たちは、祖先が国を守るために戦った戦争の話や、叙事詩の時代の武勇伝も語ってくれました。

生産手段としての土地は部族全体に属しており、個人が所有することはありませんでした。人間はみんな自由で平等であることが、統治の基本でした。階級も、金持ちも貧乏人もなく、人間が人間を搾取することはありませんでした。

評議会は完全に民主的で、部族の全構成員が話し合いに参加することができました。首長と配下の者、戦士、祈祷師など、全員がこの評議会に加わり、その意志決定にかかわろうと努めました。評議会は、大きな影響力をもつ機関で、部族はこの機関を通さずに重大な決定を行うことはできませんでした。

このような社会には、原始的で不安定な部分も多く、現代の要求に応えられないことは確かでしょう。しかし、このような社会では、だれも奴隷や農奴の立場におかれることがなく、貧困、欠乏、不安定もなく、その点では革命的な民主主義の種子を宿しているともいえます。この歴史が、今日でも、わたしや仲間たちを鼓舞して政治闘争へと駆り立てているのです。

ネルソン・マンデラ「自由への長い道」下、P36-37(*7)

以上のように、私・たちは、「B感覚」や「評議会」をキーワードとして、三宅洋平の「選挙フェス」の可能性を読み尽くすことを試みてきた。そのように、「選挙フェス」という街頭での人々の新たな集合の形を創造して、国会を私たちの「生」に関わる重大な問題をめぐって「チャランケ」する場につくりかえることを呼びかけた彼の果敢な挑戦に敬意を払い、また、大いにそれに刺激されながら、私・たちも、今号の「FOCUS」で触れた「安倍のつくる未来はいらない！民衆連合」への動線を創り出すことに向けて力を尽くしたい。

〈註〉

1. 『アースガーデン』ブログ記事:「三宅洋平／選挙フェスの先にある、新しい時代の息吹 ■官邸前抗議からせんきょ CAMP へ、夏フェスから地域フェスへ、アースディから暮らしへ、そして“祭ゴト”のそのあとへ」(Posted By: 南兵衛@鈴木幸一 2013/07/17)

<http://www.earth-garden.jp/magazine/29897/>

2. 同上

3. 同上

4. 『NHK ON LINE』:「クローズアップ現代『検証“ネット選挙”』(2013年7月23日放送)」放送テキスト

http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail02_3383_1.html

5. 「アースガーデン」ブログ記事(Posted By: 南兵衛@鈴木幸一 2013/07/17)

6. 古市憲寿の「現代若者論」については、「絶望の国の幸福な若者たち」(2011年・講談社)、及び『CAREER ACADEMY 進学ナビ』ブログ記事「インタビュー連載:若者の未来 第18回・古市憲寿氏(社会学者)」参照

<http://daigaku.shingakunavi.jp/p/contents/parents/career/interview/interview18/index.html>

7. 田村雲供「ハンナ＝アーレント・身体・アフリカ 思考を穿(うが)つ身体」(同志社大学人文科学研究所『社会科学No. 83』所収)より孫引き



<http://www.earth-garden.jp/magazine/29897/>

V. 参院選後の三宅洋平—2013・8～2014・4

●参院選後の三宅洋平の動きを、ネット上の「情報」で追ってみる

2013/08/ 08	<p>「世界を平和にするために、深刻になる必要はないが、真剣になってほしい」 ～日本アーティスト有意識者会議(NAU)第7回放送</p> <hr/> <p>2013年8月8日(木)20時より、東京都渋谷区で「日本アーティスト有意識者会議(NAU)第7回放送」が行われた。7月の参議院議員選挙で、三宅洋平氏の選挙アドバイザーを務めた斎藤まさし氏をゲストに迎え、独自の選挙運動を振り返るとともに、3年後の参院選へ向けて、これからのビジョンを語り合った。</p> <p>■出演 三宅洋平氏(ミュージシャン)／岡本俊浩氏(ライター)</p> <p>■ゲスト 斎藤まさし氏(市民の党党首、三宅洋平選挙アドバイザー)／K DUB SHINE 氏 ／横川圭希氏／安部芳裕氏</p> <p>■曲 田我流／K DUB SHINE「今なら」／(仮)ALBATRUS「ジブシーソング」</p> <p>■主催 日本アーティスト有意識者会議(NAU)</p> <p>はじめに、今回の参院選で自身が獲得した17万票の意味について問われた三宅洋平氏は、「この選挙で、何かを共有した17万6970人のメッセンジャーである皆が、今後、お互いを知り合い、意見の差異を乗り越えて活動するためには、無形の集団を大事にするべきだと思う。しかし、情報社会は高度な伝言ゲームが要求される。選挙を通じて、個々人のメディアリテラシーや、情報咀嚼力を上げることが必要だと感じた」と述べた。</p> <p>三宅氏は、日本の選挙制度について、600万円という国際的に見ても高額な供託金の問題を指摘した上で、「完璧な選挙制度はあり得ず、今の時代に合った選挙制度を考えれば良いと思う。現在の日本の政治は、弱者や新規参入者を排除していくシステムの上に成り立っている。名も無き市民、お金のない市民が出馬できるように、多様な価値を社会に反映させるために、障壁はもっと低くした方が良くと思う」と話した。</p> <p>また、選挙を終えてからの、東京で取材を受けた日々や、選挙期間中に家を空けていたため、沖縄の自宅の畑がジャングル化したエピソードなどを語った。地元の人々の反応については、「得票率に関しては、沖縄が全国で一番高かった。沖縄の人々からは『引き続き頼むよ』というムードを感じている。3年後に選挙に出るときは、畑を維持できるような、選挙のために暮らしを犠牲にしない活動をしていく。選挙を通じて、国会議員の就労形態をホワイトにし</p>
----------------	---

ないといけない、とも思った」と述べた。

続いて、市民の党の党首であり、三宅氏の選挙アドバイザーとして活躍した斎藤まさし氏を交えて、今回の選挙について振り返った。三宅氏は「斎藤さんからは、『神奈川県選挙区から出れば、全国比例の 5 倍近く当選の確率が上がる』と言われ、直前まで悩んだ。だが、改憲や原発再稼働、環境問題に対して、意見を同じくする人たちを全国的に立ち上がらせるのが、今回の目的だったため、全国比例に決めた。斎藤さんを信用できたのは、最終的なジャッジを自分に任せてくれたから」と明かした。

斎藤氏は「洋平の選挙のために身体を動かしてくれた人たちが、把握できないくらいいる。誰が指図したわけでもないのに、見えないところで動いていた人の数と、その想いに助けられたことを、ぜひ伝えたい」と話した。それに関連して三宅氏は、「自分の生活を横に置いて、僕の選挙を手伝った人々に対して、工作だの、金が動いているだのと、一部の人が言っている。それは、選挙の当落よりも問題。皆の真心を馬鹿にする人が信じられない」と憤り、「自分の名前と顔を晒さない意見に、説得力はない。これは国際的にスタンダードな考え方だ。意見を表明して議論できる人が、今後、どれだけ現れるかが重要だ」と語った。

「世界から戦争、餓え、原発をなくすためには、世界の市民の合意形成が必要」と訴える三宅氏は、「楽しく、本気で、世界を平和にするというビジョンに沿って、深刻になる必要はないが、真剣になってほしい。今回の選挙を通じて、少なくとも 17 万 6970 人の市民が動き始めた。友だちや家族に接するのと同じ気持ちで、皆の幸せを目指して、国づくりをしていきたい」と述べ、最後にボランティアの人たちへ拍手を送り、一本締めで締めた

【 IWJ テキストスタッフ・富山／奥

松】

2013/09/
11

無名の新人が17万票を獲得、なぜ「選挙フェス」が成功したのか ～岩上安身による
三宅洋平氏インタビュー 「祭は命をかけるから燃えるんだとしみじみと感じている」

こう語るミュージシャンの三宅洋平氏は、先の参議院選挙で緑の党から立候補し、無名の新人でありながらも 17 万 6970 票を獲得。快挙に導いた「選挙フェス」という戦略は、大手メディアからも大きな注目を浴びることとなった。11 日、岩上安身がインタビューを行い、選挙戦を振り返りながら、三宅氏の今後について聞いた。

なぜ選挙区ではなく、比例だったのか

17 万という得票数を考えれば、選挙区で立候補していた場合、「三宅洋平議員」が誕生した可能性もある。事実、参院選で東京選挙区から出馬し、当選を果たした山本太郎議員と並んで神奈川県選挙区で戦うという案も出ていたという。

しかし三宅氏は、「勝ち負けはもちろん大事だが、首都圏の一つの現象として終わってしまうのは本意ではなかった。落選したとしても、全国の音楽シーンを支えてきたサポーターたちが政治に目覚めるという現象を起こしたかった」と全国比例にこだわった理由を説明した。

選挙に出るにあたり、「他の政党から声がかからなかったわけではない」と打ち明けた三宅氏は、山本議員とともに、反自民勢力が統一比例名簿を作り連携する必要性を訴えてきたが、大きな変化を受け入れられない既存政党に理解を示しつつも限界を感じ、しがらみのない緑の党を選んだ。三宅氏と同じく、脱原発、脱戦争経済を掲げる緑の党は、世界 90 ヶ国にネットワークを持つ。この点にも三宅氏は大きな可能性を感じたという。

選挙中、ライブ演奏と選挙演説を同時に行う「選挙フェス」を展開した三宅氏。この戦略が功を奏した背景には、それが今までになかった手法であったことはもちろんだが、三宅氏がステージ上で自らを晒し、本音を語り続けてきた点も大きい。三宅氏が広めたアイヌ語、「チャランケ」——「ストレート一本。自己検問をせず、自分が言えることを言うしかなかった。賛否両論が起きるだろうが、それを通して議論が深まればいいと思った」と、選挙中、三宅氏が広めた「チャランケ」（談判、論議の意）というアイヌ語に象徴されるように、民主主義の根底にあるのは話し合いであるという主張が、多くの聴衆の共感を得たのではないだろうか。

それだけではない。三宅氏は常に「みんなで国会に行こう」と呼びかけていた。組織も政治経験も持たない候補者の選挙戦には、一人一人がいかにか自発的に情報を拡散するメディアとなれるかが決め手となるからだ。選挙中、三宅氏を応援する「ツイキャス隊」が誕生し、全国の選挙フェスの模様がネット配信された。ビラ 25 万枚を配布、7 万枚の選挙ポスターを貼り切ったボランティアたちも三宅氏を支え続けた。

「(山本) 太郎君を一人にしちゃ駄目だと思って立候補した。いよいよ選挙前っていう時、『僕の人生はどうなるんだろう』と、さめざめと泣いたことがある。漠然とした恐れがあったが、それを僕は乗り越えた。だから、思い立った人がいたら応援したい。既存の政治枠では語れない候補者が一人くらい出れば、政治が明るく、柔らかいものに変質していくのではないかな」

国政や市政を目指す第 2、第 3 の「三宅洋平」が続くことを願う三宅氏は、3 年後の参院選に再び立候補することを表明している。(IWJ・ぎぎまき)

<http://iwj.co.jp/wj/open/archives/101098#more-101098>

歌手の加藤登紀子氏が参加「戦争という選択はできない」
～日本アーティスト有意識者会議 (NAU) 第 8 回放送 feat. せんきょ CAMP

「このままいくとあなた方の息子たちはある日、あのベトナム戦争のアメリカ兵のように死体になって帰ってくる」というオリバー・ストーン監督が来日した際のメッセージを、加藤登紀子さんは引き合いに出し、「もう男の子の孫がいて、生まれてしまっているけれど、次に孫が生まれるとして、もし男の子だったら絶対出生届を出さないから」と笑いながら話した。「とどのつまりはそういうこと。国と個人というものがどういう風にこれから契約をしていくのか。国というのは人々の税金によって成り立っている営みで、私達が雇っているんです」と提唱する。

「戦争をさせられた人は国を訴えるべき。だって人殺しをさせられたんですよ」とも語り、「そ

	<p>の人たちの経験をふまえて、人を殺すソルジャーにはなりたくないという意志を持ちましょう。戦争をさせられた人たちの分も含めて、そんな悲しい選択は絶対にできません」と訴えた。</p> <p style="text-align: right;">(IWJ・渡辺みさ)</p> <p>■ 出演 三宅洋平氏(ミュージシャン)／菊地崇氏(LJ 編集長)</p> <p>■ ゲスト 加藤登紀子氏(シンガーソングライター)／杉岡太樹氏(映画監督)</p> <p style="text-align: center;">(IWJ ・ 渡 辺 み さ)</p> <p style="text-align: center;">http://iwj.co.jp/wj/open/archives/101102#more-101102</p>
2013/09/23	<p>テレビ朝日「ニュースの深層」で津田大介(メディア・アクティビスト)と対談 「参院選で17万票を獲って、落選した男」</p>
2013/09/30	<p>三宅洋平、緑の党総会ですごいスピーチ。 デモってそんなことだったのだ。</p> <p>-----</p> <p>9/28～29日東京で緑の党の総会があった。</p> <p>29日に三宅洋平さんがスピーチをした。いろいろ注目発言があった。最後にデモの意味について、(津田大介さんから触発されたようですけど)面白い事、言ってます。ヨーロッパのデモは普段は大事にされていない民衆の力を見える形にして、為政者に示すものだという事。あんまり好き勝手な事やってると、どうなるかわからんよ、という恐れを思い出させるためのものだと。これはヨーロッパの歴史からみて、その通りだと思う。さてそれでは日本の権力者にとって、また民衆にとってデモとはいったい何なのか。歴史を踏まえてちゃんと考えてみたいテーマですね。</p> <p style="text-align: right;">ぼくと未来ネットワーク ブログより</p>
2013/09	<p>北海道の「羊蹄山・来道音(らいどおん)」という野外フェス</p>
2013/10/11	<p>【沖縄】山本太郎 反秘密保護法 全国街宣キャラバン第二弾～沖縄</p> <p>-----</p> <p>山本太郎・参議院議員の「全国街宣キャラバン第二弾」は、2013年10月11日(金)、沖縄・那覇へと渡った。7月の参院選でも協力しあった沖縄在住のミュージシャン・三宅洋平氏も参加し、特定秘密保護法(秘密保全法)の危険性を訴えた。</p> <p style="text-align: center;">http://iwj.co.jp/wj/open/archives/106025#more-106025</p>
2013/10/27	<p>【三宅洋平/cro-magnon/Senkawos 他】 earth garden“秋”のかわりに、ライブあり、ふるまい大鍋ありの“交流会”@27日代々木公園</p>

2013/10/
27

「僕らは忠実に法律に従おうとするが、時には僕らが、法律を従わせないといけない」

～三宅洋平トークイベント

「戦争や環境破壊で回り続けていく不毛な経済構造を、変えていきたい」――。

10月27日(日)、東京都千代田区の日本教育会館で、経産省前テントひろば応援団主催による三宅洋平トークイベントが行われた。三宅氏は、参議員選挙を終えて4ヶ月経過した現時点での想いを語り、次の選挙出馬へ向けての計画も話した。

- ・司会 木内みどり氏(俳優)
- ・あいさつ 鎌田慧氏(ルポライター、テントひろば応援団呼びかけ人) / ミサオ・レッドウルフ (Misao Redwolf) 氏(イラストレーター、テントひろば応援団呼びかけ人)
- ・トーク 三宅洋平氏(ミュージシャン、NAU 日本アーティスト有識者会議)
- ・経産省前テントひろばから
- ・主催 経産省前テントひろば応援団

◆テントは国によって撤去されるべきではない

はじめに、鎌田慧氏が「今回の集会は、国が経産省前テントひろばの立ち退きと敷地使用料を請求していることに対する抗議集会である」と説明した。鎌田氏は、福島第一原発事故が、経済産業省と東京電力が起こした事故である点を指摘し、「反原発運動を結集し、継続して活動していくひとつの象徴として、経産省前テントひろばでの活動がある」とした。

◆TPP や国防軍など、現在直面している問題の根っこ

三宅洋平氏は「TPP や国防軍などの問題の根っこに共通するのが、現在の政治や経済が、人々の幸福を願っていないことだ」と指摘した。また、政治的に良い発言をする人々が、政治の世界そのものには関わることを避けている状況に触れ、「僕自身、政治の世界には自分が呼吸できる空気がないと感じていた。しかし、政治の世界を避けては、社会は変えられないと思った。また、政治そのものを変えたいと思った」と、参議院選挙に出馬するまでの想いを語った。

続いて三宅氏は「個人でお酒を作ってはいけないという法律は、100年前に日露戦争の戦費調達のためにできたもの。僕らは、それに今でも縛られている」と例を挙げ、誰が、何のために、その法律を作ったのか、その経緯を意識することの重要性を語った。「僕たちは忠実に法律に従おうとするが、時には僕ら側が、法律を従わせないといけない場面があると思う。もっと、僕たちは、法律や政治を上から目線で見てもよいのではないか。ここはひとつ、皆、強気にならないといけないんじゃないか」。

また、「デモの本質は、異議申し立てであると同時に、楽しいものであった方がよい。政治を面白いピックにし、デモに参加する市民が、どう楽しむかを話し合っていきたい」とした。

【IWJテキストスタッフ・富山／奥松】

<http://iwj.co.jp/wj/open/archives/108616#more-108616>

<p>2013/11/20</p>	<p>『特定秘密保護法案に関するディスカッション』 平成の治安維持法＝特定秘密保護法について我々のとるべき認識と行動を探る</p> <hr/> <p>日時： 11月20日(水)午後6時半(開場午後6時) 場所： 文京区民センター 文京区本郷4丁目15-14 出演： 三宅洋平さん(ミュージシャン) 山本太郎さん(参議院議員、俳優) 島 昭宏さん(弁護士、ミュージシャン) 武井由起子さん(弁護士) 主催： 明日の自由を守る若手弁護士の会 http://www.asuno-jiyuu.com/</p> <p>「現代の治安維持法」「終わりの始まり法」「完全に奴隷にします法」——世紀の悪法が、国会で成立されようとしている。</p> <p>11月20日(水)、「明日の自由を守る若手弁護士の会」が主催して「特定秘密保護法フェス」と題するトークライブを開催した。山本太郎議員やミュージシャンの三宅洋平氏らが参加し、法案についての基調報告やディスカッションが行われた。会場では立ち見が出るほど多くの参加者が詰めかけ。この法案への市民の関心の高さがうかがえた。</p> <p>「その他の重要な情報」という名のブラックボックス——原発事故の原因は闇へ葬られるのか？フェスでは、元衆議院議員の川内博史氏も飛び入りで登壇し、原子力基本法に原子力は安全保障に資すると明記されていることから、「(こうした映像や証言は)秘密保護法では安全保障に関する情報として秘密指定される可能性が強い」と指摘。「原発事故の原因がきちんと解明されなければ新安全基準など定められるわけがない。この法案によりこういった情報も伝えることができなくなってしまう」と危機感を募らせた。(取材・記事:松井信篤、記事構成:佐々木隼也) http://iwj.co.jp/wj/open/archives/112472#more-112472</p>
<p>2013/11/21</p>	<p>「深刻になりすぎず、しかし真剣に、新しい国の創り方を探りたい」三宅洋平氏 ～日本アーティスト有意識者会議(NAU)第10回放送 「秘密保護法案を突き進める今の政府は、まさに違憲状態である」——。</p> <hr/> <p>2013年11月21日、三宅洋平氏を中心に、アーティストが政治を語る、日本アーティスト有意識者会議(NAU)第10回目の放送が行われた。ゲストに、山本太郎参議院議員、DJの沖野修也氏、ミュージシャンのDELI氏、ブロガーの座間宮ガレイ氏を迎え、秘密保護法案の問題点や、大デモ(12月7日)を開催するにあたっての三宅氏の想いが語られた。 出演 三宅洋平氏(ミュージシャン)、菊地崇氏(LJ編集長)</p>

ゲスト 山本太郎氏(参議院議員)、沖野修也氏(DJ 、クリエイティブ・ディレクター)、 DELI 氏(ミュージシャン)、座間宮ガレイ氏(ブロガー)

◆秘密保護法は、巧妙な言論統制のためのもの

はじめに成立ありきで、法案の是非についての議論が深められていない、特定秘密保護法について、三宅氏は「日米原子力協定も、日米地位協定も、リアルタイムで関わることができなかったが、今回はオンタイムで関与することができる。秘密保護法が、もし通ったとしても、その中でどのように関わっていくか考えないといけない」と述べた。

秘密保護法が通った場合、逮捕を覚悟した上で発言しなければならなくなる危険性を指摘した座間宮氏の話を受けて、三宅氏は「この法案の発端である、公務員による情報漏洩案件は、数えるほどしか存在しない。本当の目的は、市民が互いに口をつぐみ合う社会を作るためであり、これは巧妙な言論統制である。一番いいのは廃案だが、今国会で通らせないように、なんとかするしかない」と述べた。

◆日本版 NSC によって進む、官僚の利権拡大

日本版 NSC について、座間宮氏は「この機関の目的は、国内の情報をコントロールすること」と指摘した上で、官僚の利権拡大が進む危険性を危惧した。三宅氏は「このような法案を通そうとしている黒幕は、どこに存在するのか。たとえば、その黒幕がアメリカだとしたら、アメリカのどの財界なのか。そういったことを、日本国民は一般常識として理解しておかないと、国民は踊らされるだけになってしまう。そして、黒幕に対して国民世論を突き上げるような、レベルの高い国民にならないといけない」と語った。山本氏は「この法案は絶対つぶさないと、皆の身が危ない。この国が、僕たちのものでなくなる。秘密保護法を廃案に持つていくために、この1ヵ月間、集中していこう」と訴えかけた。

◆パワハラのような国会運営、指をくわえて見ているだけではダメ

続いて、12月7日に東京の代々木公園で開催される「大デモ」の告知を行った三宅氏は、このデモが、日本のデモ・カルチャーを見直す目的で企画されたことを説明した。その上で、「運動を続ける中で、続けることが目的になってはいけない。現状はかなり厳しいが、こんなパワハラのような国会が続けられていることを、指をくわえて見ているだけではいけない」と断じ、「不安に対する安心を担保できていない中で、この秘密保護法案を突き進める今の政府は、まさに違憲状態である。深刻なテーマがたくさんあるが、深刻になりすぎず、しかし、常に真剣に取り組みたい。このような状況を活かして、僕らは新しい国の創り方を探していきたい」と語った。

【IWJテキストスタッフ・富山／奥松】

<http://iwj.co.jp/wj/open/archives/112755#more-112755>

2013/11

残波JAM (サバニステージ)

音楽とアートと自然の融合——沖縄は読谷、残波岬で行われる

三宅洋平

僕が初めて沖縄を訪れたのは2006年頃、宜野湾海浜公園でのレゲエ祭だったように記憶している。バンド・犬式でここを訪れ、てんで空気の読めないライブをやった後に久高島へ行った。沖縄は、戦場の記憶と神秘の記憶が色濃く残る「巡礼の場所」だと感じた。むろん、わずか数日の滞在から見えてくるものは、ほんの一部に過ぎなかったのだが。

それから時は経って、2010年の暮れにソロツアーで久しぶりに沖縄を訪ねた。呼んでくれたのは、沖縄中部の要衝・読谷村の仲間たちだった。同年代に最年少村会議員が居て、彼の選挙を支えたクルーたち。

日本(沖縄では「内地」と呼ぶ)では既に広がりを見せつつあった、ローカルフェスティバル文化とそれを彩る、これまでのメジャー/インディーの何処にもジャンル分けできないクラブ寄りのバンドシーンを沖縄にも紹介しようというハナシが盛り上がり、村内で大きなイベントをやるためには村議会議員さんも動いてくれる事になった。「残波ビーチでフェスをやろう」。ビーチの男たちものってくれた。僕は、東京で10年以上展開していた「徹頭徹尾」「nbsa + × ÷」といったパーティ作りの情熱を、ここで新たに込めようとしていた。

そして2011年3月。東日本大震災が起きた。関東一円を襲った放射能プルームから逃れた僕は、取るモノも取りあえず娘を連れて沖縄へやってくる。最初に世話になったのも、読谷の仲間たちだった。北部の本部町への定住を定めた後、「それで、今年この状況で残波 JAM はやるのか」という問いかけに、迷い無くウンと答えた気がする。というか仲間たちはもう動き出していた。手作りフェスの切り出しは、秋の浜風にステージ位置の変更を余儀なくされつつ、素晴らしい出演者とスタッフたちは伝説的な1日を築く事に成功した。

翌2012年、UA や喜納昌吉チャンプルーズを招いて2日間の開催となった残波 JAM は県外からの来場も多く、何か新しい溶け合いが起きている事を証明した。

2013年、主宰の一人である僕が参議院選挙に出て騒がせてしまったせいで、残波 JAM は「政治」の色眼鏡で観られる事になっているのかもしれない。確かに、全国でも一番の得票率を得た沖縄での選挙運動において、このパーティのオーガナイゼーションは一役買ったと思うし、日頃から内外のポリティカルな音楽表現に触れてきたスタッフも多い。だが、僕らが云いたいのは「政治もパーティも人の営みとして宿る深部は、同じである」事であつたり「僕らの世代は自分たちの感性で政治参加していこう」という決意であつたりする。原発が爆発しても未だ、大量生産・大量消費の環境破壊ループから逃れられない政治・経済のあり方を前に、少年感覚を忘れぬ「遊び心」ある大人たちが積極的に参加して、剛と柔が溶け合った時代を引き寄せねばなるまい。ましてや、防衛問題の最前線である沖縄から、国内や世界へ発信できる事は多い。

意見はそれぞれトコトン自由だ。その違いを認めて成立するために政治があるんだ。つまらなくて、無関心だった政治の世界を、僕らの色にちょっと染めさせてもらえたら、面白くて愉しいものに変換できるかもしれない。僕らがストリートで気づかずにずっとやってきた事は実は

	<p>「マツリゴト」だったのかもしれない。</p> <p>「マツリゴト」の本質を問う今年の残波 JAM のキャッチフレーズは、喜納昌吉さんがライブで良く口にする「天と地の交わる場所にマツリが生まれる」にさせていただいた。「神」や「魂」と人が呼んできた崇高な世界(天)と、人間の生活と現実が織りなす(地)の世界が出逢い、「光と闇」「夢と現実」の交わる時間・空間で、あらゆる人々、精霊、神々、そして大地や空と遊び、ある種の「生まれなおし」を経て、皆さんが自分たちの暮らしへ活き活きと帰っていくマツリとなるように願っています。</p> <p style="text-align: right;">残波岬の先で、人類。</p>
2013/11/29	<p>大デモプレイベント ちだいさんと放射能測定会(大デモのコースを放射能測定)</p> <hr/> <p>『三宅洋平の言葉』ブルーロータスパブリッシング(インプレス)から発売</p> <hr/> <p>選挙期間の演説やネット上の発言を中心に、ここ二年の言葉を選んだ語録</p>
2013/12/01	<p>NO NUKES えひめ～福島を忘れない！伊方を稼働させない！</p> <hr/> <p>2013年12月1日(日)10時より、愛媛県松山市堀之内の城山公園やすらぎ広場で「12.1 NO NUKES えひめ～福島を忘れない！伊方を稼働させない！」が行われた。原子力規制委員会による新規制基準審査の進む四国電力・伊方原発を再び稼働させてはならないと、広瀬隆氏、鎌田慧氏、ミサオ・レッドウルフ氏、山本太郎議員、三宅洋平氏などがトークや演奏を繰り広げ、地元だけでなく全国から多くの参加者が駆けつけた。</p> <p>■主催 伊方原発をとめる会</p> <p>■告知 福島を忘れない！再稼働させない！NO NUKES えひめ</p> <p style="text-align: center;">http://iwj.co.jp/wj/open/archives/114296#more-114296</p>
2013/12/04	<p>Pound For Pound Vol.3収録の2年振りの新曲“DEMO”をiTunes Storeにてシングルカット!!</p>
2013/12/07	<p>音楽のチカラが通行人をデモ参加者へ 三宅洋平氏の呼びかけで「大デモ」開催～テーマに拘らない「楽しい」デモ模索</p> <hr/> <p>6日に多くの人々が国会前で反対する中、強行採決された特定秘密保護法、公約を破り「聖域」(重要農産品の関税)まで差し出し、米国への譲歩を進める TPP など、「多くの市民の声を無視する国のあり方」に対してミュージシャンの三宅洋平氏が意志表示を呼びかけた「大デモ」が12月7日(土)、代々木公園を中心に行われた。</p> <p>集会で登壇した元農林水産大臣の山田正彦氏は TPP について、今年の9月から米国</p>

の国会議員が交渉テキストにアクセスできるようになったことで、急激に反対意見が増えている状況を紹介。「大統領に交渉権限を与える TPA 法案は絶対通らない。それができなければ TPP は批准できない。マレーシアは与党も野党も反対。マレーシアの TPP 主席交渉官は国会議員には明らかにすると言いだめた。そうすると TPP 秘密交渉の内容も明らかになっていく。闘いはこれからだ」と参加者にエールを送った。

孫崎享氏「TPP は日本の主権を売り渡す」

元外交官である孫崎享氏も登壇し、「安倍首相ほどひどい政治家はいない。TPP で日本を売り渡し、日本の主権がなくなる。世界中が国民の主権の為に情報を与えるように動いているのに、日本は世界に逆行している。近隣諸国と意識的に緊張を高めようとしている」と警鐘を鳴らした。

晴天の土曜日がよく似合うデモ

三宅氏が、「『世の中分かってないよ。全然、俺の言ってること分かってくれないよ』じゃなくて、どうやったら伝わるか、という工夫をみんながすれば文化度も上がる」と参加者に呼びかけ、大デモがスタートした。

デモは多種多様な音楽に彩られ、マルチイシューで思い思いのアピールで渋谷や原宿を踊り歩いた。通常のデモと違い、賑やかで楽しい雰囲気にも包まれた行進に、沿道にいた通行人がそのまま参加する場面が多くあった。(IWJ・松井信篤)

•11:00 ~ 12:30 集会

司会 三宅洋平氏(音楽家、日本アーティスト有意識者会議 N.A.U 代表)

安部芳裕氏(作家、プロジェクト 99%代表) / 山田正彦氏(元農林水産大臣) / 座間宮ガレイ氏(ブロガー) / 孫崎享氏(元外務省国際情報局局長、元防衛大学校教授) / K-Dub Shine 氏・難波章浩氏・三宅洋平氏 / 山本太郎氏(参議院議員)

•12:10 ~ 15:00 大デモ 送り出し TEX & Sun Flower Seed

代々木公園 → 渋谷 → 原宿 → 代々木公園

第 1 梯団・太陽(オフィシャルサウンドカー) / 第 2 梯団・大地(ジャンベ隊・Nora Brigade) / 第 3 梯団・星(レゲエバンドサウンドカー) / 第 4 梯団・魂(愛と反逆のレベルロッカー梯団) / 第 5 梯団・舞踏(DJ サウンドカー) / 第 6 梯団・花とこども(LOVE デモ+イマジン湘南&イマジン鎌倉 with キッズ) / 第 7 梯団・緑(緑の党など) / 第 8 梯団・フリー&お散歩

◦日時 2013 年 12 月 7 日(土) 11:00 ~

◦告知 大デモ

<http://iwj.co.jp/wj/open/archives/115434>

2013/12/

反TPP 大デモ DAY2 日比谷(日比谷野音にて集会・ライブあり)

1. 主催:「これでいいのか?! TPP 12.8 大行動」実行委員会

呼びかけ団体:・ TPP に反対する弁護士ネットワーク

- ・ TPP 参加交渉からの即時脱退を求める大学教員の会
- ・主婦連合会

ほか多くの賛同団体で構成されます

2. 日時:2013年12月8日(日)13時~16時

4. 本「大行動」の趣旨

TPP交渉の現状は秘密交渉のまま、国会決議も自民党の決議も守られないままに年内合意・妥結があり得る状況にあります。したがって、そもそもTPP交渉からは即時脱退すべきと考えている人々・団体も、国会等の決議を守らせるためなお運動強化をと考えている人々・団体も、あるいは、TPPはよく分からないが、秘密交渉のまま何らかの合意をするのはおかしいと考えている人々・団体も集まれる、「秘密交渉のまま、国会決議が守られないTPP交渉妥結なんてとんでもない」の思いを集めて、この集会・デモ行進は行われます。

日比谷で開かれた「これでいいのか?! TPP 12.8大行動」。およそ 2500 人の参加(主催者発表)の下、開かれました。各地から TPP 反対の市民が集まりました。

2013/12/
15

Organic Groove~Our True Calling~ feat. Antibalas

2013/12/
19

「国を愛せというが、国民を愛しているのか」学校給食の内部被曝を考える会に参加

うるとらサポーターズの給食委員会主催で 19 日、参議院会館において、「第二回内部被曝を考える会」が開かれ、ミュージシャンの三宅洋平氏やチェルノブイリのかげはし代表、野呂美加氏らが参加。学校給食に焦点をあて、子どもたちを被曝から防護するための取り組みについて話した。

学校給食の食材測定の実態を追っている、うるとらサポーターズ給食委員会は冒頭、自治体によって測定の方法や頻度が異なることを報告。大半の私立学校や無認可保育園は測定さえ行っておらず、子どもたちが平等に守られてない現状を今後改善できるよう、各地域の取り組みを共有しながら国や行政に働きかけていきたいと呼びかけた。

- ・主催 うるとらサポーターズ(山本太郎後援会)給食委員会
- ・告知 第二回 内部被曝を考える会 給食編

ベラルーシでは、事故対策は国の責任と明言し、1/4 の国費を事故対策にあててきた。チ

エルノブイリ原発事故後、被災した子どもたちの保養活動を行ってきた野呂美加氏は、ベラルーシ政府の政策を紹介しながら、「日本は事故責任の所在もあいまいな上、『復興』を目的に掲げ、被災地に住民を戻そうとしている。安部総理は愛国心を持ってといった。では、国は国民を愛してくれているのか」と、国民を守ろうとしない政府を痛烈に批判した。

野呂氏は政府への働きかけと同時に、「私たちが助けようと思うかどうか」とも話し、市民レベルで被災者や原発労働者、除染作業員をどう守っていけるのかを問うべきだと問題提起した。(IWJ・ぎぎまき)

三宅洋平氏、「常に忘却との闘いだ」(詳細は会員限定記事)

<http://iwj.co.jp/wj/open/archives/117117>

「僕らはつながることを、どんどんやっていけばいい」 三宅洋平氏 ~日本アーティスト
有意識者会議(NAU)「この30年で、世界は一番残酷で野蛮になっていると思う」――。

19日、目黒区のカフェ「Cherir cabre (シェリール カブレ)」にて、日本アーティスト有意識者会議(略称 NAU)第11回が、公開生放送で行われた。代表の三宅洋平氏と進行役の岡本俊浩氏に、ラッパーのDELI氏、音楽家の椎名純平氏、ブロガーの座間宮ガレイ氏という多彩なゲスト陣に加え、三宅氏の「選挙フェス」を裏から支えた、市民の党党首の斎藤まさし氏を迎えて、2013年最後の放送を行った。

三宅氏は『原発爆発しても、まだ方向転換しないのか、この社会はっ!』という時に、どれをやったら一番社会が変わるのか考えると、『立候補』というアクションが一番大きいアクションだった。切羽詰まったところであって、通例の政治家になろうという概念ではなかった」と答えた。

続けて、椎名氏は「たとえば、Twitterでフォローしている人も、『なるほど、友だちのミュージシャンが選挙に出たりするんだ』ということを感じただろう。この自然な動きの中で、17万票も取れたことがすごいことだし、危機感が結実して、捨てたものではないと思った。いいものをいっぱいもらった選挙戦だった」と振り返った。

国家による支配を牽制するために

「市民がネットを通じて、国際的にネットワークを形成することが、国家単位の支配にとっては邪魔なことである。だから、僕らはつながることを、どんどんやっていけばいい。特に、東アジア地域の韓国、中国、日本、台湾の若者たちが、文化によって強烈につながりあうことは、戦争の抑止力になる」との見解を示した。

特定秘密保護法案は「憲法の蹂躪」

斎藤氏は、特定秘密保護法案の強行採決は、安倍総理によるクーデターだとして、「総理大臣が独裁することは難しいが、安倍総理はやろうとしている。内閣法制局長官を切ったとこ

	<p>ろから、『独裁したい』というサインが出ていた。長官の首を切るところまでは、総理の権限である。しかし、今回の特定秘密保護法案に関していうと、誰が見ても、今の憲法とは相容れない。憲法無視、基本的人権無視である。これをクーデター以外の何であると言うのか」と憤った。</p> <p>斎藤氏は続けて、「これは間違いなく、今の憲法体制の転覆である。しかし、彼らは自信がないと思う。なぜなら、明文改憲できないという自覚があるのだ。自分たちは少数であり、これに共感する国民はいないとわかっている。だから、クーデターは始まったが、絶対に私たちは負けない。私たちにはいっぱい材料があり、名護市長選、都知事選もある。そして、3年以内にひっくり返さなければならない」と訴えた。 【IWJテキストスタッフ・花山／奥松】 http://iwj.co.jp/wj/open/archives/117305</p>
2014/01/06	<p>【名護市長選挙】『picnic』発刊メンバーを中心とした有志で、多くの一般市民に選挙の論点が伝わるようにとの思いから、10個の質問を作成して両候補に提出</p> <p>-----</p> <p>僕は基地の辺野古移設には経済・環境の両面から言って反対の立場ですが、一方でもっと差し迫った地元の利益を確保する視点で、決して戦争には賛成しないが、基地による経済も直ぐには度外視できない沖縄のジレンマがあります。名護市長選には、沖縄からみた日本の問題点が詰まっています。両候補とも解決したいという思いは同じですが、歩み方が違います。そこを、冷静に判断しなければなりません。投票して結果が出た後も、見守り意見し続けていくためにも、この選挙という機会を最大に活かしてほしいのです。</p> <p>僕は名護市民ではないので、一票を投じる資格がなく、名護市長選挙はとなりの本部町から盛り上げる事しかできませんが、今はどちらの候補を推したい！という意見のほうよりも(僕の意見は云わずもがな、だとも思いますし)本当に両候補の抱えるリアリティ、そこから見えてくる名護市の将来への希望のあり方。そこがしっかりと、認識され熟慮された上での投票であって欲しいという事を願っています。 http://www.doucatty.com/senkyo_web.pdf</p>
2014/01/11	<p>【名護市長選挙】「クオリティの高い選挙」「クオリティの高い投票」を求めて両候補への質問状とその回答から投票を促すビラを作って名護市内に配布した</p>
2014/01/20	<p>【100万人の無料メルマガプロジェクト×ANTA MEDIA】 2014'都知事候補 宇都宮けんじさんに独占インタビュー : 三宅洋平・座間宮ガレイ</p>
2014/01/24	<p>発刊！「選挙フェス」17万人を動かした新しい選挙のかたち(星海社)三宅洋平 岡本俊浩</p>
2014/02/	<p>「どうなってるの？東京都知事選」～日本アーティスト有意識者会議(NAU)第13回放送</p>

06	<p>特集 東京都知事選2014</p> <hr/> <p>2月6日(木) 21時より、東京都目黒区のCHUM APARTMENTで、日本アーティスト有意識者会議(NAU)第13回目の放送が行われた。「どうなってるの? 東京都知事選」をテーマに、三宅洋平氏、岡本俊浩氏、ブロガーの座間宮ガレイ氏・ちだい氏、ラッパーのK DUB SHINE氏、IWJの岩上安身らが参加した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出演 三宅洋平氏((仮) ALBATRUS)、岡本俊浩氏(ライター)、木内みどり氏(女優)、座間宮ガレイ氏(ブロガー・100万人の無料メルマガ)、ちだい氏(ブロガー・チダイズム)、K DUB SHINE氏(ラッパー)、DELI氏(ラッパー)、岩上安身(IWJ) ・日時 2014年2月6日(木) 21:00～ ・場所 CHUM APARTMENT(東京都目黒区) ・詳細 Miyake Yohei Official Blog 三宅日記 http://iwj.co.jp/wj/open/archives/123911
2014/02/08	<p>『「選挙フェス」17万人を動かした新しい選挙のかたち』(星海社)刊行記念 三宅洋平 × 津田大介 トークイベント 「次に政治を動かすものは何か」</p> <hr/> <p>三宅洋平 湯川れい子が、細川もりひろ氏の応援演説</p>
2014/03/08	<p>【山口】「今、福島で起きているのは『海殺し』だ」 ～上関原発建設反対集会 鎌田慧氏 アーサー・ビナード氏ほか</p> <hr/> <p>「高濃度汚染水が垂れ流されているのに、政府は再稼働を企てる。細川氏、鳩山氏、菅氏、小泉氏、4名の元首相が原発反対を訴えている。こんな国は他にない。再稼働は絶対に止める」――。</p> <p>2014年3月8日、山口県山口市の維新百年記念公園にて、「上関原発を建てさせない山口県民大集会」が行われた。集会は午前と午後の2部に分け、1部では、主催者、鎌田慧氏、アーサー・ビナード氏、福島からの被災者の方、連帯する市民運動の人々、祝島で反対運動をする人々からのスピーチと集会宣言採択を行った。2部はライブコンサートで集会を盛り上げた。</p> <p>http://iwj.co.jp/wj/open/archives/128432</p>
2014/03/09	<p>坂本龍一氏 × 後藤正文氏 × 三宅洋平氏 トーク (日比谷公園)</p> <p>『311東日本大震災 市民のつどい Peace On Earth』特設ソーラーステージ</p> <hr/> <p>【文化】NAU(日本アーティスト有意識者会議)第14回 放送</p>

三宅洋平氏 加藤登紀子氏 難波章浩氏ほか

3月9日(日)、東京都渋谷区の風土カフェ&バー「山羊に、聞く?」で、日本アーティスト有識者会議(NAU)第14回が、今回も公開生放送で行われた。

第一部では、代表の三宅洋平氏と進行役の岡本俊浩氏に、昼間行われた「3.11 東日本大震災 市民のつどい Peace On Earth」に出演していた加藤登紀子氏が急遽参加、人間本来のあり方や生活などについて語り合った。

日本の食料生産を支えた東北が震災に遭ったため、農業人口が激減しているという加藤氏は、「先進国と言って、命につながる産業自体がこんなに虐げられ、誰も土を触っていないという社会は世界でも類い稀」と懸念を示した。

第二部では、難波章浩氏(HI-STANDARD/NAMBA69)も加わり、前回の都知事選や原発について意見を交わした。

「以前より絶対、政治に関心を持ったり、原発を意識するようになった若者が増えているのは間違いないと思う。今自分が出来ること、音楽を通して、せめて僕の音楽が好きで関心を持ってくれる人には僕のメッセージを伝えることが出来る」。3.11の前にもっと積極的にやっていたらよかったと難波氏は語った。

続いて第三部では、DELI氏、K DUB SHINE氏、沖野修也氏がゲスト出演。音楽を通じて政治や社会にコミットしているゲストらに対し、岡本氏がどうやったらもっと若者が政治にカジュアルに参加できるかなど、問題提起をしながら話を進めた。(IWJ・渡辺みさ)

• 出演 三宅洋平氏／加藤登紀子氏／沖野修也氏／難波章浩氏／K DUB SHINE氏／DELI氏／座間宮ガレイ氏

• 進行 岡本俊浩氏(ライター)

◦ 日時 2014年3月9日(日) 20:00～22:30

◦ 場所 風土カフェバー「山羊に、聞く?」(東京都渋谷区代官山)

◦ 告知 NAU(日本アーティスト有識者会議)第14回 放送

<http://iwj.co.jp/wj/open/archives/128573>

2014/03/
21～23

近所の浜で塩炊きCAMP。地球の時間を身体に刻み、塩という根源的な恵みを得る喜びを音楽や語らいと共に海に奉納するキャンプイン

2014/03/
29

OK? Tropical Ghetto …episode12 Day2@LOVEBALL

2014/04/
13

松本「ゆかり祭 ～日本の文化を先人に学ぶ会～ 日本の伝承文化”農”について」
澁澤寿一氏による基調講演あり

	<LIVE>三宅洋平、犬式のギタリスト三根星太郎、山仁、ゆくりりっく、ほか
2014/04/19	13:00～「選挙フェス 鹿児島」出演:三宅洋平・山本太郎・ありかわ美子・広瀬隆・木内みどり・星川淳・ほーちゃん・さとぼん・TADA・鹿児島うるまエイサー・土岐宏大 19:00～トークイベント 争う社会からの脱却～あらためて考える民主主義のあり方～ 出演:星川淳、三宅洋平
2014/04/20	アースディ奄美2014 ----- 9:00 ～ 17:00 場所:奄美文化センター1万人広場 出演:喜納昌吉、三宅洋平 w/さとぼん、ありかわ美子、山本太郎、 and more 20:30 ～ ありかわ美子に会いに来て！！★ The Party ★山本太郎・三宅洋平 場所 : ありかわ美子奄美事務所

以上参院選後の三宅洋平の動きを追ってみた。

三宅がきわめて真摯に3年後を見据えて動いていることが、よくわかる。ただ目につくのは、三宅が関わりをもっているのが、同じ波長の人々であるということだ。「緑の党」に属しているというのなら、ドイツでの先例は言うまでもなく、日本のそれに属して居る人の経験も、踏まえることが必要だろう。仮に三宅の目に、この列島の社会運動や政治への挑戦がどんなに弱く、か細いものに見えようと、あらためて言うまでもなく、その経験をまたぎ越すことはできない。とりわけ、3・11前後に世界各地で展開された「オキュパイ」運動は、新たな「闘争のサイクル」を拓いたのであり、その経験と向き合うことが、三宅には大事なことだと思われる。

私・たちもそのような関心から、三宅の動き・「三宅洋平現象」をたどってみたのである。

豊かな感性でしたたかな「確信犯」である三宅の今後に注目し続けたい。



<http://www.toziba.net/2013/09/16/>

遠方からの風信

*I WOULD NOT PREFER TO LIVE IN
SUCH A CRUEL WORLD, BUT TO
BECOME <THE NOT-YET-BEING>*

風の吹く丘で手を振りあう人々への物語

by ゆみっぺ

The Band の The Weight を聴きながらこれを書いています。とても好きなバンドです。音楽評論家・松村洋氏は 1988 年に出版された著書「8 ビート・シティ」の中でこのバンドとこの曲に触れながらこんなことを書いています。少し長いけれどここに引用してみます。

「(前略) 普遍的真理という〈大きな物語〉が崩れ去ってしまったこの時代に、私たちは個人的な〈小さな物語〉をそれぞれに織りあげてゆくしかないということだ。〈豊かさ〉という物語。〈自由〉という物語。〈デモクラシー〉という物語。〈平和〉という物語。〈核戦争〉という物語。〈ヒューマニズム〉という物語。〈愛〉という物語。出来合いの物語を何ひとつ信じられないというのなら、ただもう自前の物語を書き綴ってゆくしかない。それは個性的な物語だが、あの〈独創性ゲーム〉とはなんの関係もない。独創的な人は素晴らしいとか、オリジナリティのある人はお金もうけができるとか、そんなことはどうでもいい。ただそれぞれに優劣なく〈私の物語〉というだけのことだ。」

私は、生まれてこのかた「政治」とか、「社会問題」とか、そういうものに全く無関心だったのだけれど、たまたま友人に誘われたことを入口に、「運動」というものに参加し始めて、そしてすぐに東日本大震災が起こりました。ずっと運動に関わってきた方—たとえば「生・労働・運動ネット・富山」の方々—からしたらあまりにも遅いスタートですが、とにかく、自分の、のんきで便利な楽しいこの毎日のくらしは、実は誰かを踏みつけにした上に成り立っていたのだと知ります。そしてそこをつきつめてよく見ていけば、自分もまた何らかの力に踏みつけられてるのだという事実。良くも悪くもいろんなことがひっくり返って、あらわになって、自分の理解の範囲を超えたことばかりが見えてきた。もはや、ひとりひとりが今までの自分に別れを告げて、大きく変化していくしかない時代になったんだと思う。いよいよ。

私は、もうこれ以上誰かを踏みつけにしたくないし、されたくもない。そして実はそういう「立場」を「とらされている」とも言えると思うけど、そのことにきちんと NO と言いたい。私は、変わることを恐れずに、自由な気持ちで自分や世界の変化を受け入れたい。その思いは「運動」に参加するなかでよりはっきりと見えてきたことでもあります。これは、そんな私の、今に至る、とても個人的な経験の〈小さな物語〉です。

私は、仕事のために上京して、20代は本当に働きづめで、猛烈に仕事ばかりしていました。わけもわからず「早く一人前になりたい」という思いがものすごく強かったです。が、その反動か、プライベートは音楽漬けで、週末はライブハウスで朝まで遊ぶのが常。パンクやロックのライブに行っては汗だくになってダイブ & モッシュ。パンクやロックの音楽は、もちろん社会のおかしさを歌っていることが多いので、社会や組織に対するいらだち・無駄に有り余るエネルギーを発散しまくっていたと思います。でも私にとっての「いらだつ社会」というのは、自分のまわりのものすごく狭い世界だけで、せいぜい職場の上下関係とか、残業ばっかりの勤務体制くらい。TVは見ないし、新聞も読まない。当時はネットニュースすら見なかったので、世間で何が起きているのか、政治がどう動いているのかなんて全く知らない。「社会問題」、「政治」なんてものに、一切リアリティを感じる事ができなかつたし、よもや自分の日々のくらしがそこへつながっているなんて想像もできず。言うなれば芸能界みたいに、遠い夢の世界でした。

そんなある日、突然友人に「デモに行こう」と誘われて。私はなんにも知らず、軽い気持ちでライブに行くのと同じノリで行きました。生まれて初めてのデモは、「沖縄を踏みにじるな！緊急アクション実行委員会」が主催する「新宿ど真ん中デモ」。実は、デモの目的や趣旨なんか全く理解してなくて、「夜の歌舞伎町を練り歩く」ということが単純に「楽しそう！」と思っただけなんです。これがまた本当に楽しくて！たぶんサウンドカーも出てたんじゃないかと思うけど、歌舞伎町というまさに新宿のど真ん中を大音量の音楽を鳴らしながら大勢で踊ったり叫んだりしながら歩いて行った。ピンクのビキニを着たお姉さん(もといお兄さん)と一緒に歩いてたし、沿道には黒服のお兄さんやドレス姿のお姉さんたちがたくさんいて、拍手したり手を振ってくれたりしていました。爆音で音楽を鳴らして踊るというのはいつもライブハウスで楽しんでたことだけど、「こんなふうな街のなかで自由にやれるんだ！なんて開放感！」って、この夜私はほんとうに興奮しっぱなしだった。地下(ライブハウスは地下にあることが多い)にもぐって、そこに集まったごく一部の人たちだけで盛り上がるんじゃないかと、こんな風に街に飛び出して、みんなで一緒におおっぴらにやっていたってことへの衝撃。

ここで「デモは楽しいもの」と強烈にインプットされたので、その後は、たまたまもらった職場の労働組合のチラシに「デモ」という言葉を見つけ、「おお！」と再び興奮。2010年

5月、沖縄での県民大会と平和ウォーク、普天間基地を包囲する人間の鎖に連れて行ってもらふことに。この沖縄でのデモ(平和ウォーク)は、全国各地の労働組合の人たちなどと一緒にものすごい人数で歩きました。強烈な大雨の中、嘉手納基地のすぐ横の58号線を歩いていたんですが、どこまで行っても延々と基地のフェンスが続く。こんな普通の街のど真ん中に、巨大すぎる米軍基地がどっかりとある、そのことを私は恥ずかしながら今の今まで知らなくて。沖縄(八重山諸島)に遊びに行ったことがあったにも関わらず。もうなんだか頭がぼうっとなりました。

と、その瞬間、この世のものとは思えない、もの凄い轟音がして。聞けば、「軍用ジェット機のエンジンの空ぶかし」ということだったけれど、エンジン音だけじゃない。強烈な地鳴り・地響き！道路と基地の間にはフェンスがあり、さらに木が隙間なくみっしりと植えられていて、基地の中をうかがい知ることはできない。姿が一切見えないのに、強烈な轟音と地鳴りが延々と続き、とうとう私はその場に座り込んでしまいました。

私は、阪神淡路大震災を体験しています。あの朝、真っ暗な部屋の中で、遠くのほうから徐々に近づいてくる、ゴーーーーッという重低音の地鳴りを聞いた。その直後に突き上げるような縦揺れでベッドから跳ね上げられて、完全に腰を抜かしてしまったのだけれど、見えないまま遠くから地鳴りが近づいてくるあの恐怖体験が、この時そのまま蘇った。「これはありえへん」。ただはつきりそう思って。沖縄の人たちは「騒音」なんていう言葉ではとても表現できないこの轟音と、大地震のようなあの地鳴り・地響きの恐怖感に日々さらされ続けているのか、と。病気の人も、高齢者も、赤ちゃんや妊婦さんなども、みんなこの環境の中で日常を強いられているのか(それを強いているのは、実は「私・たち」でもあると知るのはまだずいぶん先のこと・・・)、と。このとき初めて、私の中で「基地はあかん」ということが、はっきりと、理屈じゃなく自分の体を通りぬけた本当の思いとして、ストンと落ちたんだと思います。今まで「楽しそうだから」というだけでなんとなくデモに参加していた私が、腹の底から「このことちゃんと考えなあかん」と。

沖縄から帰ってきて、「これはいちから勉強せんと」と思って、勉強会とか集会というものにちょこちょこ行くようになりました。同じく「沖縄を踏みにじるな！緊急アクション実行委員会」の人たちがやっていた「アルタ前大学」というものにも行きました。これは、新宿のアルタ前広場で路上ティーチインをやるというもの。びっくりしたのは、「勉強会」や「集会」という場では自分の親世代くらいの人、その中でも特に男性が多かったのに対し、ここには自分と同じか、もっと下の世代の人や女性も多く参加していたこと。そして、みんなゲストスピーカーへ積極的に質問したり、自分の意見を堂々と発表したりして。いつもライブハウスへ行くときに足早に通り過ぎていた新宿駅東口のアルタ前広場。そこに、今自分がこんなふうに座り込んで「沖縄」の話、「米軍基地」の話を聞いていることが不思議だったし、自分と同世代の人たちがずっと前からこうして問題意識をもって・考えて・行動していた頃、私は本当になんにも知らないで、いつでも自分のことばかりで、あまりにもものんきに遊びほ

うけていたんだなあ・・・と思いました。自分のしょうもなさにはショックを受けたような、でも、その人たちのまぶしさにほんのり心躍るような・・・。なんとも複雑な気持ちでぼうっと人ごみをながめていた、あの新宿の夕暮れをよく覚えています。

そしてもうひとつ。

おなじみ新宿ど真ん中デモ。このときは歌舞伎町界限ではなく、神楽坂周辺コース。神楽坂という場所に加え、季節もあってか、確か「浴衣で参加しよう！」なんていう感じの呼びかけがありました。何人かの参加者やスタッフは、浴衣や着物を着ていたし、足元だけ下駄や草履の人もいて。そんなのんびりとしたゆるい雰囲気デモ隊に対して警察は、いつものことだけど、尋常じゃない過剰警備。長いバナーや参加者が持っているプラカードに何が書いてあるか見ることもできないほど警察官がびっしりと立ち並び、もはや警察官も一緒にデモしている感じに。私は1人だったので、列の後ろのほうにくっついてちんまりと歩いていたのですが、途中、いろんな人がかわるがわる話しかけてきてくれて。「沖縄からたまたま東京に来ているので参加した」という人は、自分の履いているビーチサンダルを指さして「これ沖縄でなんて言うか知ってる？島ぞうり！」とすごく楽しそうに笑いながら教えてくれたっけ！

そして神楽坂にさしかかった時。よく晴れた夏の夕暮れで、街のビル群も、空も、雲も、オレンジ色の透明な光に満たされてきらきらして。沿道の人々は笑顔で手を振ってくれて、参加者もそれに応えて互いに手を振り合っている。みんなの笑顔がぴかぴかして、目に見えるもの全部がほんとうにきれいに光っていて。お腹の底のほうからきれいな泉みたいなものがどどんわいてきて、坂の上へ続く空の向こうまで歩いて行けそうな、そんな気持ちになった。

自分が「これっておかしくない？」と漠然と思っていることをそのままことばにしてみる、街を歩いてみる、まわりの人に呼びかけてみる、そしてそれに応えてくれる人がいる。エネルギーの渡し合い。その化学反応。そうして見なれた街の風景が変わっていく・・・。オレンジ色の夏の光の中で「ああ、デモってこういうことなんだ」ってこの日何度も思いました。

そして大飯原発再稼働阻止行動。今までの人生の中で、一番衝撃的でした。私はこれに参加したことで、今まで自分が見ていた世界(だと思っていたもの)、信じていたものなんかを、ほんとうに、粉々に、めっためたに、打ち砕かれた。それは、ネガティブな方向とポジティブな方向の両方で。

今まで、いろんな場面で、公安や警察が、何もしていない人を平気で不当逮捕したりするを見ていたけれど、それでもまだどこか信じようとしている部分があったと思う。でも大飯で「警察も、公安も、機動隊も、絶対に私たちを守らない」ってことを本当に思い知った。私は何度も機動隊員から脇腹にエルボーされて。IWJの人がものすごく頑張ってカメラを回してくれていたけど、絶対にそこに映らないように、見えないように攻撃してくる。「痛

い！殴らないで！暴力反対！」と言うと、白けた顔でそっぽを向く。そして、一列に盾を構えて怒号のような掛け声とともに一気に私たちを押し返してくるのが何度も何度も繰り返される。そんな中、異様に興奮した1人の機動隊員から盾で突き飛ばされて。私は、背中側から思いつき突き飛ばされた勢いで、しっかり組んでいたはずのスクラムから飛び出して前に倒れてしまった。すぐさま周りの人たちが抱き起こしてくれて、機動隊へも抗議してくれたし、さすがにほかの機動隊員も止めに入っていたけど、私は足がガクガクした。振り返ってその隊員の顔を見上げたとき、私を攻撃することに快感すらおぼえているように見えたから。「殺されるかもしれない」って、大袈裟でもなんでもなく、ほんとうにそう思った。

「命令」を受けて、全身をプロテクターで覆い、ヘルメットに安全靴、頑丈な盾という完全装備の機動隊が、全く丸腰の私たちに平気で襲いかかってくる。絶対にカメラがとらえない位置から用意周到に狙ってくる。しかも繰り返される攻防の中で彼らはどんどん興奮・高揚して攻撃がエスカレートしていく。これは「軍隊」以外のなにものでもないと思った。「警察」が、「軍隊」が、私たちを守ってくれるなんてことは、絶対にない、それを心底実感したし、今まで少しでも警察を信じたことのある自分自身を呪った。

でも。「私たちは攻撃されてるばかりじゃない、やられてばかりいるわけじゃない、みんな腕を組んで、声を出して、音を鳴らして、とんちをきかせて、笑いをもって、闘うことができるんだ」ってことを体で学んだのもここ。誰に何を言われなくても、あそこにいた全員が、頭とからだどころフル回転で、今の自分にできることをじゃんじゃん差し出していた。隣にいる人を助けたり、助けられたり、それがほんとうに自然で、当たり前。あの、「差し出す」という感じ、ほんとうにすごかった。最前線ではみんな、機動隊と一触即発で対峙しながらも、「誰か困ってる人、弱ってる人はいないか？」と常にアンテナをはっていて、そういう人が1人でもいればすぐさま自分が交替する、自分がむりならほかに助けを求める、のみもの・たべものを配る、声をかけ合う、励まし合う、っていう。なんていうか、「自分にできること」を「差し出せば差し出すほど」自分が元気になるっていう摩訶不思議なループ！

普段の生活では、よく知りもしない人のために自分のなにかもを「差し出す」なんてなんだかこわいし、誰かの身代わりに一番危険で一番しんどいところに行くなんて、できればしたくない。そういう自分の中のへんな〈あたりまえのこと〉がほんと見事にひっくりかえった！

さて、そんな経験を経て今は、「スワロウカフェ@京都」の一人として、「沖縄と基地・軍隊」について知り、考え、つながり、表現する場」と銘打ってあれこれやっています。スワロウカフェは「座りこみ」の「座ろうか」と「カフェ」をかけています。カフェのように、誰でも自由に出たり入ったり、くつろいだりできる気楽な場、開かれた場にしたい、という思いがあるので、ゆるい感じでやっています。

過去の活動を振り返ってみると、沖縄県普天間基地へのオスプレイ追加配備や、東村

高江でのオスプレイパッド建設工事、京都府京丹後市への米軍基地建設(軍事レーダー配備)反対の座り込み、それらについて京都防衛事務所への抗議申し入れ、京都府庁前スタンディングアピール、京都府議会前抗議座り込み、デモ、などなど・・・あれ？全然ゆるくない？でも座り込みのときはだいたいいつも、のみもの・たべものを用意。メニューはその時々によっていろいろです。かき氷、手作りお菓子、誰かの家にあったみかんや柿、コーヒー、さんぴん茶、カシスジュース、高江の野草酵素ジュース、チャイ、はちみつしょうがティー、ルイボスティーなど。おいしそうでしょう！路上にカラフルな布を敷いて段ボールちゃぶ台をセット。暑い季節はクーラーボックスに氷をスタンバイ、寒い季節はカセットコンロやポットで熱々のお茶を。わーい！

2013年9月には、京都シネマで映画「標的の村」の上映が行われたので、京都シネマさんをお願いをしてみたところ快諾していただき、なんと劇場ロビーにスワロウカフェブースを大きく出させていただきました。高江・普天間・辺野古・京丹後の写真展示、各種チラシ配布、カンパ制物販、署名集めなどを約2週間。ほかの映画を観に来られたお客さんも多く立ち寄ってくれて。同じように、京都市内の「バザールカフェ」や、京都大学の学祭にもブース出店。2013年12月15日には、新たな米軍基地が建設されようとしている京丹後市の市役所前で、大きな抗議集会が行われたので、そのIWJの生中継を京都市内の路上で流したり。

「座りこみ」からスタートしていることもあって、私たちは基本的に「路上」でやることを大切にしたいと思っています。路上では、呼びかけを無視されるのはまだいいほうで、通行人に突然文句を言われたり、怒鳴られたり。何もしてないのに警察や公安にわんさか囲まれたり、京都府議会前では警備員や府職員に「庁舎内でプラカード掲げないでください！」と思いきり排除されそうになったりした(でもしぶとく居座った)。それになんといっても暑いし寒い！

なのになんでわざわざ「路上」なのかっていうと、「ちょっとめんどくさい存在」になることって結構大切かなって思っているから。たとえばTVのニュースを見ていて、なんとなく「おかしくない？」「こんなんでいいの？」と感じる人はそこそこいると思うけど、そう感じたところで日々の生活に追われてそれどころじゃなかったり、かつての私がそうだったみたいに、ニュースの中のことはあくまで「ニュースの中」なのであって、自分のくらしとつなげて考えられなかったり。そうやってスルーしているひとつひとつのことに「これおかしいやん」「こんなかん」と声をあげること、道端に座り込んで手足バタバタ・・・じゃないけど、そんな感じでこどもみたいに素直にいちいちやるのが大事かなと。だってみんな「スルーしてる」んじゃないくて、「スルーするようにしむけられてる」んだと思うので。日々の生活で精一杯だもの。でも、誰でも、いやなものは「いや」って言っていいし、「なんで？それおかしくない？」って問いかけてみていいし、「私はこう思うんだけど」って投げかけてみていいし。そういうあたりまえのことひとつひとつを取り戻したいです。

実際、路上にいると怒鳴られるだけじゃなくいろんな出会いがあって。こどもたちが話を

真剣に聞いてくれて「米軍基地！？絶対いやや！」と超ストレートに意見してくれたり、「岩国にいたから米軍基地ができるとくらしがどうなるかよく知ってます」と静かに話してくれる人、「オスプレイ？あれはあかんわ！」とカンパしてくれる人などなど。まあでも、怒鳴られることも含めて「出会い」。どんなカタチであれ、そこに「やりとり」が生まれるきっかけになっていて、まさにそれこそが私たちがずっと奪われ続けていることのひとつじゃないかと思う。

2014年2月からは、京丹後の米軍基地建設問題をもっとたくさんの人に知ってもらいたいと思って「スワロウカフェ・トラベリング」と題して、本物のカフェでお茶を飲みながら京丹後のことをみんなで話す小さなおしゃべり会をやっています。やっていく中で気づいたことだけれど、やっぱりみんな「安心して自分の思いを出せる場・話せる場を求めている」んだってということ。というのも、ある時泣きだされた方がいて。「今まで京丹後の問題をよく知らなかった無関心な自分、無力な自分が悔しくて」って。そんなふうに普段の生活の中で涙できることってあるかな？別に京丹後のことだけじゃない、米軍基地の問題だけじゃない、何かもっと、普段無意識に押し込めてしまっているいろいろなキモチが、たまたまこの話をきっかけにしてずりりと出てきたんじゃないかな？と私は思った。そして別の参加者の方が言いました。「(人々の)〈分断〉って、何もお金だけで引き起こされるわけじゃない。思いを語れなくなる、自由に話せなくなることによって起こってくるんだ」って。

小さくても、こうやってふらっと集まって、自分が日頃なんとなく感じていること、気になっていること、不安に思うこと、こわいと思うこと、ちょっと分からないこと・・・そういうことを持ち寄って、お互いに、それを渡し合ったり、しげしげと眺めたり、裏返してみたり、放り投げてみたり・・・。上手なことば、上手な表現じゃなくていいから、ただ自由にのびのびと。そんな場が誰にも必要なんだと思う。そうやって自分のことばで自分の思いを語る事ができたら、どんな問題でも、その根っこをもう一度「わたし」のところへひっぱり戻せるんじゃないのかな。「国が」「エライ人が」「テレビが」「みんなが」「誰かが」言ってるから、じゃなく。「わたし」はどう思うか、「わたし」はどうしたいか、ってこと。そういう「場」をつくっていきたいし、私自身が一番そこに参加したいなと思う今日この頃です。

さて、冒頭にも書いたとおり、これはとても「個人的な」私の経験をただつらつらと書き並べた「私の物語」です。物語について松村洋氏はこうも書いています。「それぞれの人がそれぞれの物語を織りあげてゆくというのは、基本的に各人がインディペンデントであるということだ。(中略)それは、それぞれが孤立せずに個立しているような関係である。個立した者どうしがインタラクトする。交感する。(中略)要するに、異なったものどうしが、異なったままで呼応しあうこと。」

私は、「インディペンデント」というのは、「海を望む丘の上で、たった一人で風に吹かれながらすっきりと立っている」というようなことだと自分なりに解釈しています。松村氏の話は私にとっては、丘の上に立っている人同士が、お互いにおーいおーいと手を振りあっている

る、自分の立つ丘や、吹かれている風や、見渡す海のことをからだ全体で表現して伝えあっている・・・そんなイメージです。

初めて「生・労働・運動ネット・富山」の方々に会ってお話を聞いたとき、ああ、ここにも丘の上で風に吹かれている人たちがいる！と思いました。こんなにもかっこよく、しぶとく、すっくと立っている人々に出会えただけでも、「運動」というものに参加している甲斐があったというものです。この原稿は、ある意味では、「生・労働・運動ネット・富山」の方々にあてた、私からの熱いラブレターなのです。

ご案内

ラウンドテーブル・2014——「生」の〈註〉を行き交わす

テーブルをかこもう できるなら丸いテーブルを
共食するのもいい 腹が減っては戦はできぬ
そして共謀しよう 共同の武器の制作について
共同の武器 それは声の礫
テーブルをかこもう できるなら丸いテーブルを
その声の礫には 私たちの生が孕む
たくさんの〈註〉が詰まっている
テーブルをかこもう せめて一つでも席をあけて
ここに もはやいない者のために
ここに まだいない者のために

ラウンドテーブル・2014

第2回：「『B感覚』のBについての一考察」

●6月22日(日) PM1:30～4:00 サンフォルテ305号室

第3回：「原発避難と『自治』をめぐる」

●7月20日(日) PM1:30～4:00 サンフォルテ306号室

参加費＋資料代 500円

今、世界の至るところで「生」の困難の中から発せられる「もう、たくさんだ！」という叫び。それらの声には、たくさんの〈註〉が孕まれています。

「ラウンドテーブル・2014」では、それらの〈註〉を互いに交換しあうことを通じて、「第2ラウンド」のネオリベと戦争国家との「野合」に対して、私たちの側から、いかに「拒否」を突きつけるかを探ります。

ぜひ、ご参加ください。

- 「ネグリ、日本と向き合う」(NHK出版新書)を読んだ。ネグリ健在！慣れない手つきで、「音声」で聞くこともした。——それにしても、なんだ、あの最後の「閉会」の挨拶は？「日本学術会議」だって？「共ならぬ官の空間」だって？そう思うなら、違ったように構成してみろよ！
- 海の向こうのネグリ——ネグリという「世界を丸のみにするような」問題提起者に対面して欲しかったのは、この列島でいえば、そう、武藤一羊さん。そういう空間を設定できなかったことを、「日本学術会議」の関係者は恥じよ。
- 武藤一羊さんと言えば、「民衆憲章序論」というタイトルのもとでのネグリ論があった。——「民衆憲章」！ 私たちがく大きな事」を問い、訊ねることをしなくなって久しい。
- 私・たちは、大きいー小さいというスケールに乗ることはどうして出来ないが、安倍の「BIG MOUTH」に小さな亀裂をいれることぐらいできなくて、どうする。
- 「先物買い」の「銭失い」だって？いやいや失う「銭」など、はなからない。「他山の石」？「石」くらい「B感覚」でかき集めるさ。「磔」で撥ねた〈68〉年はどこへいった？

生・労働・運動ネット富山

代表 埴野謙二

2014年5月

〒 930-0009 富山市神通町3-5-3

TEL : 076-441-7843 FAX : 076-444-6093

URL : <http://net-jammers.net> E-mail:jammers@net-jammers.net